

仙台市文化財調査報告書第163集

# 富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

—富沢遺跡第70～75・77・79次、発掘調査報告書—

## 下ノ内遺跡

—第5次発掘調査報告書—

1992年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第163集

# 富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

——富沢遺跡第70~75・77・79次、発掘調査報告書——

## 下ノ内遺跡

——第5次発掘調査報告書——

1992年3月

仙台市教育委員会



富沢遺跡第77次調査 漆製品出土状況



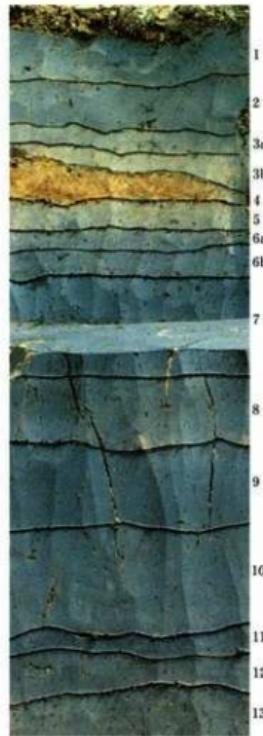
富沢遺跡第77次調査 木簡



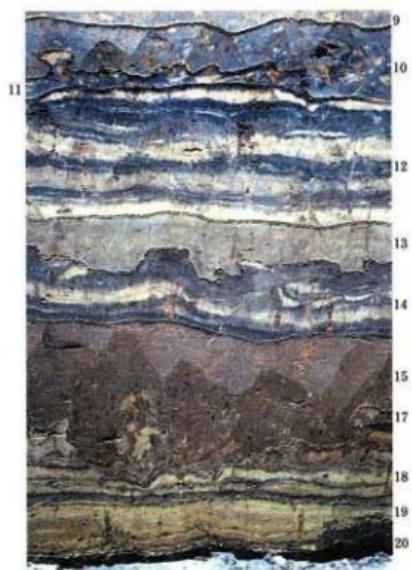
富沢遺跡第70次調査 基本層序



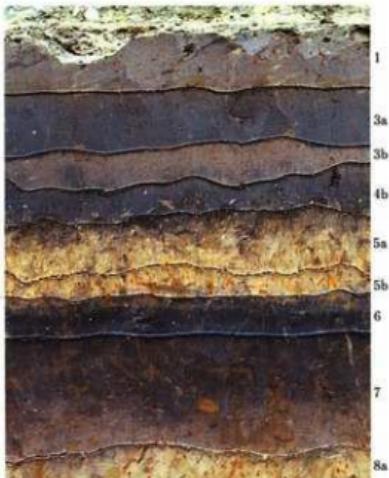
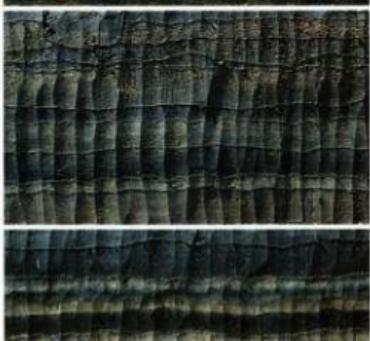
富沢遺跡第71次調査 基本層序



富沢遺跡第72次調査 基本層序



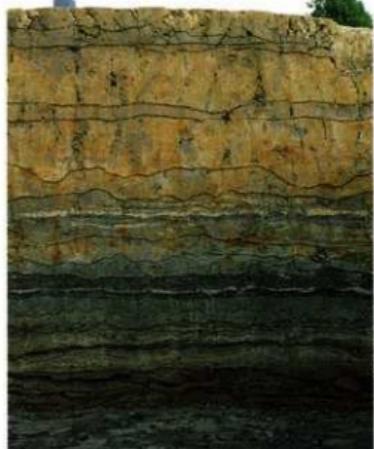
富沢遺跡第73次調査 基本層序



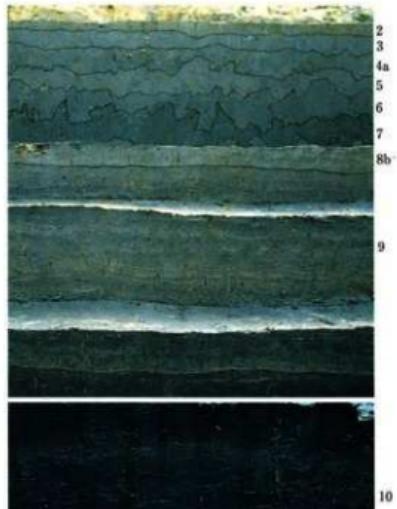
富沢遺跡第75次調査 基本層序



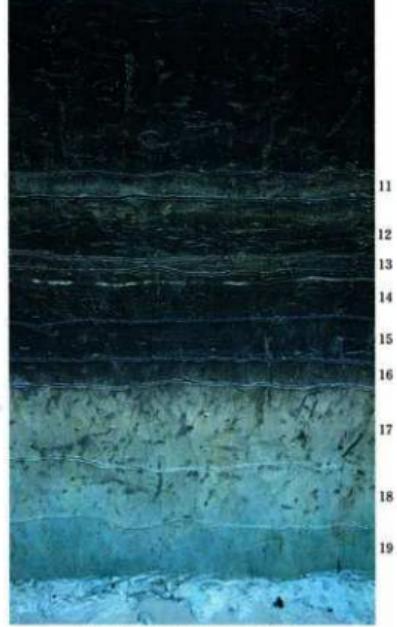
富沢遺跡第74次調査 基本層序



富沢遺跡第77次調査 基本層序(1)



富沢遺跡第77次調査 基本層序(2)



富沢遺跡第79次調査 基本層序

## 序 文

昭和57年、仙台市は山口遺跡において初めて水田跡を検出し、同年より開始した富沢地区の高速鉄道の試掘調査により当地域に広大な水田跡の存在を確認することができました。昭和58年にこれらの調査結果に地形的条件を加え、新たに「富沢水田遺跡」を登録しました（昭和62年「富沢遺跡」に改称）。

富沢遺跡は仙台市南西部の富沢、泉崎、袋東、長町南等に広がる総面積90ヘクタールに及ぶ水田跡を中心とした遺跡で、名取川と広瀬川に挟まれた沖積平野に立地しています。当遺跡は昨年度まで69次に渡る調査が実施され、奈良時代を除く弥生時代から近世までの水田跡が重層的に検出されています。このうち、弥生時代の水田跡の検出は東北地方中部における稻作農耕の起源を解明する上での貴重な資料となっています。また、弥生時代の水田跡の下層からは縄文時代の遺構や遺物が確認され、さらにその下層からは約20,000年前の最終氷河期の人間の生活の様子や自然環境そのものが生きしい状態で発見されています。

しかし、この富沢地区は昭和50年代の区画整理事業を契機として年毎に開発が進み、とりわけ昭和63年の地下鉄開業により、一層都市化が進んでいます。このような中にあって、平成3年度は富沢地区に所在する富沢遺跡、下ノ内遺跡におきまして11件の発掘調査を実施致しました。本報告書はそのうち9件の調査成果をまとめたものであります。

先人の残した文化財資源を保護し、保存活用を図りつつ、後世に継承していくことは私たちに課せられた責務と考えております。ここに報告する調査成果がこうした意味で研究者のみならず市民の皆様に広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査並びに本報告書の刊行に際しましては多くの方々の御協力、御助言を頂きましたことを深く感謝申し上げ序と致します。

平成4年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

## 例　　言

1. 本書は、平成3年度富沢地区受託事業に係わる富沢遺跡第70～75・77・79次発掘調査報告書と、下ノ内遺跡第5次発掘調査報告書であり、すでに公表された広報紙等に優先するものである。
2. 報告書刊行のための遺物整理は、文化財調査係 太田昭夫・工藤哲司・渡部弘美・斎野裕彦・平間亮輔・五十嵐康洋が担当し、陶器・磁器の鑑定は佐藤洋が行った。
3. 本書の編集は斎野裕彦が行った。
4. 関連科学については、花粉分析を守田益宗氏（東北大学）、プラント・オパール分析を古環境研究所、樹種同定を高橋利彦（木工合会い）、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
5. 本文の執筆分担は下記のとおりである。

「富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)」

守田益宗：第3章第1節

古環境研究所：第3章第3節

高橋利彦：第3章第2節1

パリノ・サーヴェイ株式会社：第3章第2節2

太田昭夫：第2章第8節

渡部弘美：第2章第2・3節・6節1・2・3-(1)・(3)・(4)

斎野裕彦：第2章第1節4、第6節3-(2)-①、第4章

平間亮輔：第1章、第2章第5節

五十嵐康洋：第2章第1節1～3・5、第4・7節

「下ノ内遺跡」

工藤哲司

6. 石材の鑑定は、東北大学 蟹沢聰史氏にお願いした。

7. 種子の同定は東北大学 星川清親氏、庄司駒男氏にお願いした。

8. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々の適切な助言・指導をいただいた。

蟹沢聰史・山田しょう・永嶋正春・伊達泰宗・星川清親・庄司駒男・松本秀明（敬称略）

## 凡　　例

1. 本報告書の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
2. 本書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
3. 図中・本文中使用の方位の北（N）は、全て真北である。
4. 遺構名の略語として、S I：竪穴住居跡・竪穴遺構 S D：溝跡 SK：土坑 SR：河川跡 SX：性格不明遺構を使用した。
5. 土器で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。
6. 本文中での「灰白色火山灰」（庄子・山田：1980）の降下年代は、現在、10世紀前半頃と考えられている（白鳥：1980）。
7. 本文中での「擬似畦畔B」とは、水田畦畔の直下層（自然堆積層）上面に認められる畦畔状の高まりを指す（斎野：1987）。

## 目 次

### 序 文 例 言

#### 富沢・下ノ内浦・山口遺跡(4)

第1章 富沢遺跡のあらまし	1
1. 遺跡の概要	1
2. 泉崎浦遺跡について	1
3. 水田跡の認定基準	1
第2章 調査結果	7
第1節 富沢遺跡第70次調査	7
1. 調査方法	7
2. 基本層序	7
3. 検出遺構と出土遺物	8
4. 石器の使用痕分析	13
5. 遺構の所属年代のまとめ	17
第2節 富沢遺跡第71次調査	18
1. 調査方法	18
2. 基本層序	18
3. 検出遺構と出土遺物	18
4. まとめ	19
第3節 富沢遺跡第72次調査	20
1. 調査方法	20
2. 基本層序	20
3. 検出遺構と出土遺物	23
4. まとめ	24
第4節 富沢遺跡第73次調査	25
1. 調査方法	25
2. 基本層序	25
3. 検出遺構と出土遺物	26
4. 遺構の所属年代とまとめ	29
第5節 富沢遺跡第74次調査	31
1. 調査方法	31
2. 基本層序	32

3. 検出遺構と出土遺物	34
4. 遺構の所属年代とまとめ	45
第6節 富沢遺跡第75次調査	46
1. 調査方法	46
2. 基本層序	46
3. 検出遺構と出土遺物	47
4. 遺構の所属年代とまとめ	57
第7節 富沢遺跡第77次調査	58
1. 調査方法	58
2. 基本層序	60
3. 検出遺構と出土遺物	62
4. 分析・同定	91
5. 遺構の所属年代とまとめ	94
第8節 富沢遺跡第79次調査	97
1. 調査方法	97
2. 基本層序	97
3. 検出遺構と出土遺物	98
4. 遺構の所属年代とまとめ	105
第3章 分析・同定	106
第1節 花粉分析	106
富沢遺跡（第74次調査）の花粉分析	106
第2節 樹種同定	110
1. 富沢遺跡第70次・72次・73次・77次調査出土材の樹種	110
2. 富沢遺跡79次調査で出土した材の樹種	111
第3節 プラント・オパール分析	112
仙台市富沢遺跡（第70, 71, 73, 74, 75, 77, 79次調査）におけるプラント・オパール分析	112
第4章 まとめ	118
下ノ内遺跡	
1. 調査要項	155
2. 調査方法	155
3. 基本層序	157
4. 検出遺構と出土遺物	158
5. 遺構の所属年代とまとめ	158

## 挿表目次

### 富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

第1表 遺跡地名表	2	第5表 7層出土石器の類別と石材の関係	50
第2表 平成3年度 富沢遺跡調査要項	4	第6表 8層出土石器の類別と石材の関係	50
第3表 4層水田跡畦畔計測表	34	第7表 7層・8層出土石器観察表	55
第4表 5層水田跡畦畔計測表	36	第8表 昆虫遺体	93

## 挿図目次

### 富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

第1図 周辺の遺跡	3	第24図 16a層平面図	28
第2図 富沢遺跡全体図	5・6	第25図 出土遺物	28
第3図 調査区位置図・設定図	7	第26図 その他の出土遺物	29
第4図 基本層序	8	第27図 調査区位置図・設定図	31
第5図 出土遺物	9	第28図 基本層序	32
第6図 S D 2・3・S X 4 平面図 S D 2・3 断面図	9	第29図 4層水田跡平面・断面図	35
第7図 S D 1・3 出土遺物	9	第30図 5層水田跡平面図	36
第8図 9層水田跡平面・断面図 石器・石庖丁出土状況	10	第31図 S K 1 平面・断面図	37
第9図 6層上面で確認された9層水田跡 類似畦畔A平面図	11	第32図 10層上面平面・断面図	39・40
第10図 出土遺物	11	第33図 10層上面標高	41
第11図 10層平面図	12	第34図 12層水田跡平面・断面図	42
第12図 15層平面図	13	第35図 出土遺物	44
第13図 9層出土石器実測図・光沢分布図(1)	14	第36図 調査区位置図・設定図	46
第14図 9層出土石器実測図・光沢分布図(2)	15	第37図 基本層序	47
第15図 調査区位置図・設定図	18	第38図 3a層水田跡	48
第16図 基本層序	19	第39図 3a・3b層水田跡出土遺物	49
第17図 調査区位置図・設定図	20	第40図 7層・8層出土石器実測図(1)	51
第18図 壁断面及び遺構平面図	21・22	第41図 7層・8層出土石器実測図(2)	52
第19図 基本層序概略	23	第42図 7層・8層出土石器実測図(3)	53
第20図 出土遺物	24	第43図 類別の最大長、重さ、 石材との関係(7層)	54
第21図 調査区位置図・設定図	25	第44図 類別の最大長、重さ、 石材との関係(8層)	55
第22図 基本層序	26	第45図 調査区位置図・設定図	58
第23図 7層水田跡平面・断面図	27	第46図 グリット配置図	59
		第47図 基本層序	60
		第48図 3b層・4b層水田跡平面図	62

第49図	柱状圖	63・64	第70図	出土遺物(2)	91
第50図	5層上層平面圖	65	第71図	出土遺物(3)	92
第51図	6層上面平面圖	67・68	第72図	調査区位置圖	97
第52図	S I 1 平面圖・断面圖	70	第73図	調査区設定圖	97
第53図	S I 1・2 平面圖・断面圖	71・72	第74図	基本層序	98
第54図	S I 1 出土遺物	74	第75図	5層水田跡平面圖	99
第55図	S I 3 平面圖・断面圖	75	第76図	6層水田跡平面圖	100
第56図	S I 1・3 出土遺物	76	第77図	6層水田跡木材群	100
第57図	S I 3 出土遺物	77・78	第78図	6層水田跡断面圖	100
第58図	S D 1・2・4・5 断面圖	79	第79図	杭セクション圖	100
第59図	S D 1・4 出土遺物	80	第80図	8a層水田跡平面圖	101
第60図	S K 1・2 平面・断面圖	81	第81図	6層水田跡出土遺物(1)	102
第61図	S K 3・4 平面・断面圖	82	第82図	6層水田跡出土遺物(2)	103
第62図	S K 5 平面・断面圖	82	第83図	6層水田跡出土遺物(3)	104
第63図	出土遺物(1)	83	第84図	6層水田跡出土遺物(4)	105
第64図	10層水田跡平面・断面圖	85	下ノ内遺跡		
第65図	10層水田跡平面圖	86	第1図	調査区位置圖・設定圖	155
第66図	17a層水田跡平面圖	87	第2図	調査区平・断面圖	156
第67図	18a層水田跡平面圖	88	第3図	下ノ内遺跡の基本層位	157
第68図	19a層水田跡平面圖	89	第69図	17層18層19層断面圖	90

## 写真図版目次

富沢遺跡第70次調査		写真 9 調査全景	129	
写真 1	9層水田跡大柱断面	127		
写真 2	9層水田跡検出状況	127	富沢遺跡第73次調査	
写真 3	15層溝状遺構状況	127	写真10 土層断面	130
写真 4	石庖丁出土状況	128	写真11 7層水田跡検出状況	130
富沢遺跡第71次調査		写真12 杭断面	130	
写真 5	基本層序	128	写真13 木製農具出土状況	131
富沢遺跡第72次調査		富沢遺跡第74次調査		
写真 6	1号河川跡（足跡）検出状況	128	写真14 基本層序（南壁東端部）	131
写真 7	10号河川跡 樹木検出状況	129	写真15 4層水田跡検出状況 (西部、畦畔No.2・3、南より)	131
写真 8	調査区東壁断面	129		

写真16	5層水田跡確認状況 (東部、畔群No.3・4、南より) .....	132	写真40	東区19a層水田跡(西より) .....	140
写真17	10層水田跡確認状況 (南東部、南西より) .....	132	写真41	富沢遺跡第79次調査 調査風景(西より) .....	140
写真18	10層水田跡検出状況(南より) .....	132	写真42	5層水田跡(北より) .....	141
写真19	12層水田跡確認状況 (南から、奥は4層水田跡手前は 5層水田跡検出状況) .....	133	写真43	6層水田跡(北より) .....	141
			写真44	6層水田跡木材群(東より) .....	141
			写真45	8a層水田跡確認状況(北東より) .....	142
			写真46	8a層水田跡東半部(南西より) .....	142
			写真47	材の顕微鏡写真(1) バリノサツュイ株式会社 .....	143
写真20	基本層序 .....	133	写真48	材の顕微鏡写真(2) 高橋利彦 .....	143
写真21	3b層 暫似畔群検出状況 .....	133	写真49	プラント・オバール顕微鏡写真 .....	144
写真22	調査区全景 .....	134	写真50	石器表面及び光沢面の顕微鏡写真 .....	145
			写真51	第70次調査出土遺物 .....	146
			写真52	第72次・第73次調査出土遺物 .....	147
写真23	SK2断面(西より) .....	134	写真53	第74次調査出土遺物 .....	148
写真24	SK2完掘全景 .....	134	写真54	第75次調査出土遺物(1) .....	149
写真25	SD4完掘全景(東より) .....	135	写真55	第75次調査出土遺物(2) 第77次調査出土遺物(1) .....	150
写真26	SD2完掘全景(東より) .....	135	写真56	第77次調査出土遺物(2) .....	151
写真27	SD4遺物出土状況 .....	136	写真57	第77次調査出土遺物(3) .....	152
写真28	南区S11・S12確認状況 .....	136	写真58	第77次調査出土遺物(4) .....	153
写真29	S11完掘全景(西より) .....	136	写真59	第79次調査出土遺物 .....	154
写真30	S12完掘全景(東より) .....	137			
写真31	S11遺物出土状況 .....	137			
写真32	S11木棺出土状況 .....	137			
写真33	S13断面(北より) .....	138			
写真34	S13遺物出土状況(北より) .....	138			
写真35	SK5確認状況(南より) .....	138	写真1	III-4層出土繩文土器 .....	159
写真36	西区10層水田跡(西より) .....	139	写真2	櫻乱部完掘状況 .....	160
写真37	東区10層水田跡(西より) .....	139	写真3	基盤疊層検出状況 .....	160
写真38	東区17a層水田跡(東より) .....	139	写真4	下ノ内遺跡第5次調査区十層断面 .....	160
写真39	東区18a層畦畔 .....				
	17a層疑似畔群B(西より) .....	140			

# 富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)

——富沢遺跡第70～75・77・79次，発掘調査報告書——

# 第1章 富沢遺跡のあらまし

## 1. 遺跡の概要

富沢及びその周辺の遺跡の歴史的環境及び地形・地質に関しては山口遺跡第2次調査報告書（田中他：1984）、富沢遺跡第15次調査報告書（斎野他：1987）、富沢遺跡第30次調査報告書（太田他：1991）に詳しいので、ここでは概要を述べることとし、その他「泉崎浦遺跡」に関わる変更事項についてのみ触れることとした。

富沢遺跡は仙台市南部の太白区鹿野、長町、長町南、泉崎、富沢に所在する。遺跡は名取川と広瀬川に挟まれた沖積地（郡山低地）西部に位置し、北西部を丘陵、他を自然堤防で囲まれた後背湿地を中心に広がっている。現在は土地区画整理事業による盛土のため旧地形を見ることはできないが、盛土以前の標高は9～16m、総面積は約90haである。

昭和51年、本遺跡南側の六反田遺跡で「アゼ状遺構」が検出され、その後昭和57年には隣接する山口遺跡において仙台市では初めて水田跡が検出された。また同時に富沢地区においても高速鉄道に係わる試掘調査及び本調査の結果から水田跡の存在が確認された。このため調査成果と共に地形的特徴を考慮して、昭和58年新たに「富沢水田遺跡」として登録された。その後居住域等の検出によって昭和62年には「富沢遺跡」と改称され、平成2年には遺跡範囲の北東部が拡大されている。調査は昨年度まで69次の調査が実施され、今年度は第70～79次調査が行われたが、この他に宮城県教育委員会、民間の調査団による調査も行われている。

## 2. 泉崎浦遺跡について

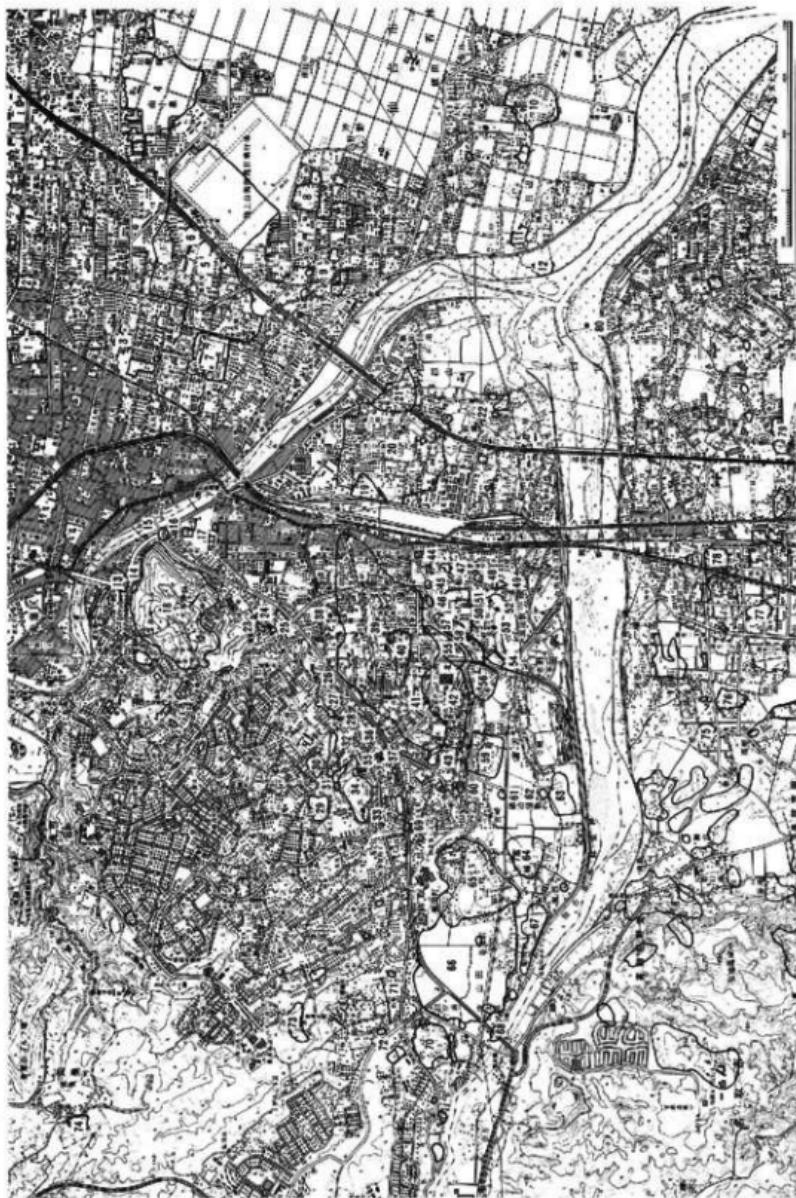
遺跡中央部の微高地部分を中心とする約5haの地域は從来「泉崎浦遺跡」として登録され、これまで4次にわたる調査が実施されてきた。当初、「泉崎浦遺跡」は低湿地に立地する「富沢水田遺跡」に対して居住域等の存在を想定した位置付けがなされていたが、その後に泉崎浦遺跡でも水田跡が検出されたこと、また「富沢水田遺跡」が居住域などの検出によって「富沢遺跡」と改称されたことなどによって両者間において遺跡構造の類似性が認められるようになった。このため、今年度からは「泉崎浦遺跡」を「富沢遺跡」に包括して調査・報告を行うこととし、調査次数も富沢遺跡として与えている。今回は富沢遺跡第70次調査がこれに相当する。なお「泉崎浦遺跡」としての登録は從来通りとする。

## 3. 水田跡の認定基準

現在、富沢遺跡における水田跡の認定基準に関しては「水田跡の基本的理義—仙台市における水田跡の検出と認定」（仙台農耕文化勉強会：1990）を基準としており、概要については前年度の富沢地区の報告書でも抜粋している。詳細についてはこれらを参照されたい。

第1表 遗跡地名表

地名	立地	年代	年 代	遺跡名	立地	年 代
雞南北分水嶺	自然地勢	桑貢、平安、近世	41	新嘗古道	自然湿地	古墳（後）
社參區分水嶺	自然地勢	桑貢、平安、近世	42	山口遺跡	自然地勢、後背遺跡	純定・平安
3 通源古塚	自然地勢	古墳（後）	43	宮河流水遺跡	自然地勢	桑貢、平安
仙台東北條古塚	半坡平地	桑貢、平安	44	長町六丁目遺跡	自然地勢	桑貢、平安
雨小空遺跡	自然地勢、後背遺跡	鶴文（後）	45	元長流水遺跡	自然地勢	桑貢、平安
6 達見宿古塚	自然地勢	古墳（前）	46	久安遺跡	自然地勢	古墳、平安
7 菊林遺跡	自然地勢	六葉、中若、江戸	47	新田遺跡	自然地勢	桑貢、平安
8 沖野遺跡	自然地勢	中若	48	北慶寺遺跡	自然地勢	桑貢、平安
9 神樂遺跡	自然地勢	鶴文（後）・平安	49	加賀流水遺跡	自然地勢	桑貢、平安
10 今來遺跡	自然地勢	鶴文（後）・近世	50	大野山古墳群	自然地勢	古墳（中・後）
11 三邊遺跡	自然地勢	芝町	51	工の坂古墳	自然地勢	古墳
12 仁治遺跡	河（後）	古墳（中）	52	鳥居垂古墳	自然地勢	古墳（後）
13 爰寄山壩穴群	丘陵	古墳（本）・桑貢	53	春日古墳	自然地勢	古墳（後）
14 大手山南側穴群	丘陵	吉良（後）	54	伊古田遺跡	自然地勢	吉良、桑貢、平安
15 宇津守壩穴群	河岸段丘	古墳（末）	55	下ノ木遺跡	自然地勢、後背遺跡	桑貢、平安
16 犬所遺跡	河岸段丘	鶴文	56	下ノ木遺跡	自然地勢	鶴文、馬立・古墳、平安
17 電家古塚	古墳	古墳（中）	57	六反田遺跡	自然地勢	鶴文・江戸
18 佐古遺跡	自然地勢	鶴文（後）・吉良	58	五反田古墳	自然地勢	古墳
19 甚山遺跡	自然地勢	古墳（本）・桑貢、中若	59	富士原遺跡	自然地勢	桃邑
20 甚山遺跡	自然地勢	古墳（本）・内溝町	60	坂ノ内溝町	自然地勢	六葉、桑貢、平安
21 北首遺跡	自然地勢	室町、二戸	61	網走郡A遺跡	自然地勢	古墳・桑貢、平安
22 久上1号遺跡	自然地勢、後背遺跡	六葉、桑貢、平安	62	錦小笠郡B遺跡	自然地勢、後背遺跡	鶴文、桑貢、平安
23 地野里散遺跡	丘陵	吉良・桑貢、平安	63	六本松遺跡	自然地勢	桑貢、平安
24 一塙古塚	後背遺跡	古墳（後）	64	南ノ東遺跡	自然地勢、後背遺跡	鶴文・桑貢、平安
25 豊野丁目遺跡	河床段丘	鶴文・吉良・桑貢、平安	65	上野段丘	河床段丘	鶴文（44）・桑貢、平安
26 二塙古塚	後背遺跡	三浦	66	山田先祖遺跡	河床段丘	鶴文・吉良・一戸
27 秋谷南敷遺跡	河床段丘	桑貢、平安	67	船瀬原遺跡	河床段丘	鶴文・吉良・兩丘、平安
28 砂谷古塚	河床段丘	吉良	68	東ノ森丘遺跡	河床段丘	鶴文・吉良、平安
29 岸ノ口遺跡	丘陵	鶴文（早・中）・吉良、平安	69	西古田駕跡	丘陵	吉良、平安
30 土手内溝町	丘陵	鶴文（中）・平安	70	山田上・台跡	河床段丘	鶴文（早・中・後）、江戸・平安、江戸
31 小手内溝穴群	丘陵	古墳・桑貢	71	妙子子	丘陵	江戸
32 手子の露塚	丘陵	古墳・桑貢	72	七郎漢跡	河床段丘	社石谷、鶴文（早・中・44）、平安、江戸
33 古尻遺跡	丘陵	吉良・桑貢、平安	73	蟹井古道跡	丘陵	鶴文、平安・中若
34 三井墓遺跡	丘陵	鶴文（早・中）・吉良	74	青巌山遺跡	丘陵	社石谷
35 金山塚跡	丘陵	古墳（中）	75	松ノ木遺跡	自然地勢	平安・中若・近世
36 金沢古塚	河床段丘	吉良	76	簡近遺跡	自然地勢	八葉、桑貢、平安
37 斎可古塚	河床段丘	吉良（後）	77	美濃駕跡	自然地勢	鶴文・吉良、桑貢、平安
38 合谷八幡古塚	後背遺跡	古墳（後）	78	安久東遺跡	自然地勢	鶴文・近世
39 寒川遺跡	後背遺跡	鶴文・記夢	79	佐用遺跡	自然地勢、後背遺跡	鶴文・吉良、平安、宇都
40 余崎浜遺跡	自然地勢・後背遺跡	鶴文・吉良・平安・近世	80	大野山古墳	河床段	古墳

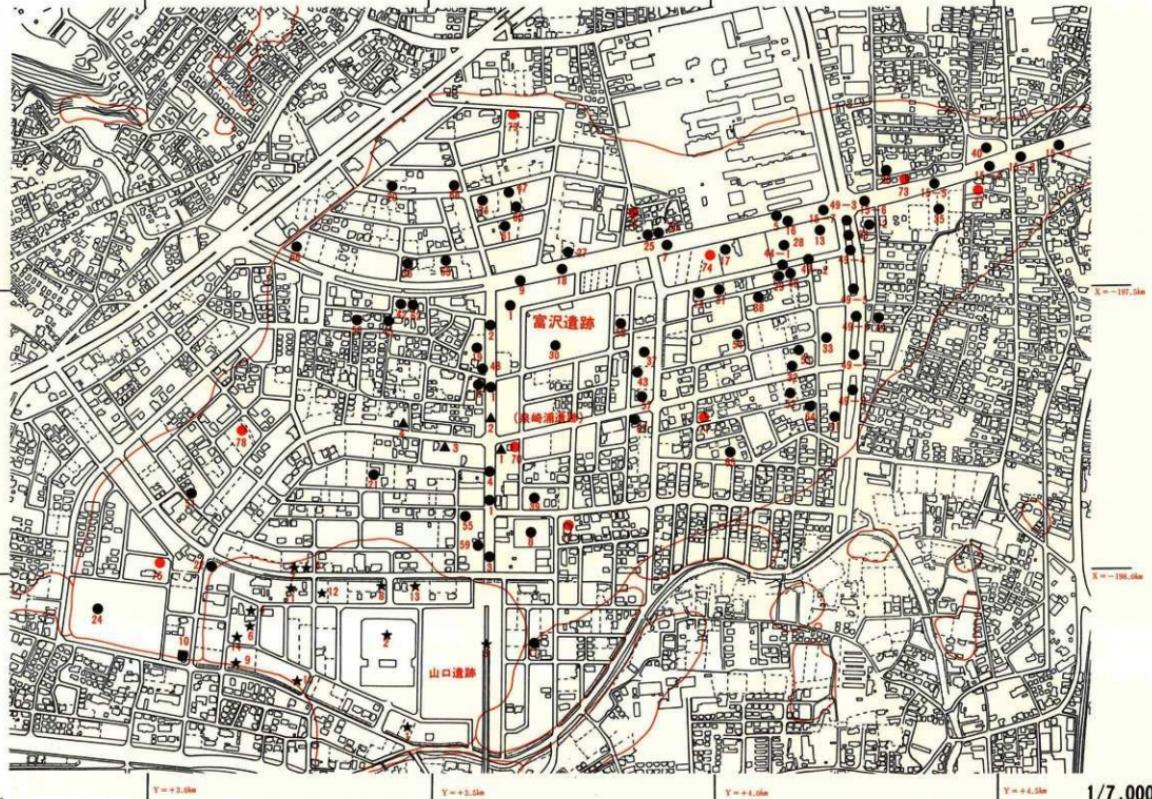


第1図 周辺の遺跡

第2表 平成3年度 蒜沢過端調査要項

調査次数	所在地	調査季節	調査面積	立地	位置	杭A	現状	現標高	旧標高	協力者	担当職員
富沢第70次	長野南四丁目12	平成3年4月15日～5月28日	約70㎡	最高地附近	最高地附近	X=-197.78019m Y=+3.63562m	宅地	11.58m	10.78m	鶴門実業家	五十嵐耕作
富沢第71次	長野南三丁目14	平成3年4月15日～4月24日	約15㎡	後背湿地	北	X=-197.73183m Y=+3.88027m	宅地	10.65m	8.75m	鶴東工業和小倉	深部弘美
富沢第72次	長野南四丁目21	平成3年5月8日～6月19日	約100㎡	後背湿地	南	X=-197.91651m Y=+3.76707m	宅地	10.75m	9.65m	鶴鳴台土地開発	渡部弘美
富沢第73次	長野七丁目11	平成3年6月10日～6月27日	約33㎡	後背湿地	北	X=-197.94619m Y=+4.35711m	宅地	11.00m	9.80m	佐藤良和	五十嵐耕作
富沢第74次	長野南二丁目1	平成3年7月4日～9月12日	約284㎡	後背湿地	北	X=-197.83864m Y=+3.93957m	水田	9.9m	9.9m	鶴鳴台土地	川名秀一
富沢第75次	富沢二丁目5	平成3年7月1日～8月22日	約115㎡	後背湿地	西	X=-197.97546m Y=+3.76706m	宅地	14.7m	13.1m	社会福祉法人仙作町事業協会	深部弘美
富沢第77次	長野南一丁目4	平成3年8月22日～平成4年1月7日	約310㎡	最高地	北	X=-197.82663m Y=+4.45154m	宅地	10.80m	9.84m	鶴鳴台土地開発	五十嵐耕作
富沢第79次	鶴野二丁目209	平成3年11月11日～12月5日	約50㎡	後背湿地	北	X=-197.19311m Y=+3.65160m	宅地	12.50m	11.48m	鶴東危不動産	太田留夫

\* 富沢第78次調査 = 「仙台市芦野の過端詳見」に趣文所取  
富沢第78次調査 = 平成4年度地籍調査子定



第2図 富沢遺跡全体図

## 第2章 調査結果

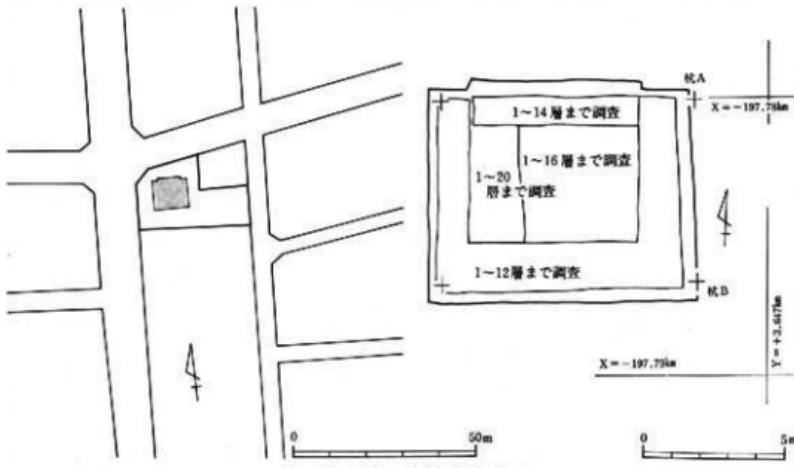
### 第1節 富沢遺跡第70次調査

#### 1. 調査方法

調査区の設定面積は、約  $8 \times 9\text{ m}$  ( $72\text{ m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）上面までを重機で排除し、以下は人力により行なった。尚、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。12層上面までは、調査区全面の精査を実施し、12層以下は、約  $5 \times 6\text{ m}$  の試掘区を設けて掘り下げた（16層以下は約  $2 \times 4\text{ m}$ ）。遺構の測量は、杭A・Bを基準にして実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している。（杭A：X = -197.78019km Y = +3.63576km 杭B：X = -197.78664km Y = +3.63562km）。

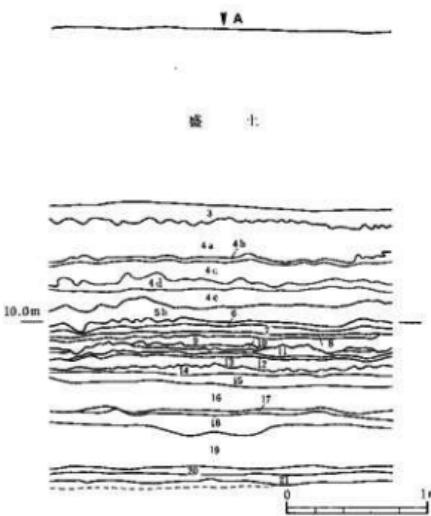
#### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別20層、細別25層が確認された。各層の土質は、1～4d層が砂または砂質シルトで、5a、5b層は粘土である。6層～16層までは泥炭質粘土であるが、13層～16層は泥炭化が進んでる。17層～19層は砂質粘土から細砂で、20層はシルト質粘土になつ



第3図 調査区位置図・設定図

ている。グライ化は17層以下から漸次進んでおり、現代のものをぞく水田土壤は、9層である。また、水田土壤の可能性のあるのは、3層・5a層・13層・14層・16層である。遺物出土層は、溝の埋土内からと9層からである。全体的な層の傾きは、北側にわずかに下がる。



第4図 基本層序

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 2層上面

##### SD 2・SD 3・杭列1・SX 4

2層上面において平行する溝跡2条(SD 2・SD 3)を検出し、SD 3に伴う杭列を検出した。SX 4を調査区の南西部で検出した。SD 2・SD 3の方向は共にN-50°-Wである。

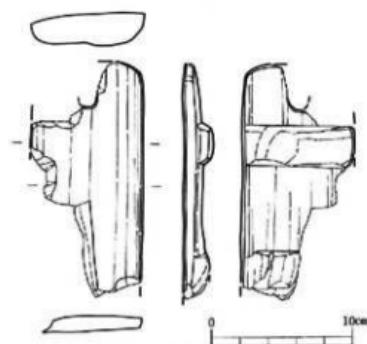
SD 2は上端幅50~60cm、下端幅約25cmである。深さは24cmで、ほぼ垂直に掘り込まれ底面は平坦で、埋土は2層である。出土遺物はない。

SD 3は、上端幅100~130cm、下端幅20~70cmである。深さは約30cmである。

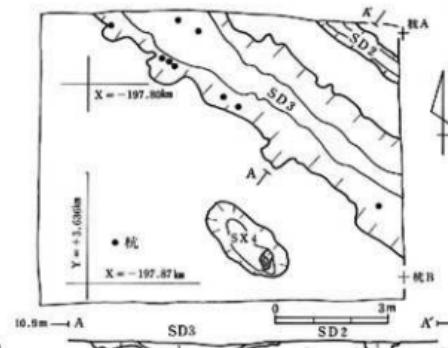
層序	色	性質	層厚	變化状	盛入物	標
1	オーブ・アモルフ色 5Y5/1	新鮮シルト	2cm~32cm	—	2層プロフ (下部)	現代の水田土壤
2	灰 色 7.5Y4/1	新鮮シルト	2cm~22cm	あり	0層~4cm層・白色土 (全体)	
3	オーブ・アモルフ色 5Y5/1	新鮮シルト	2cm~6cm	—		10YR1.7/1無皮状 (水田土壤?)
4a	褐色 10YR4/1	シルト	4cm~24cm	—		
4b	褐色 10YR4/3	新鮮シルト	2cm~6cm	—	マンゴン粒+0.5mm~2mm層 (プロフ)	
4c	褐色 10YR4/4	シルト	6cm~14cm	—	マンゴン粒 (全体)	
4d	褐色 2.5Y3/2	新鮮シルト	2cm~10cm	—		
4e	褐色 10YR4/4	シルト	2cm~12cm	あり (下部)	—	
5a	オーブ・アモルフ色 5Y4/1	泥炭質粘土	10cm~12cm	—		下部に下位の層プロフ・水田土壤?
5b	オーブ・アモルフ色 5Y4/1	泥炭質土上	6cm~4cm	—		
6	褐色 5Y2/1	泥炭質粘土	2cm~6cm	—		
7	オーブ・アモルフ色 7.5Y3/1	泥炭質粘土	2cm~6cm	—		
8	褐色 5Y3/1	泥炭質粘土	1cm~2cm	—		
9	褐色 2.5G Y2/1	泥炭質粘土	3cm~4cm	—	炭化物・マンゴン集塊 (層中) 白色粒	水田土壤
10	褐色 5Y2/1	泥炭質粘土	2cm~6cm	—		部分的分布
11	オーブ・アモルフ色 7.5Y3/2	泥炭質粘土	1cm~8cm	—	炭化物・マンゴン集塊 (層下部)	
12	オーブ・アモルフ色 5Y3/2	泥炭質粘土	1cm~4cm	—	炭化物	炭化物分体 (3.5cm~1cm)
13	褐色 3Y2/1	泥炭質粘土	4cm~12cm	—	炭化物・マンゴン集塊	(水田土壤?)
14	褐色 7.5Y2/1	泥炭質粘土	2cm~10cm	—		(水田土壤?)
15	オーブ・アモルフ色 3Y3/2	泥炭質粘土	2cm~10cm	—	マンゴン (層上部)	
16	褐色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	1cm~24cm	—		(水田土壤?)
17	褐色 2.5Y2/1	新鮮シルト	2cm~8cm	—		層下部砂質分体
18	褐色 2.5Y3/1	新鮮シルト	0cm~15cm	—		層下部砂質分体 (8~2cm)
19	オーブ・アモルフ色 2.5G Y4/1	新鮮シルト	27cm~39cm	—	砂 (層中)・疊大分体	疊生2.5G Y2/1黒墨状・グライ化
20	オーブ・アモルフ色 5G Y4/1	シルト・新鮮シルト	3cm~6cm	—	マンゴン (層中)	

埋土は2層で、堆積土中から下駄1点（第5図）と陶器片10点を出土している。下駄は約1/3を欠損し、鼻緒穴と考えられる穴が1つある。歯は2枚あり、著しくすり減っている。また、歯をついた跡は認められないので連歯であると考えられる。陶器片のうち図化できたのは1点だけで（第7図1）、相馬灰釉碗であると考えられる。

杭列1はSD3の南辺で検出している。これらの杭列の中には上部に焦痕を持つものもある。また、溝の中央部で杭を2本検出しているがこの杭列に伴うものかどうかはわからない。SD

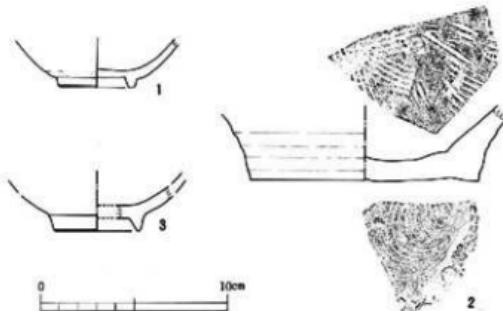


第5図 出土遺物



第6図 SD2・3・SX4平面図・SD2・3断面図

名前番号	出土地番号	出土遺物・部位	種別	形	大きさ	厚さ	色	表面状況	鼻緒穴径	木取り	備考
第5図	SI-5	SD3	下駄	ケヤキ属	16.8cm	7.9cm	2.1cm	1.3cm	1.2cm	無	目子供用?



No.	平高圓底	通幅・通段	種別	形	深	底	色調			特
							外	内	底	
1 SI-7	SD1	脚付	筒	下駄 1/2	4cm	浅黄色	淡黄色	淡黄色	无	擦り出し西台、内・外面部有裂隙、褐色、18c?
2 SI-8	SD1	脚付	筒	下駄 1/5	3.0cm	灰	暗赤褐色	暗赤褐色	无	擦り出し西台、内・外面部有裂隙、古褐色、中空
3 SI-5	SD3	脚付	筒	下駄 1/4	5.6cm	粘灰色	粘灰色	粘灰色	无	擦り出し西台、内・外面部有裂隙、褐色、18~19c

第7図 SD1・3出土遺物

3の上部に区画整理前の溝を検出し、陶磁器片を出土している（第7図2・3）。

S X 4は、上端長軸250cm、短軸125cmの楕円形の落ち込みで埋土は1層である。出土遺物はない。

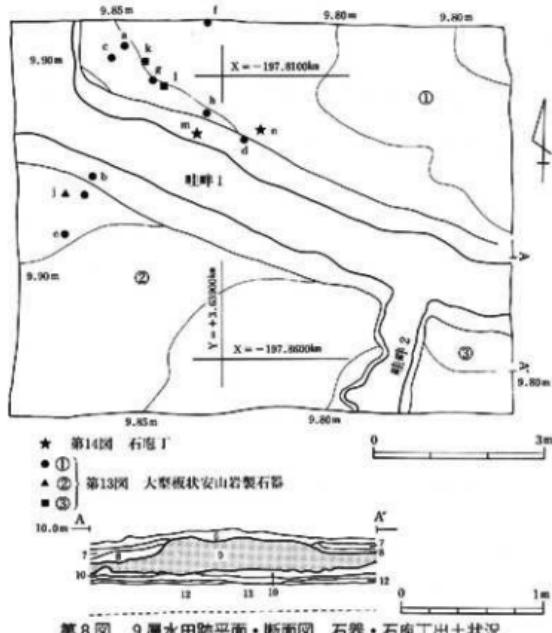
## (2) 9層上面

### 9層水田跡（第8図）

畦畔（畦畔1・2）2条を検出し、これによって区画される水田区画を3区画検出した。水面面の標高は9.76～10.05mで北東方向に下がっている。

水田跡は直線的に延びる畦畔1、これにT字状に交わる畦畔2から構成されている。しかし、畦畔1は北東部で広がりが認められ、別の畦畔が取りついていた可能性もあるが調査区外に延びるため断定はできない。畦畔は耕作土と同じ9層を盛り上げて作られている。畦畔1は検出長9.5m、方向E-25°-S、下端幅1.8～2.0mで耕作土上面からの高さは7～10cmの間である。畦畔1は、擬似畦畔Aを作っている。規模、構造からみて畦畔1は大畦と考えられる。畦畔2は畦畔1にT字状に交わり検出長2.2m、方向S-16°-W、下端幅0.8～1.2mで耕作土上面からの高さは4～6cmである。規模、構造からみて畦畔2は小畦と考えられる。

畦畔1・2によって区画される水田区画は3区画である。いずれも部分的な検出で全体の規

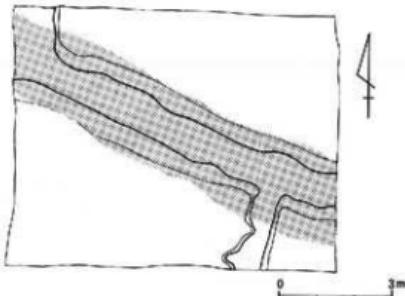


模、形状は不明であるが、残存形から方形を呈するものと思われる。同一区画内での比高差は、区画①8cm以内、区画②17cm以内、区画③10cm以内である。区画②から区画①において10cm程度の下がりが認められ、北東方向への傾斜が観察でき、全体的な傾斜と同様である。耕作土の9層は直下の10~12層を攪拌することによって形成されている。層中には10~12層をブロック状に含み、中位にマンガンの帯状の集積が認められ層の下面には著しい凹凸が見られる。層厚は8~30cmである。尚、水口は検出されなかった。

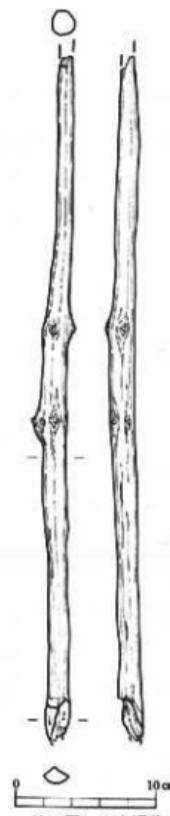
遺物は耕作土中から石器20点、先端加工のある材1点が出土している。20点の石器のうち石材から2つに分けられる。

第13図：駐畔1の周囲から、板状節理を有する安山岩を石材とする18点の石片が出土している。このうち14点に接合関係が認められ、出土状況は第8図に示してある。接合により復元された石器3点を第13図①・②・③として図示してある。他の4点には接合関係は認められない。

①の平面形は不整四辺形を呈している。a面において下側縁は直線的で縁辺角は小さく(15°~17°)、折れ面状の微細剥離痕が認められ、a・b両面の一部に肉眼で光沢面が認められる。他の側縁はすべて折れ面である。断面形はくさび形を呈している。このため、石器の種類としては、a面下側縁(b面では上側縁)を刃部とする微細剥離痕のある石片と理解される。最大長15.9cm、最大幅7.7cm、厚さ10mm、重さ97.0gを測る。刃部長、刃部に直交する最大器幅はそれぞれ最大長、最大幅と同じである。これらの点から、この石器は石質及び大きさや、形態的特徴から大型板状安山岩製石器(斎野他:1987)と考えることができる。し



第9図 6層上面で確認された9層水田跡擬似駐畔A平面図  
(スクリーントーン部分)



第10図 出土遺物

検出番号	回収番号	出土層位	種別	個数	実測形状	長さ	幅	厚さ	先端加工	側面加工	備考
第10号		9層中	石	イクダヤ	丸太粒	48.3cm	1.6cm	2方向	——	無	

かし、折れ面と刃部の微細剥離痕の新旧関係については不明であり、この形態で石器として使われていたか否かは明確でない。

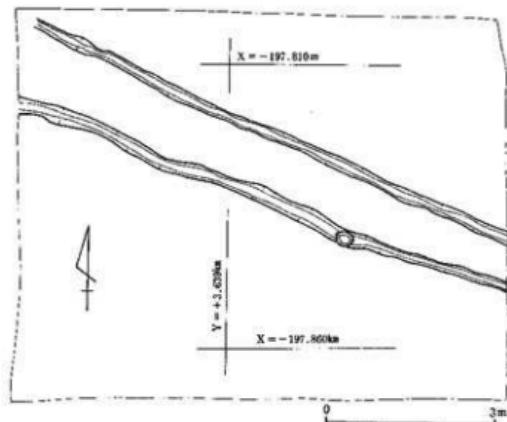
②の平面形は、不整五角形を呈する。a面において下側縁は短いが二次加工が認められる。縁辺角は小さく約17°を測る。他の側縁はすべて折れ面である。最大長5.3cm、最大幅2.5cm、厚さ10.7mm、重さ12.4gを測る。

③の平面形は不整四辺形を呈する。a面において下側縁は縁辺角17°を測る。他の側縁はすべて折れ面である。最大長9.3cm、最大幅2.8cm、厚さ8.3mm、重さ21.6gを測る。

他の4点については不整四辺形を呈し側縁のはほとんどが折れ面である。

これらの①～③と他の4点の関係については、石質や厚さなどに類似性が認められること、比較的まとまった範囲(4×4m)から出土していること、後述されているように金属顕微鏡の観察による光沢面の分布状況からは、a面の左側縁から上側縁にかけての折れ面は下側縁より新しいことが推定されることから、本米①よりも大きなひとつの石器であった可能性が考えられる。また、①～③はいずれもいくつかの石片が接合しており、さらに接合しなかった他の4点を含めても石器個々の大きさは最大長5cmを越えるものではなく、通常の折損(事故など)の結果を示しているとは考えにくい面もあり、意図的な破碎が行われた可能性が考えられる。この石材の産地としては、富沢遺跡南西方向約4kmの高館丘陵北部と推定されている。(斎野他:1987)。

第14図:粘板岩製の磨製石庖丁である。第8図に★で示すように大壯の東側から出土した2点が接合している。2点間の距離は約1.1mである。形態的には外弯刃の半月形石庖丁と考えられるが、約1/2が折損している。背部は直線的である。刃部は両刃であるが、断面形は非対称で、片面は浅く、もう片面は深く研がれている。両面共に研磨が行われており、a面はほぼ平坦であるが、b面には素材面が残っている部分も認められ、やや凹凸が見られる。紐穴は2孔認められ、紐穴の芯々間隔は36mmである。a面側の右の紐穴は約2/3が欠損している。a面側の右の紐穴は回転穿孔痕の



第11図 10層平面図

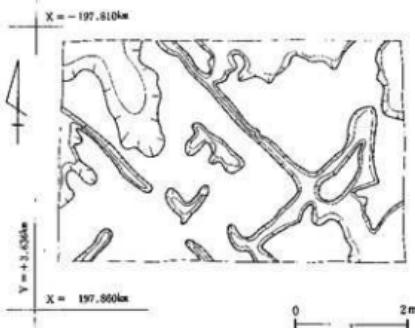
み認められるが、他は敲打の後回転穿孔によってあけられている。a面側の左の組穴の径は7mmである。残存長10.0cm、最大幅7.1cm、厚さ6mm、重さ53.0gである。金属顕微鏡の観察によりb面に部分的に光沢が認められ、この石庖丁が製品として機能したあとに何らかの原因で折損したと考えることができる。この石材の産地については阿武隈山系に求められる可能性がある。

### (3) 10層上面

10層上面において溝状の落込みを2本確認した。2本はそれぞれ平行して直線的に延びている。2本間の間隔は、40~70cmである。埋土はそれぞれ1層で、基本層9層の上が入り込んでいる。方向は北西から南東に下がっている。出土遺物はない。

### (4) 15層上面

15層上面において溝状の落込みを調査区全面で確認した。幅8cm~40cm、深さ12cmほどである。この溝状の落ち込みには何らかの区画を示すように直交するものや、幅の広がるものなどがあり性格は不明である。埋土は1層で基本層の14層である。出土遺物はない。



第12図 15層平面図

## 4. 石器の使用痕分析

9層水田跡（弥生時代糞形圓式期あるいはそれ以前）に伴って出土した石器の使用痕分析を行った。

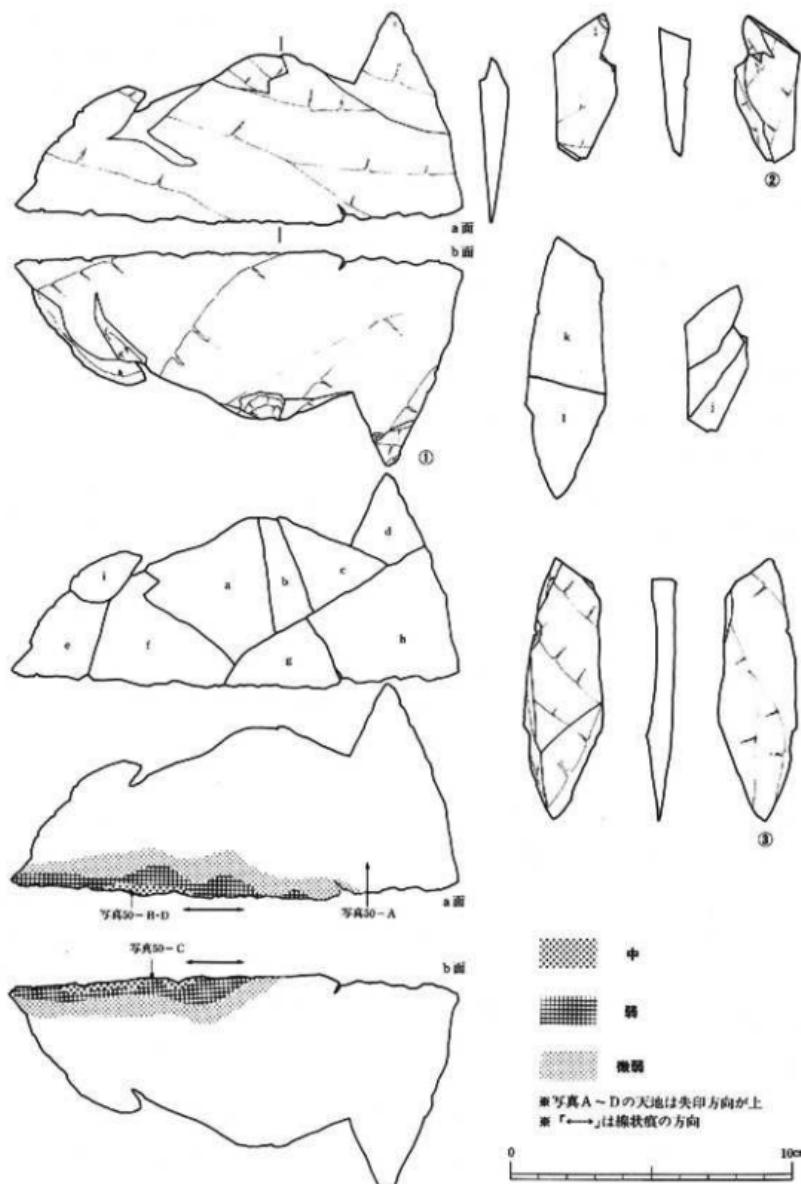
### (1) 分析方法

L. H. キーリーによって確立された高倍率法による分析である（Keely: 1980）。金属顕微鏡の100倍と200倍で観察を行った。光沢面のタイプについては梶原・阿子島（1981）、芹沢他（1981）、山田（1986）にもとづいた。また、実体顕微鏡（10~63倍）による石器表面の観察も行った。

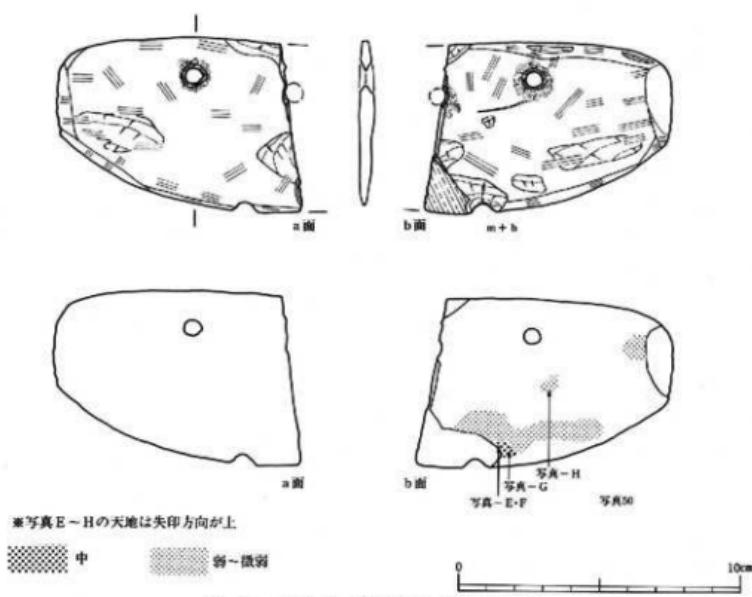
石器は水田土壤中より出土していることもあり、資料表面の汚染は少ないので、アルコールによる手の油脂の拭き取り以外の洗浄は行わなかった。

### (2) 観察結果

第13図①~③：石材は板状節理を有する安山岩である。出土した18点の石片のうち14点に三つの接合関係が認められる（①~③）。①は微細剥離痕のある石片（大型板状安山岩製石器）で



第13図 9層出土石器実測図・光沢分布図(1)



第14図 9層出土石器実測図・光沢分布図(2)

ある。

①にはa面における下側縁、b面では上側縁の一部にそれぞれ肉眼で光沢面が観察される。金属顕微鏡による観察では、①にはa・b両面に使用痕光沢面が認められたが、②、③には認められなかった。以下は①の使用痕分析結果である。

確認された光沢面は、タイプAとタイプB、及びその中間の形状を示すものである。タイプBと識別された光沢面の表面は丸味を帯びており、明るくなめらかである。頁岩などにみられる水滴のような形状を呈するものは少なく、線形を呈するものが多い。実体顕微鏡と金属顕微鏡との併用により、この線形のタイプBは、剥離面表面の細長い凸部（写真50-A）に、その形状にそって形成された光沢面であることが知られる。大きさには違いもみられ、発達の程度を示すものと考えられる。接眼ミクロメータで計測をしたところ、大きなものは長さ100～150ミクロン、幅15～20ミクロンで、小さなものは長さ20ミクロン以下である。

線形のタイプBの発達したものは他と接続している状況が認められ（写真50-C）、その間の凹部や周囲にも光沢面が形成され、タイプAとなっている部分もある（写真50-D）。実体顕微鏡による観察では、タイプAの分布するところはやや起伏のある平坦な面に見える（写真

50-B)。

これらのことから、この石器における光沢面の発達過程は、主に線形のタイプBの形成、その連接、タイプAの形成という順序が考えられ、それぞれ「微弱」、「弱」、「中」として光沢分布図を作成した。しかし、タイプAは部分的に認められるだけであり、顕微鏡の視野（径約2ミリ：×100倍）全面に広がるほどではないため、「強」はもうけなかった。

光沢分布図では、「中」の範囲がa面下側縁左側（b面でも対応するほぼ同じ位置）にみられ、そこから上方、左右に光沢は徐々に弱くなりながらも広がっている。a面に比べ、b面上側縁の右方への広がりはやや弱い。

線状痕の方向は、a面における下側縁（b面では上側縁）に斜行するものもあるが、平行するものが支配的である。

第14図：磨製石斧。石材は粘板岩である。肉眼ではa・b両面に光沢面は観察されない。金属顕微鏡による観察では、b面に使用痕光沢面が認められた。

b面で確認された光沢面は、須藤・阿子島（1984年）により「コーングロスバッヂ」ともいわれ、その大きさや分布の密度から、「強」～「無」の5段階の基準が設けられている。400倍での観察は行わなかったが、この基準をもとにして光沢分布図を作成した。また、背部の観察も行ったが、光沢面は認められなかった。

光沢分布図では、「中」の範囲がb面下部左側に認められ（写真50-E・F・G）、そこから上方、右方に「弱～微弱」の範囲が広がっている。「弱～微弱」の範囲は上部右側にも部分的にみられる（写真50-H）。刃部端に光沢面は認められない。

線状痕の方向は、光沢面の発達が弱く、把握することはできなかった。

### (3) 考 察

第13図①：a面下側縁（b面上側縁）にみられるタイプAの光沢面は、シリカ含有量の高いイネ科植物などの作業であらわれる使用痕である。また、タイプBの光沢面はタイプAの発達の初期、あるいは木に対する作業であらわれる使用痕であり、この場合は前者であると判断される。線状痕の方向がa面下側縁に平行であるものが支配的であることから、この石器はa面下側縁（b面上側縁）を刃部とし、シリカ含有量の高いイネ科植物などの切断に機能したことが考えられる。また、a面左側縁は折れ面となっており、光沢面との直接的な新旧関係はわからなかったが、光沢面の分布状況からは折れ面のほうが新しいと推定される。なお、線形を呈するタイプBの光沢面については、今後使用痕実験などにより石材の影響を明らかにしていく必要があろう。

第14図：b面にみられる「コーングロスバッヂ」は、シリカ含有量の高いイネ科植物などに機能した場合にあらわれる使用痕である。発達の程度は弱く、線状痕の方向はわからないが、須

藤・阿子島（1985）などからイネの穂摘具として使用されていたことが考えられる。また、a面に光沢面は認められない。これは、磨製石庖丁の光沢面分布が両面の向かって左側が強くなるという一般的な特徴（須藤・阿子島：1985）とは異なっており、研ぎ直しが行われた結果か、あるいは使用の初期の段階で折損した可能性が考えられる。

### 5. 遺構の所属年代とまとめ

遺構を検出したのは、2層・9層・10層・15層である。各遺構の所属年代は層位の対応の可能な隣接する仙台市高速鉄道関係遺跡の調査（泉崎2区）（吉岡、篠原：1989）、泉崎浦遺跡第3次調査（主浜：1988）の結果などから考えると確実に対応できたのは9層だけである。

70次調査	高速鉄道	泉崎浦3次	所属年代
9層	8層	唯b層	弥生時代中期（拵形圓式期かそれ以前）

1. 2層上面で検出したのは溝跡2条（SD2・3）とSD3に伴う杭列1列、性格不明遺構1基である。所属年代は近世以降であると考えられる。
2. 9層で検出した水田跡は大畦畔とそれに交わる畦畔からなっている。大畦畔は擬似畦畔Aを伴っており、これは6層上面でも確認されている。水田区画はいざれも部分的な検出であり一区画の大きさは明確ではないが、検出された区画内での比高差が大きいのでさらに畦畔によって区画されていた可能性もある。
3. 9層で出土した大型板状安山岩製石器は、畦の両側での接合関係がみられる。18点の石器個々の大きさが最大長5cmを越えないこと、側縁が折れ面であるものが多いことなどから通常の折損とは考えにくい面があり、意図的な破碎が行われた可能性も考えられる。しかし、調査区の範囲が狭いこと、出土地点が調査区の北西部分であることなどから、分布範囲はさらに広がる可能性も考えられるので今後の資料の増加を待って検討して行きたい。また、石庖丁もこの範囲内から折損した状態で出土しており大型板状安山岩製石器の出土状況との関連性についても今後の課題としたい。
4. 10層上面で検出された溝条の落ち込みは9層水田跡で検出された畦畔の方向とはほぼ同一であるので、9層での水田耕作に関係する可能性もある。
5. 15層上面で検出された落ち込みは、方形状にみられるところもあることや、14層が水田土壤である可能性もあることから水田耕作に関するものである可能性がある。しかし、隣接する他の調査で対応する層がみられないこと、出土遺物がないことから時期や性格の判断はできない。

## 第2節 富沢遺跡第71次調査

### 1. 調査方法

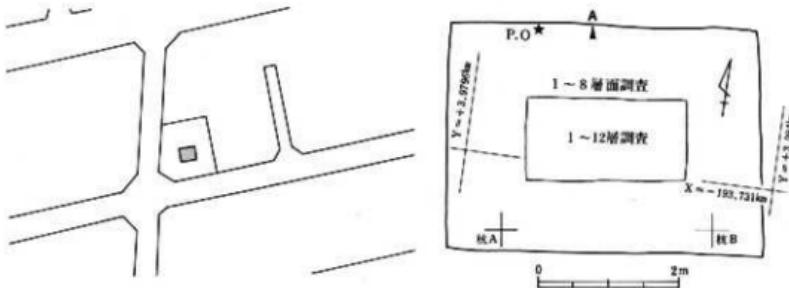
調査区の設定面積は約15m<sup>2</sup> (4.5×3.3m) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で除去し、以下は人力により行った。8層上面までは調査区全面の精査を実施したが、8層以下は安全確保のため調査面積を縮小している。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。測量は杭A・Bを基準に行った。杭の座標値は、平面直角座標第X系で、杭A : X = -197.73183km, Y = +3.98027km・杭B : X = -197.73151km, Y = +3.98315kmである。

### 2. 基本層序

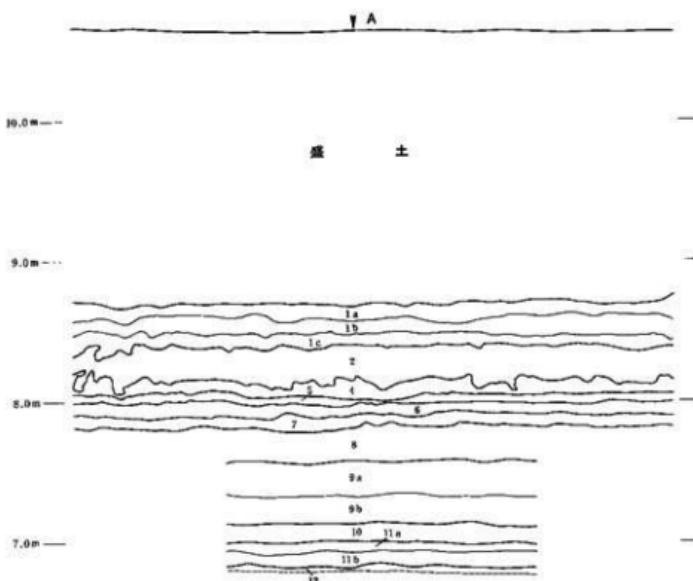
当調査区では盛土下に大別で12層、細別で16層の層序を確認した。各層の性質は1・2層が粘土で、3～12層までが泥炭質粘土である。尚、9層以下は分解の度合いからか粘性が強い。2層は下層を攪拌しており下面の凹凸がいちじるしい。層下部で灰白色火山灰が検出されている。3層は2層攪拌時に巻き上げられ、東壁に部分的に存在するのみであった。各層ともほぼ水平な堆積状況を示している。尚、当調査区では2層から8層までの計6地点でのプラント・オバール分析を実施（第3章第3節参照）したが、2層のみからイネのプラント・オバールが検出されている。

### 3. 検出遺構と出土遺物

遺構は確認されなかった。遺物は1層中で陶器、土師質土器・須恵器片が計5点出土したのみである。



第15図 調査区位置図・設定図



第16図 基本層序

層序	色	質	性質	厚年	無光沢	風入物	目
1 a	オキーブ黒色	7.5YR3/1	シルト質粘土	5~25cm	—	—	現代の水田土層
1 b	灰 色	7.5Y4/1	シルト質粘土	5~15cm	淀文有	細砂	—
1 c	灰 色	7.5Y4/1	粘質粘土	2~20cm	淀文有	粗砂	—
2	白 色	5Y2/1	粘土	上	12~24cm	層下由に火山灰アッシュ	水田土層・下面著しく起伏し層巻き上げ
3	灰 黑 褐色	10YR5/2	泥炭質粘土	—	—	—	瓦層・部分的に分布
4	黑 色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	2~15cm	—	—	—
5	灰 黑 褐色	10YR4/2	泥炭質粘土	2~5cm	—	—	—
6	黑 褐 色	10YR2/3	泥炭質粘土	5~15cm	—	—	—
7	黑 褐 色	10YR3/2	泥炭質粘土	3~15cm	—	—	—
8	黑 褐 色	10YR2/1	泥炭質粘土	21~35cm	—	—	瓦層
9 a	黑 褐 色	10YR2/1	泥炭質粘土	22~24cm	—	—	瓦層
9 b	黑 褐 色	10YR1.7/1	泥炭質粘土	17~23cm	—	—	瓦層
10	黑 褐 色	7.5Y5/1	粘土	上	10~16cm	—	瓦層
11 a	白 色	10YR2/1	粘土	4~8cm	—	—	—
11 b	黑 褐 色	10YR3/1	粘土	4~15cm	—	—	—
12	黑 褐 色	10YR2/1	粘土	上	10cm以上	—	—

#### 4.まとめ

遺構は検出されず、水田耕作土の可能性のある層（2層）の確認のみにとどまっている。2層の時期は灰白色火山灰等から、平安時代以降と考えられる。

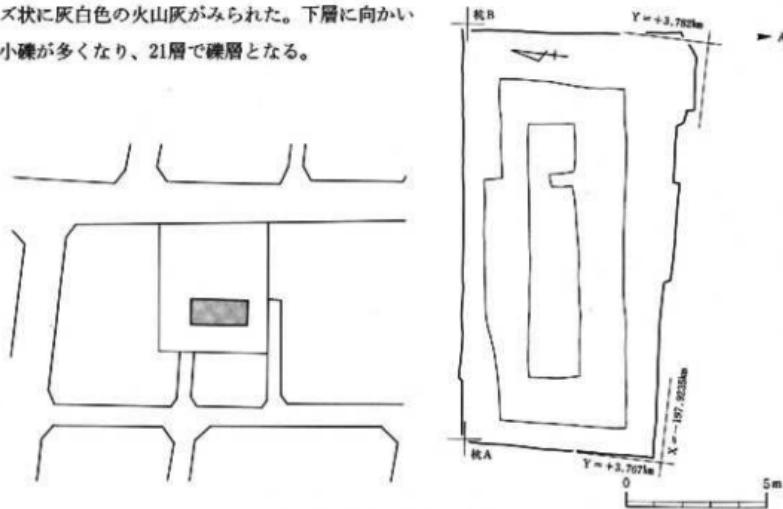
## 第3節 富沢遺跡第72次調査

### 1. 調査方法

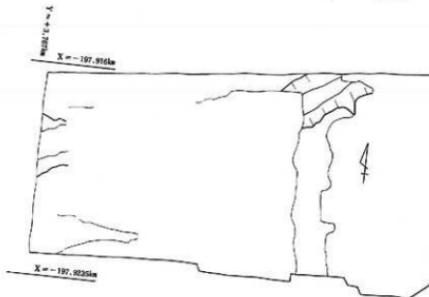
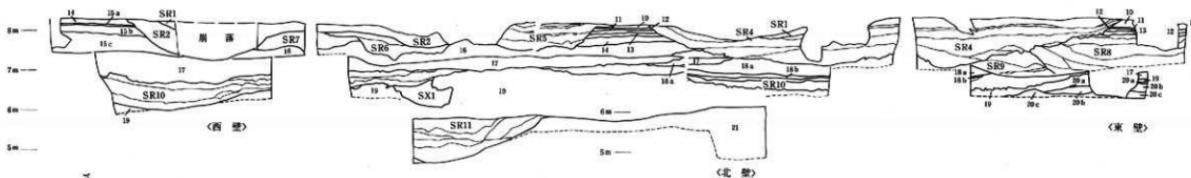
調査区の設定面積は約100m<sup>2</sup> (14.5×7 m) である。調査は、現地表下3~4 mにも及ぶ擾乱部を重機で排除し、以下は人力により行った。当調査区は第8次調査地点（工藤哲司他：1984）の東側に位置するが、前述の擾乱により水田遺構等の精査は不能となっている。21層上面までは調査区全面の精査を実施したが、21層面では12×4.5 m、25層面では9×2 mと安全確保のため調査区を縮小し段掘を行っている。調査区内には土層観察・排水用の側溝を設けた。測量は杭A・Bを基準に行った。杭の座標値は、平面直角座標第X系で、杭A : X = -197.91651km, Y = +3.76707km・杭B : X = -197.91491km, Y = +3.78155kmである。

### 2. 基本層序

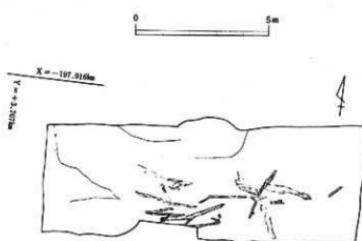
1で上述した様に大規模な擾乱が調査区全域に及んでおり、連続した基本層位は把握し得なかつたが、盛土下で大別で21層、細別で28層の層序を確認した。各層の性質は1~3層が粘土質シルト、4層が砂で5層が砂質シルトである。6~14層までが泥炭質粘土である。15層以下ではグライ化がみられ、砂を主体とした砂質シルト・泥炭質粘土の層となる。17層中にはレンズ状に灰白色の火山灰がみられた。下層に向かい、小礫が多くなり、21層で疊層となる。



第17図 調査区位置図・設定図



1号川跡平面図



10号川跡・樹木出土状況

序号	色	名	性質	厚さ	緑化度	鉄入物	名	
1	黒	色	10Y4/1	粘土質シルト	14~16m	下部が砂質	——	現代の水田土層
2	黒	褐	2.5Y3/2	粘土質シルト	14~20m	——	上部に砂	
3	黒	褐	2.5Y3/2	粘土質シルト	8~11m	——	——	泥炭土少量
4	黒	褐	7.5G5/3	粘土質シルト	——	——	鐵含有	
4'	赤	褐	10Y4/4	シルト	7~10m	——	——	
5	黒	色	10Y3/2	粘土質シルト	10m前後	——	——	
6*	黒	褐	10Y3/3	粘土質シルト	5~10m	——	——	
6b	黒	褐	10Y3/3	粘土質シルト	8~12m	——	——	
7	黒	色	10Y4/2	粘土質シルト	10m前後	——	——	
8	黒	褐	2.5Y3/2	粘土質シルト	10m前後	——	——	
9	黒	褐	2.5Y3/2	粘土質シルト	10m前後	——	——	
10	黒	褐	10Y4/2	粘土質シルト	21~27m	——	——	
11	黒	色	10Y4/2	粘土質シルト	3~6m	——	——	
12	黒	褐	10Y4/4	粘土質シルト	5~10m	——	——	
13	黒	色	10Y4/6	粘土質シルト	15cm前後	——	——	泥炭土少量
14	黒	色	10Y4/2	粘土質シルト	20cm以上	——	——	
14a	黒	色	10Y4/2	シルトシルト	3cm前後	——	——	グリーン色
15	黒	色	10Y4/2	粘土質シルト	10cm前後	——	——	グリーン色・鐵含有層
15c	黒	色	7.5G5/3	粘質シルト	35~55cm	——	——	グリーン色
16	黒	色	10Y3/1	シルト	19~23m	——	——	グリーン色・鐵含有層
17	赤	褐	10Y4/4	シルト	18~20m	——	——	層中に古式のブローライ
17a	黒	褐	10G7/6	シルト	25~35cm	——	——	層中のグリーン色・鐵含有層
18a	黒	色	10Y4/1	シルトシルト	20cm前後	——	——	グリーン色
18b	黒	色	10Y4/1	シルトシルト	3~10m	——	——	グリーン色
20	黒	色	2.5Y3/1	シルト	1~3m	——	——	グリーン色・鐵含有層
20b	黒	色	10G7/6	シルトシルト	21cm前後	——	——	グリーン色
20c	黒	色	10G7/3	シルトシルト	10cm以上	——	小塊	グリーン色
21	黒	褐	10G7/3	シルト	13cm以上	——	——	土質の鉄

第18図 墓断面及び遺構平面図

### 3. 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は河川跡11条(SR 1~11)と性格不明遺構(SX 1)1箇である。遺物は基本層、河川跡、盛土・搅乱内からで少量の出土である。尚、SR 1・SR 10から出土した樹木種は樹種及び種子同定を実施(第3章参照)した。

#### (1) 河川跡

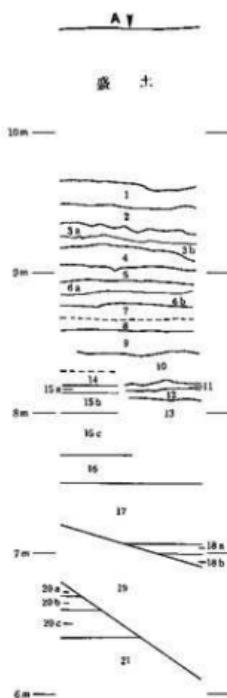
搅乱のため層上部が消失し遺構の確認面が不定となっているものもあるが、層の特徴等から判断してSR 1~5は基本層6~10層内と考えられる。SR 6~9はSR 3・4と重複関係にあり下層のものである。SR 10は19層上面、SR 11は21層上面(疊層)での確認である。堆積土はSR 1~7で泥炭質粘土が主体となり、SR 8~11は砂質シルト・砂となりグライ化がみられる。

#### 1号河川跡-SR 1-

調査区北東側から西側へほぼ直線的に延びている。現存幅は約1.6~2mで、深さは30cm程度である。底面高は両端部ともほぼ同じである。堆積土は2層確認した。泥炭質粘土を多く含む粘土質シルトで、下部には砂がみられる。河川跡確認面で多数の足跡が検出されている。方向はほぼ直線的である。長さ20cm前後を計り、形状から人間の足跡と考えられる。埋土は砂である。遺物として樹木塊・トチの実がある。樹木は鑑定の結果、カエデ属の一種と同定された。

#### 10号河川跡-SR 10-

19層上面での確認である。調査区中央部を東西に延びるもので、幅は5m以上、深さは80cm程を計る。堆積土は細別で5層確認した。褐色及び灰色を呈する砂質シルトである。1・2層には樹木片・種子が多量に含まれ、下部の3層ではグライ化がみられる。河川中央部の2層中で樹木群及び種子(クルミ等)が多數検出されている。樹木の内3点の樹種同定を実施したがエノキ属の一種、カエデ属の一種、ヤマグワと同定された。樹木群と伴に縄文土器を利用した径3cm程の円盤状の土製品が1点出土している。胎土に纖維が含まれる。所謂、纖維土器である。尚、河川跡底面でSX 1が検出されているが平面形は歪んだ円形を呈し、底面には凹凸がみられる。埋土は灰色の砂質シルトである。状況から倒木痕跡と考えられる。



第19図 基本層序概略

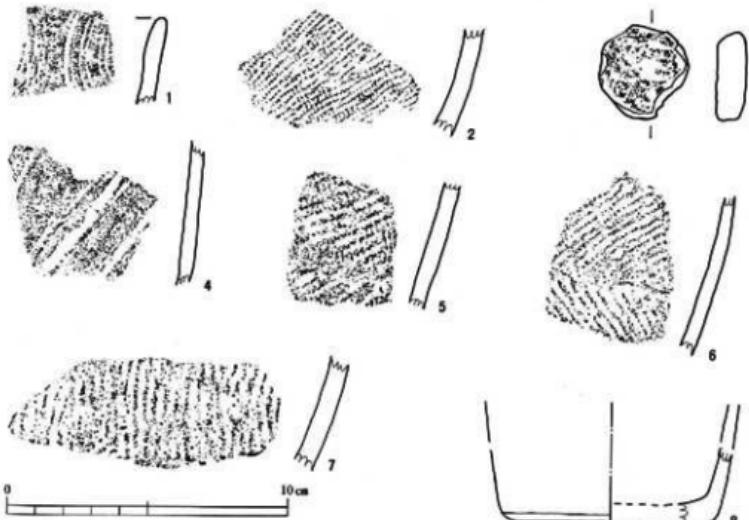
## (2) その他の出土遺物

15b層・19層・SR4・SR10・搅乱土から縄文土器が計14点出土している。体部破片資料で地文のみのものが大半を占めるが、15b層では縦位の沈線文をもつ縁部資料が1点ある。

## 4. まとめ

大規模な搅乱（破壊）を受け、1層から9層までの調査が不能となり、隣接地点で検出されている水田遺構等の確認は出来なかった。

検出遺構はすべて河川跡に関わるもので断面確認も含めて計10条確認した。隣接調査区との層位の対応も難しく、また出土遺物も少なく明確な時期は不明で、おおきく縄文時代早期から後期頃と言わざるをえない。尚、当地点は状況から判断して河川の影響下におかれており、安定をみるのは10層以上の時期と推察される。



No.	写真図面	遺構・層位	種別	器種	清存度	大きさ	色 製		特
							外 面	内 面	
1	S2-1	15b層	縄文土器	鉢	口縁部小片	?	にぶい褐色	にぶい褐色	内面：オヤ、外面：オヤ、沈線文
2	S2-2	SR4	縄文土器	鉢	底部小片	?	黒	黒	内面：オヤ、外側単極し及底文、スヌ子付唇
3	S2-3	SR10	土鍋型	土鍋内盤	一部欠損	一	暗褐色	暗褐色	
4	S2-4	搅乱	縄文土器	縄縫	底部小片	?	浅黄褐色	灰青褐色	内面：オヤ、外側沈線文
5	S2-5	搅乱	縄文土器	縄縫	底部小片	?	暗褐色	黒	内面：オヤ、外側単極し及底文
6	S2-6	搅乱	縄文土器	底部小片	(7.6cm)	?	黒	IC-61-赤褐色	内面：オヤ、外側暗褐色の為不明
7	S2-7	搅乱	縄文土器	鉢	底部小片	?	暗褐色	灰白色	内面：オヤ、外側の底の為不明
8	搅乱	縄文土器	縄縫	底部小片	?	黒	黒	内面：オヤ、外側斜面文	

第20図 出土遺物

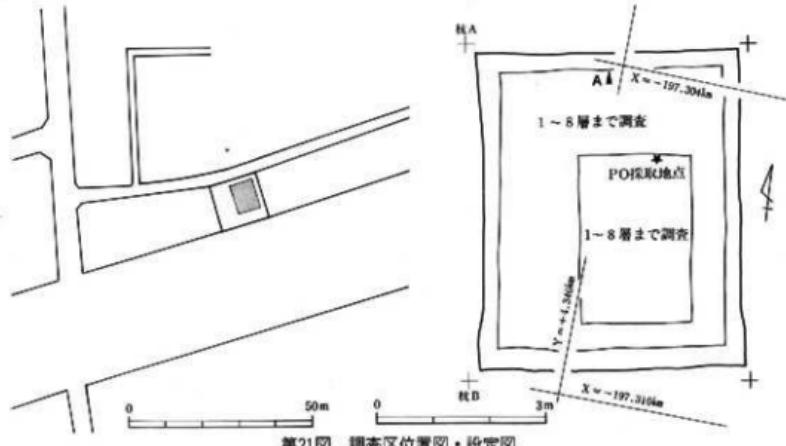
## 第4節 富沢遺跡第73次調査

### 1. 調査方法

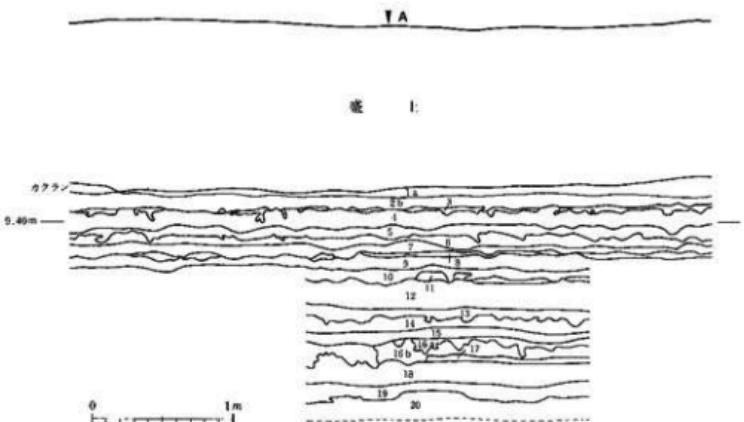
調査区の設定面積は約 $5.5 \times 4.5\text{m}$  ( $24.75\text{m}^2$ ) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で排除し、以下は人力により行なった。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。8層までは調査区全面の精査を実施し、9層以下は、約 $3 \times 2\text{ m}$ の試掘区を設けて掘り下げた。遺構の測量は、杭A・Bを基準にして実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している。（杭A：X = -197.30420km Y = +4.33711km 杭B：X = -197.31007km Y = +4.33838km）。

### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別20層、細別23層が確認された。各層の土質は基本的には粘土が主体であるが、6層は砂質シルトである。11層以下20層までは、泥炭質粘土となっている。今回の調査で確認した水田遺構は、現代のものをのぞくと7層である。また、2a層・5層・10層・13層・16a層は、土層観察の結果と隣接する調査区の層位の対応関係から水田土壤の可能性がある。5層中からは灰白色火山灰が検出されている。遺物出土層は、1・2a・4・5・6・7層・16a層である。全体的な層の傾きは、1~12層まではほぼ水平であるが、13層以下は南側に下がっている。尚、当調査区は第15次調査（斎野他：1987）V区に隣接しているが、各層の対応関係については遺構の対応関係と共に後述する。



第21図 調査区位置図・設定図



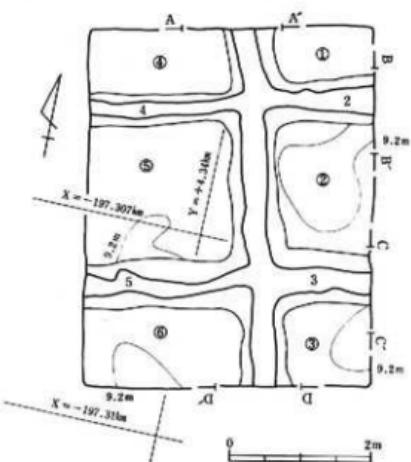
第22図 基本層序

層番	色	調	地質	層厚	堆積状況	侵入物	層名
1 a	オフード黒色	SY3/1	粘	4cm	2cm~10cmあり	マツダシ殻	現代の堆土層
1 b	灰	SY2/1	粘	4cm~6cm	あり	マツダシ殻	部分的分布
2 a	オフード黒色	7 SY3/1	粘	3cm~8cm	あり(断続)	炭化土・白色土・小礫	3.4層ゾーン
2 b	灰	7 SY2/1	粘	4cm~12cm	—	マツダシ殻	部分的分布・灰色土?
3	オフード黒色	SY3/1	粘	1cm~3cm	—	—	部分的分布・1層ブロック
4	灰	10 YR4/3	粘	2cm~7cm	あり	マツダシ殻	—
5	オフード黒色	10 Y3/1	粘	1.5cm~12cm	—	灰白色火成灰(層中)	6層ソート×下部マングル基準
6	鈍赤褐色	SY4/4	砂質シルト	2cm~12cm	あり	—	—
7	オフード黒色	7 SY3/1	粘	1cm~12cm	あり(多量)	マツダシ殻	3.4層多數・水田土層
8	灰	—	粘	1cm~12cm	あり(上部)	マツダシ殻	—
9	灰	2.5Y4/1	粘	1cm~12cm	—	マツダシ殻	—
10	灰	SY2/1	粘	4cm~12cm	あり	—	下部粘性・水稻土層?
11	灰	2.5Y4/1	泥炭質粘土	2cm~6cm	薄灰	—	部分的分布
12	灰	2.5Y4/2	泥炭質粘土	3cm~20cm	—	—	—
13	灰	3Y4/1	泥炭質粘土	3cm~12cm	—	—	下部古く耕作・水稻土層?
14	灰	3Y6/1	泥炭質粘土	1cm~16cm	青・翠壁状	—	—
15	灰	SY5/1	泥炭質粘土	1cm~16cm	青・翠壁状	—	—
16 a	黑褐色	10 YR1.7/1	泥炭質粘土	2cm~14cm	—	炭化物	—
16 b	灰	SY4/1	泥炭質粘土	4cm~16cm	—	—	下部耕作・16bと17層小ゾーン・水稻土層
17	オフード黒色	SY3/2	泥炭質粘土	2cm~10cm	—	—	—
18	灰	SY4/1	泥炭質粘土	3cm~20cm	翠壁状	—	—
19	灰	2.5Y3/2	泥炭質粘土	2cm~6cm	—	—	—
20	灰	2.5Y4/1	粘土質シルト	6cm~12cm	—	—	—
	オフード黒色	SY2/2	泥炭質粘土	20cm±1	—	—	—

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 4層上面

4層上面でピット状の落ち込みを一基検出した。堆積土は一層で、遺物は出土しなかった。



第23図 7層水田跡平面・断面図

## (2) 7層上面

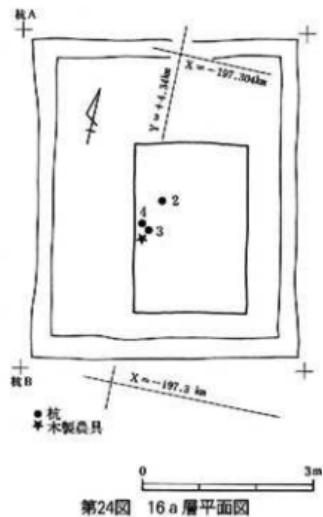
## 7層水田跡（第23図）

ほぼ直行する5条の畦畔によって区画される水田区画を6区画検出した。検出された区画の総面積は12.89m<sup>2</sup>以上である。水田面の標高は9.18~9.26mで、南東方向への下り傾斜が推定できる。

水田跡は、直交する直線的な5条の畦畔より構成されている。畦畔は耕作土と同じ7層を盛り上げて作られている。畦畔1は、調査区の中央に直線的に延びており検出長は5mである。方向はN-15°-Wで、下端幅は0.6~0.7m、耕作土上面からの高さは2~5cmである。畦畔2~5は畦畔1に直交する畦畔で、畦畔5はやや湾曲しているもの、他は直線的に延びている。検出長は1.2~2.4mである。方向はN-76°~80°-Eの間で、下端幅は0.5~0.8m、耕作土上面からの高さは1~3cmの間に納まっている。

畦畔1~5によって区画される水田区画は6区画であるが、いずれも部分的な検出で全体の規模、形状は知り得ない。しかし、3辺を検出している区画⑤から推定すると、区画は長方形を基調とし、面積は3.8m<sup>2</sup>以上である。同一区画内の耕作土上面の比高差は殆どは3cm以内にあり、ほぼ平坦で地形と同様の傾きを示している。

耕作土の7層は、主に直下の8層・9層を攪拌することによって形成された可能性が考えられるが、7層とこれらの層には色調等に大きな相違が認められ、7層と8層



第24図 16a層平面図

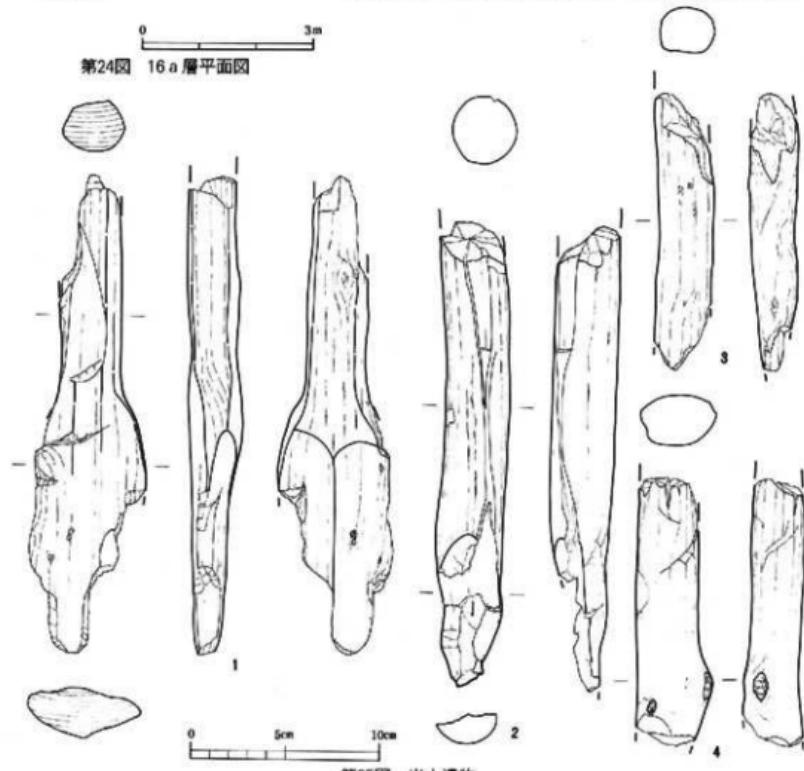
の間に別の層が存在していた可能性もある。層厚は、1~12cmと一定ではなく、下面には凹凸がみられる。また、層中に少量のマンガン粒、酸化鉄斑が見られる。

尚、畦畔上面、耕作土上面において足跡と推測される凹凸を多数検出したが、人か動物の特定は困難で、また、規則的な方向性も認められなかった。

遺物は出土しなかった。

### (3) 16a層上面

杭列2列を検出した。畦畔などは検出できなかったが、第15次調査区の水田跡と同一の層であると思われる。この層は水田土壤である可能性が高い。16a層は、主に泥炭質粘土層の16b・17層を攪拌し形成さ



第25図 出土遺物

No.	標高番号	ID番号	出土遺物・層位	種	測定	測定	測定形状	長さ	直徑	先端加工	裏面加工	特	考
1	第25回2	52-10	16a層	杭	ナヘダ	丸太材	24.8cm	3.5cm	1方向	—	—	—	—
2	第25回4	52-9	16a層	杭	—	丸太材	14.3cm	3.5cm	—	後凹A	—	—	—
3	第25回3	52-11	16a層	杭	—	丸太材	14.3cm	2.5cm	—	—	—	—	—
4	—	—	16a層	杭	?	鋼木片	2.8cm	3.0cm	—	—	—	—	—
5	—	—	16a層	杭	?	鋼木片	4.8cm	3.5cm	—	—	—	—	—

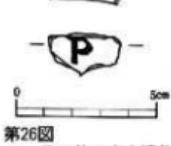
No.	測定番号	ID番号	出土遺物・層位	種	材	測定	測定	測定形状	長さ	厚さ	先端形状	側面形状	鉛錠径	特	考
1	第25回4	52-12	16a層	杭	ナヘダ	鋼	ナヘダ	半円形・扇形	25.5cm	14.0cm	6cm	2.6cm	11.5cm	3.5cm	—

れたと推測されるが、一部18層にまで達するところがある。層の下面是凹凸が著しい。層厚は、2~20cmで平均は10cm位である。16a層上面の標高は8.48~8.58mで、南西に下がっている。

杭列は2列で方向はN-25°-Eと、これに直交するE-25°-Sである。杭はいずれも丸太材を使用しており杭1に先端加工が認められるが、他に先端加工は認められない。これらの杭はすべて打ち込み杭であるが、この層に伴うかどうかは、杭の打ち込みが浅いこと(杭1で20cm)、上部を欠損していることなどから断定はできない。

遺物として、木製品(第25回1)を1点と木片2点を出土した。この木製品は、上下を欠いているが、木製農具の一部と思われる。

#### (4) その他の出土遺物



第26図 その他の出土遺物

1・2a・4・5・6層から陶器片、磁器片、土師器片などが出土した。陶器片(第26回)は2a層中より出土しており、底面に墨書が見られるが判読はできなかった。器種は徳利か土瓶で产地は相馬と考えられ、時期は江戸時代以降と思われる。土師器片は4・5・6層から出土しているが細片がほとんどであり、器形等の復元はできなかった。その内5層から出土した土師器はロクロ使用の杯で、内面へラミガキの後黒色処理が施されている。他、7層から自然碟が1点出土している。

No.	測定番号	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定	測定	特	考
1	32-8	2a層	陶	器	徳利か土瓶	直筒小片	灰白色	淡青褐色	底部外側墨書き、相馬↑	江戸時代	—	—	—	—	—

### 4. 遺構の所属年代とまとめ

今回、遺構が検出されたのは7層、16a層である。その他、2a・5・10・13・16a層も水田跡である可能性がある。これらの層の所属年代は、隣接する第15次調査V区の調査結果と合わせて考えると次のようになり、その他の層については対応関係が明らかにできなかった。

2a層 近世以降

15次調査1~2層

4層 平安時代(灰白色火山灰降下以前)

4b層

5層 平安時代(灰白色火山灰降下前後)

5a層

6層 平安時代（灰白色火山灰降下以前）	6層
7層 古墳時代	7a層
10層	8層
13層 弥生時代（十三塚式期）	9a層
14層 弥生時代（樹形圓式期以降十三塚式期以前）	10a層
16a層 弥生時代（樹形圓式期）	11a層

1. 7層水田跡で検出された水田区画は、第15次調査V区7a層で検出された水田区画の延長上であり水田が北方へ延びることが確認された。また、今回検出された調査地点から南に70m離れた第35次調査においても同時期の水田跡が検出されており、富沢遺跡北東部で古墳時代の水田がより広範囲で耕作されていたことが窺える。
2. 16a層で検出された杭列は、第15次調査V区11a層において検出されている杭列との関連性が考えられ、畦畔に伴うものである可能性がある。
3. 16a層から出土した木製品は、上下を欠いているが仙台市内で以前に出土している木製農具に形状が近似している。【富沢遺跡第7次調査（註1）・同8次調査（註2）・中在家南遺跡（註3）】これら3遺跡の木製農具の性格として、鋤の可能性が考えられており（註4）、今回の木製品も同様の性格であると考えられる。鋤であるとした場合、身と柄の部分を分けずに作り出す所謂「一木鋤」であり、上記3遺跡で出土しているものと作り方においても差異は認められない。弥生時代中期中葉ごろの仙台平野においてこの形状の鋤が一般的であったのか、あるいは他の形状のものも使用されていたかについては、今後の資料の増加に期待する。

註1：篠原・吉岡『—富沢遺跡・泉崎浦遺跡—仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ』

仙台市文化財報告書第126集 1989

註2：工藤哲司他『富沢水田遺跡Ⅰ』 仙台市文化財調査報告書第67集 1984

註3：工藤・荒井『仙台市中在家南遺跡出土の木製品』考古学ジャーナル第323号 1990

註4：須藤 隆『東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開』

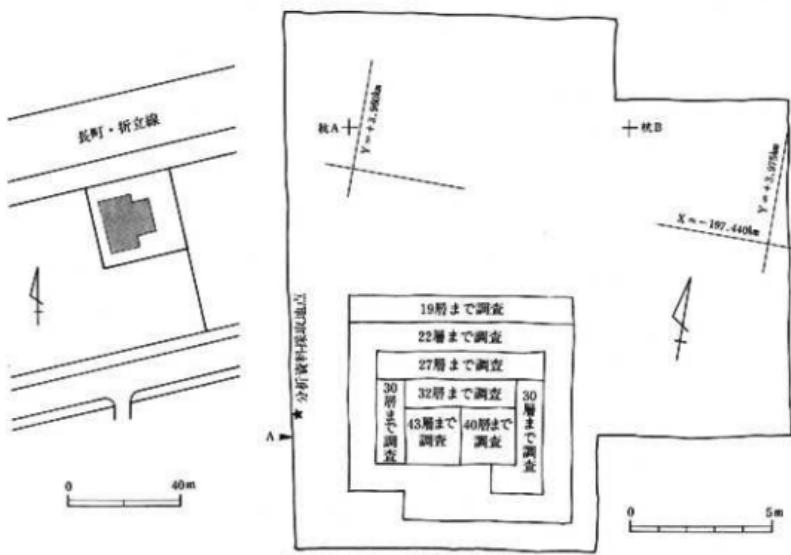
宮城の研究－考古学篇－ 1984

## 第5節 富沢遺跡第74次調査

### 1. 調査方法

調査区の設定面積は約289m<sup>2</sup>である。調査区は盛土が成されていないため調査は1層から人力で行い、調査区内に土層観察及び排水用の側溝を設けながら掘り下げた。なお、調査途中で建物の設計変更が行われたため、それに伴って調査区を南北両側に拡張したが、その影響で側溝の一部が調査区を横断する形となっている。13層上面までは調査区全面の精査を実施し、それ以下は試掘区を設けて掘り下げた。試掘区は13層以下が約8×8m、19層以下は約8×7m、22層以下は約6×4m、27層以下は約6×3m、30層以下は約4×3m、32層以下は約4×2m、40層以下は約2×2mである。

遺構の測量は、杭A・Bを基準として実施した。尚、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197.43864km Y = +3.95956km、杭B：X = -197.43687km Y = +3.96940km）。

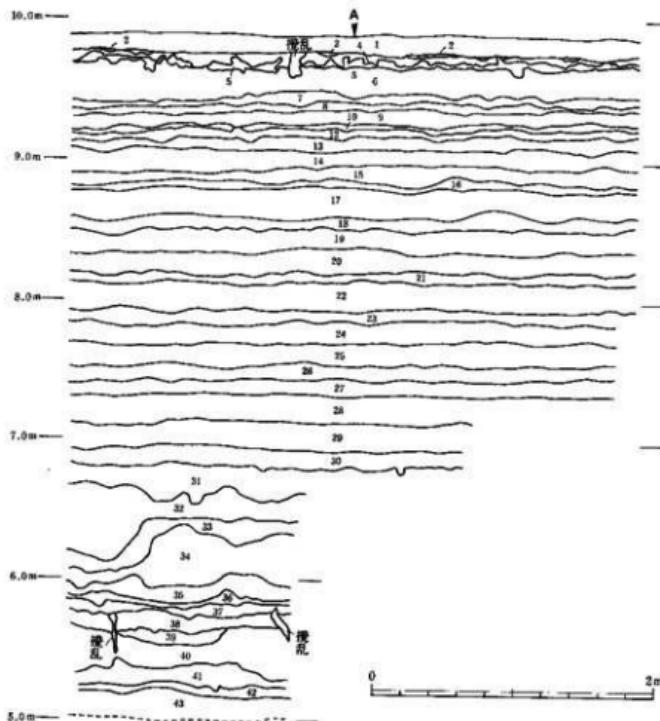


第27図 調査区位置図・設定図

## 2. 基本層序

今回の調査では1～43層まで確認された。各層の土質を大別すると1から5層が粘土、6～18層が泥炭質粘土、19～26層が粘土と泥炭質粘土、27～38層までが粘土、39～43層がシルト質粘土である。グライ化は17層から漸次進み、30層以下では顕著である。各層の傾きは1～5層までは一様に東側へ向かって緩やかに下っているが、6～13層までは北から南西方向へ向かって緩やかに傾斜している。14層以下は部分的な調査のため詳細は不明であるが、ごく緩やかに東側へ下っていると考えられる。

現代のものを除く水田土壤は4・5・7・12層であるが、その他2・3・10層も水田土壤の



第28図 基本層序

調査	色	調査	性質	厚さ	無機化	充入物	備考
1	暗灰 黄色 2.5YR 4/2	粘土	—	6~20cm	古文	砂粒を少しだけ含む	現代水山耕作土
2	赤褐色 黄褐色 10YR 4/3	シルト質粘土	1~20cm	—	上層に幾次	マングン鉱物質、砂粒少量	水田耕作土? 不適純な分母、下層若干粘土
3	黑褐色 色 10YR 2/2	粘土	—	1~10cm	少量	マングン鉱物質、部分的に灰白色火成岩ブロック少量	水田耕作土? 下層若干粘土、開拓地東端部に部分的に分布
4	黑褐色 色 10YR 3/2	粘土	—	1~10cm	少量	マングン鉱物質、灰白色火成岩ブロック少量	水田耕作土、下層若干粘土
5	田褐色 色 10YR 2/2	粘土	—	1~10cm	微量	マングン鉱物質、10YR 4/6 暗褐色土ブロック少量	水田耕作土? 下層若干粘土
6	黑色 10YR 2/1 黑褐色 色 10YR 3/1 にじむ黒褐色 10YR 5/3 褐色 10YR 4/6	泥炭質粘土 粘土 粘土	—	4~32cm	—	—	正常
7	灰黄褐色 色 10YR 4/2	泥炭質粘土	—	2~10cm	微量	—	水田耕作土 下層若干粘土
8	褐色 色 10YR 4/4	泥炭質粘土	—	1~8cm	—	—	正常
9	黑色 7.5YR 1/1	泥炭質粘土	—	4~10cm	—	—	下層若干粘土
10	灰灰褐色 2.5YR 1/1	泥炭質粘土	—	1~9cm	—	—	水田耕作土、下層若干粘土
11	暗灰褐色 2.5YR 4/2	泥炭質粘土	—	2~5cm	—	—	10cm大礫層下に部分的に薄存在
12	黑褐色 10YR 2/2	泥炭質粘土	—	2~20cm	—	—	水田耕作土、下層若干粘土
13	黑色 2.5YR 2/1	泥炭質粘土	—	2~10cm	—	—	植物遺体多量
14	黑褐色 2.5YR 2/1	泥炭質粘土	—	10cm前後	—	—	植物遺体多量
15	黑色 2.5YR 1/1	泥炭質粘土	—	10cm前後	—	—	植物遺体多量
16	黑褐色 2.5YR 1/1	泥炭質粘土	—	5cm前後	—	—	—
17	オリーブ褐色 3YR 3/1	泥炭質粘土	—	20cm前後	—	—	1.25m植物遺体多量
18	黑色 3YR 2/1	泥炭質粘土	—	10cm前後	—	粘土分多量	正常 植物遺体多量
19	オリーブ褐色 3YR 3/2	粘土	—	5cm前後	—	—	—
20	黑色 3YR 2/1	泥炭質粘土	—	15cm前後	—	—	上層に植物遺体少量
21	オリーブ褐色 3YR 3/1	粘土	—	6cm前後	—	—	正常 植物遺体多量
22	黑色 3YR 2/1	粘土	—	20cm前後	—	—	—
23	黑色 3YR 2/1	泥炭質粘土	—	11cm前後	—	—	植物遺体少量
24	黑色 2.5YR 2/1	粘土	—	10cm前後	—	—	—
25	黑褐色 2.5YR 3/1 黑色 5YR 1/1 オリーブ褐色 5YR 2/2 暗灰褐色 2.5YR 4/2	泥炭質粘土 泥炭質粘土 泥炭質粘土 泥炭質粘土	—	10cm前後	—	粘土分多量	正常
26	黑色 3YR 2/1	泥炭質粘土	—	11cm前後	—	—	植物遺体少量
27	オリーブ褐色 2.5YR 4/3	粘土	—	10cm前後	—	—	正常、植物遺体少量
28	黑褐色 2.5YR 1/1	粘土	—	25cm前後	—	—	正常 植物遺体少量
29	黑褐色 2.5YR 4/1	粘土	—	20cm前後	—	—	植物遺体少量
30	黑色 2.5YR 1/1	粘土	—	10cm前後	—	0.5mm以下の砂粒微量	植物遺体少量
31	黑色 7.5YR 1/1	粘土	—	11~28cm	—	0.5mm以下の砂粒微量、7.5YR 5/1 灰色 暗セメントリック少量	植物遺体少量
32	暗灰褐色 3G 6/1	粘土	—	10~30cm	—	0.5mm以下の砂粒微量 (部分的にブロック状)	著しく起伏、植物遺体少量
33	暗灰褐色 3G 6/1	粘土	—	4~25cm	—	—	著しく起伏、植物遺体微量
34	暗灰褐色 3G 4/1	シルト質粘土	—	6~40cm	—	0.5mm程度の粗粒多量 (ブロック状)	著しく起伏、植物遺体微量
35	暗灰褐色 3G 6/1	粘土	—	4~7cm	—	—	著しく起伏、植物遺体微量
36	黑色 3YR 4/1	粘土	—	1~7cm	—	—	著しく起伏、高地下水位上層、植物遺体微量
37	黑色 3YR 6/1	粘土	—	1~20cm	—	—	やや起伏、植物遺体微量
38	生褐色 10YR 4/2	粘土	—	8~16cm	—	—	やや起伏、互層、崩壊質粘土層、植物遺体微量
39	オリーブ褐色 2.5G YR 1/1	シルト質粘土	—	4~11cm	—	—	やや起伏、斑状の崩壊質粘土層、部分的に互層
40	暗灰褐色 3G 7/1	シルト質粘土	—	13~37cm	—	—	著しく起伏
41	暗灰褐色 3G 6/1	細砂	—	5~10cm	—	SG 6/1 粘土質シルトブロック少量	今や初状
42	暗灰褐色 3G 7/1	シルト質粘土	—	3~10cm	—	—	やや起伏
43	暗灰褐色 3G 6/1	シルト質粘土	—	24cm以上	—	0.5mm前後の粗粒微量	—

可能性がある。なお3・4層中には灰白色火山灰の粒子・ブロックが少量含まれているが、これらは下層から巻き上げられた可能性がある。なお、遺物は1・2・4層中と30層上面から出土した。

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 4層上面

##### 4層水田跡（第29回）

〈遺構状況〉 東西・南北方向の小畦畔と斜行する段差によって構成されている。これらは2層を削り込む過程で確認したが（3層は調査区東部にのみ部分的に遺存するため）、畦畔や耕作土上面は2・3層の耕作土によって擾乱されており、遺存状況はあまり良くない。

耕作土：耕作土は基本層4層で、黒褐色の粘土である。厚さは1~14cmで一定せず、下面是起伏が激しい。下層への食い込みの大部分は直下の5層中で止まっているが、5層を完全に攪拌して6層中にまで達する場合がある。なお層中には灰白色火山灰の粒子・ブロックが少量含まれているが、前述したようにこれらは下層から巻き上げられたと考えられる。

畦畔：小畦畔2条（No.1・2）と段差を一箇所（No.3）検出した。小畦畔は耕作土を盛り上げて作られている。方向は南北畦畔が真北から11~12°東に振れており、東西畦畔はこれにほぼ直交している。規模は表3の通りで2条共にほぼ同じである。調査区南西部で検出した段差は直下の5層水田跡の大畦畔の東側のラインに一致することと高さが小畦畔に比べてやや高いことから大畦畔の片側を検出した可能性もある。

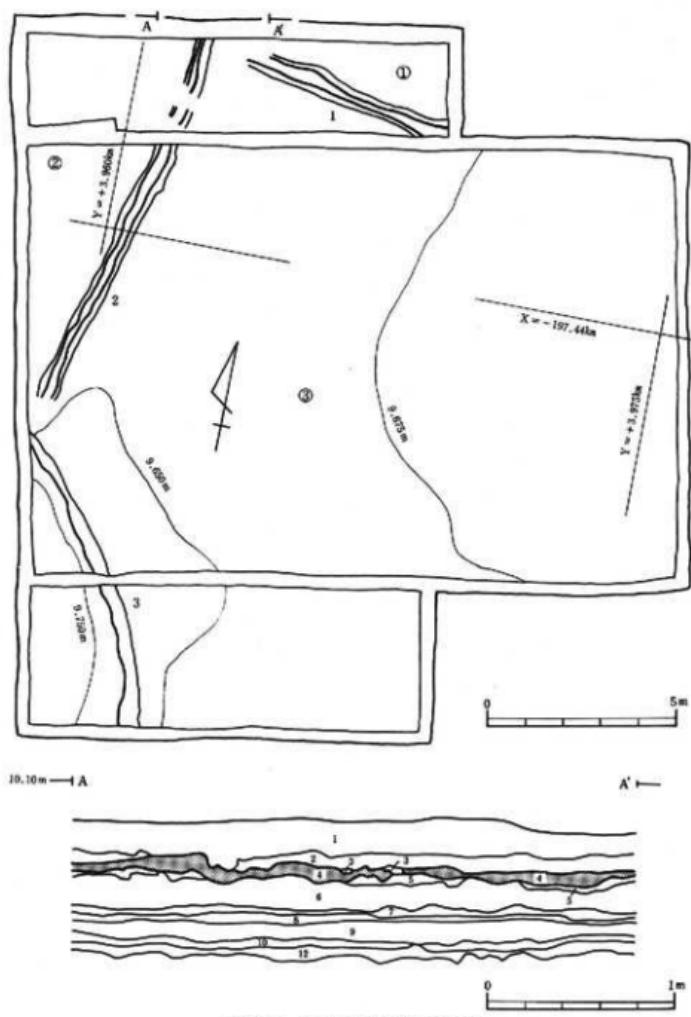
水田区画：①~③まで認められたが全体を検出できた区画はなく、区画の平面形や規模は不明である。なお、段差の西側部分は畦畔部分と水田区画部分の区別が付かないため区画No.は付けていない。

水田面の傾斜：全体の地形は西から東に下っているが、区画③は地形面の傾きとは逆に西半部が低い（調査区内における比高差は約5cm）。全体を検出できた区画がないため区画内及び区画間の比高差は不明である。

〈出土遺物〉 ロクロ土師器片、陶器片などが数点出土したが図化出来るものはなく、遺構との関係も不明である。

No.	方 向	底 高さ (m)	上 施 工 高 (m)	下 施 工 高 (m)	高 度 (m)	個 数	セ
1	N-29°-W	3.22±1.1	16~46 (平均28)	34~76 (平均35)	1~3		
2	N-12°-E	11.4	13~22 (平均20)	20~72 (平均62)	1~9	5層水田跡No.1と同位置？	
3	N-40°-W	9.0±2.0			3~12	位置、5層水田跡No.2と同位置	

第3表 4層水田跡畦畔計測表

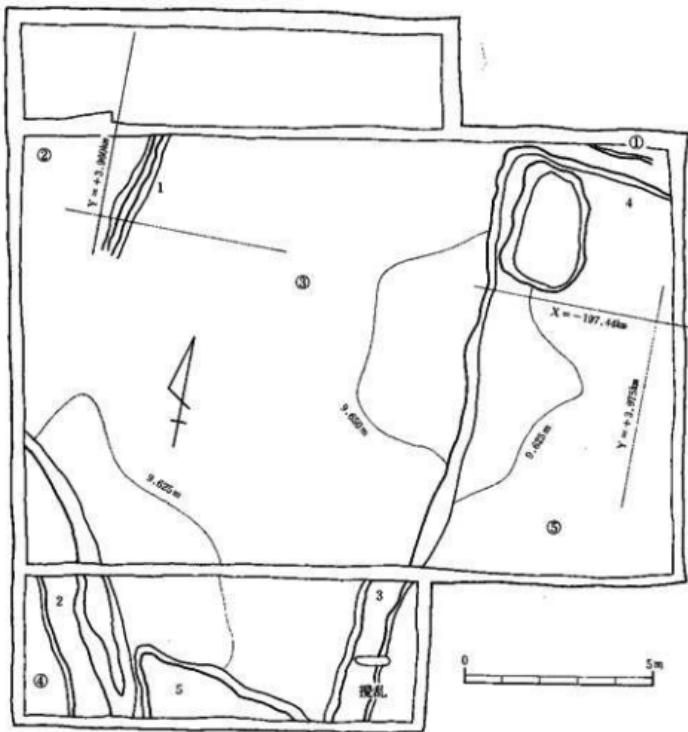


第29図 4層水田跡平面・断面図

## (2) 5層上面

## 5層水田跡（第30図）

〈構造状況〉 東西・南北方向の小畦畔と段差及び斜行する大畦畔、土坑によって構成されている。畦畔や段差は4層を削り込む過程で確認し、土坑は5層上面で確認している。これらは4層水田跡の耕作土によって攪乱されており、遺存状況は良くない。



第30図 5層水田跡平面図

No.	方 向	尺 0m	上 斜 傾 向	下 斜 傾 向	高 底 高	面	考
1	N 12° - E	3.41上	10~25 (平均20)	46~64 (平均54)	1~9	4層水田跡No.5上四位置	
2	N-35°-W	7.41上	67~98 (平均79)	168~203 (平均185)	1~12	大畦畔	
3	N-4°-E	鑿定16.1	67~98 (平均78)	96~117 (平均109)	1~4	大部分が鉛直として傾斜	
4	N 82°-W	3.013上	42~52 (平均46)	72~83 (平均77)	1~5		
5	N-80°-W	5.13上			1~3	段差	

第4表 5層水田跡畦畔計測表

耕作土：耕作土は基本層5層で、黒褐色の粘土である。厚さは1~15cmで一定せず、下面は起伏があるがそれほど激しくはない。下層への食い込みは直下の6層中で止まっている。層中に直下の6層のブロックが少量含まれている。

畦畔：大畦畔を1条（No.2）、小畦畔3条（No.1・3・4、このうち1条は途中が段差のみの検出となっている）、段差を一箇所（No.5）検出した。畦畔は耕作土を盛り上げて作られている。方向は南北方向。

小畦畔が真北から4~

12°東に振れ、東西方

向の小畦畔と段差はこ

れらにはば直交する位

置関係にあるが、大畦

畔の方向はこれらとは

異なっている。規模は

表4の通りで、ややば

らつきがあるが、大畦

畔の下端幅は小畦畔の

2~3倍前後ある。段

差は調査区南部で検出

したが、大畦畔の片側

を検出したのか、ある

いは小畦畔に伴うもの

であるのかは不明であ

る。

水田区画：①~⑤まで

認められたが全体を検

出できた区画はない。

区画の平面形は方形を

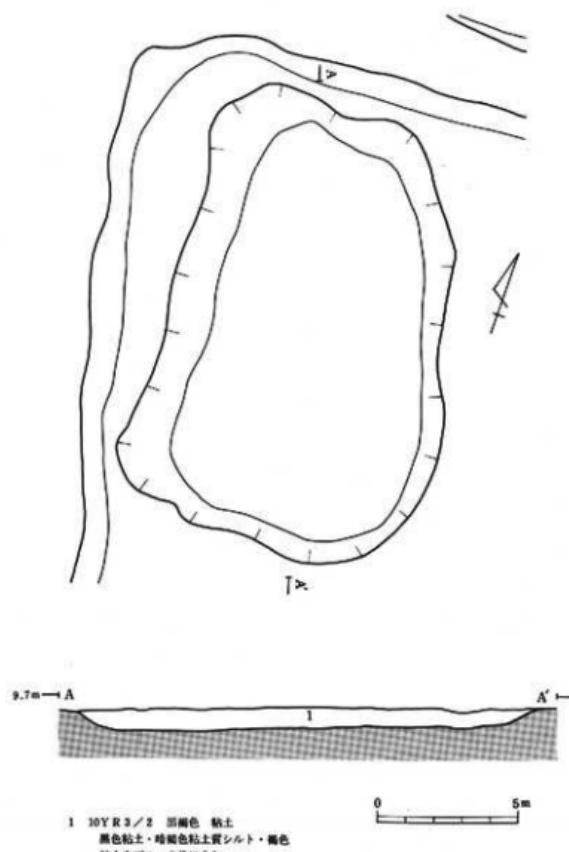
基調としていると考え

られるが、大畦畔No.2

が他の畦畔に対して斜

行しているため区画③

は歪んでいる。規模は



第31図 SK 1 平面・断面図

区画③の東西長が約9mと推定できるのみで、他は不明である。なお、段差の南側部分は畦畔部分と水田区西部分の区別が付かないため区画No.は付けていない。

水田面の傾斜：全体の地形は西から東に下っているが、区画③のみは地形面の傾きと異なって東端部が高く、南西部の水口付近がわずかに低くなっている。また、全体を検出できた区画がないため区画内及び区画間の比高差は不明である。なお、遺物は出土しなかった。

水口：大畦畔No.2の東側に段差No.5が取り付くが、この間の溝状に途切れた部分が水口と推定される。区画③の水田面がこの部分に向って低くなることから③から南方に配水する機能を有すると考えられる。

**土坑-SK1（第31図）** 5層水田跡の区画⑤北西コーナーに位置する。平面形は不正な方形を呈し、長軸方向はほぼ畦畔No.3の段差部分の方向と一致している。大きさは約3.0×2.0mで、深さは約14cmである。底面は平坦で、壁はごく緩やかに立ちあがる。

堆積土は基本層4・5層に類似し、6層ブロックを含んでいる。出土遺物はない。

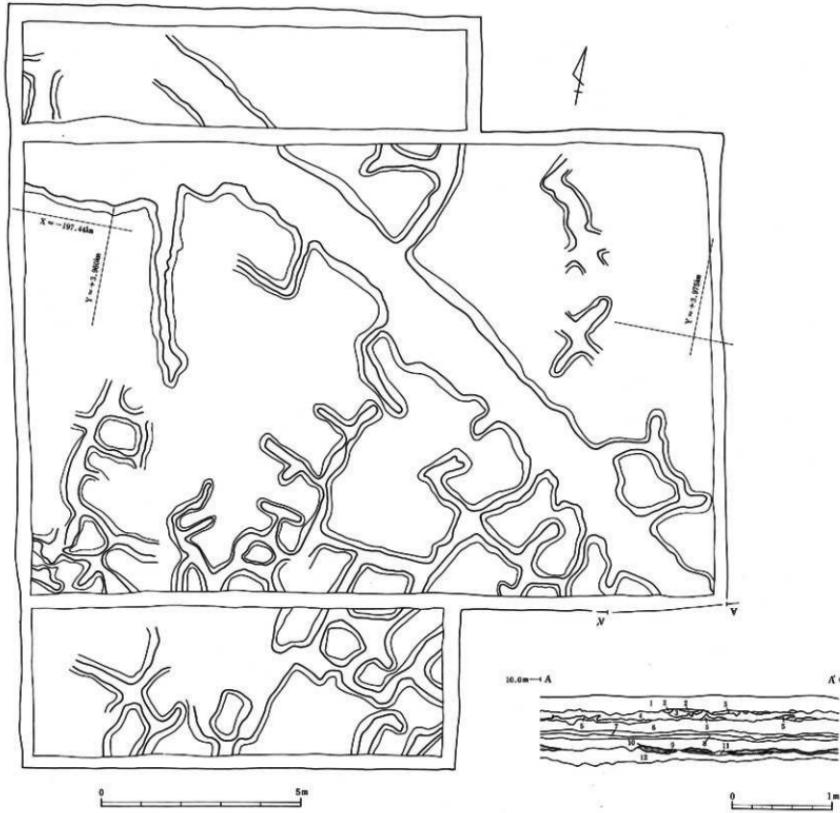
確認状況や堆積土からは4層水田跡・5層水田跡のどちらに伴うものか断定はできない。なお、性格は限定できないが、堆積土の状況からすると掘り込まれた後比較的短期間で人為的に埋め戻されたと考えられる。

### (3) 10層上面

10層上面では畦畔状の高まりを多数検出した。これらは畦畔である可能性はあるが、10層自体が安定した状況を示す分布の途切れる箇所があること、また畦畔状の高まりは不明瞭なものが多いことから水田跡とは断定できなかった。

畦畔状の高まりは調査区の北西から南東に延びる幅の広いものが1条と、それに取り付く幅の狭いものが多数認められた。幅の広いものは下層の12層水田跡の大畦畔と同位置にあり、上端幅88~192cm（平均124cm）、下端幅112~236cm（平均161cm）、高さ1~7cmである。10層が耕作土とすれば12層水田跡の大畦畔を踏襲して造られた大畦畔で、10層が耕作土でないとすれば12層水田跡の大畦畔に伴う擬似畦畔Aに相当する。一方幅の狭いものは調査区南東部では比較的直線的に伸び、方向も大畦畔状の高まりに平行あるいは直交するものが多いが、西半部では方向性に企画性は認められない。規模は上端幅25cm前後、下端幅50cm前後、高さ1~5cmである。これらは小畦畔である可能性と、層上面の微細な高まりである可能性とが考えられるが、どちらとも断定はできない。

なお、10層上面の標高は9.22~9.34mである。勾配は約6cm/10mで、南西方向に緩やかに下っているが、調査区東部は比較的平坦である。10層が水田跡と仮定した場合、区画が不明確なため区画内及び区画間の比高差は明らかではないが、調査区南東部では2~3区画が比高差2.5cmの間に収まる（第32図）。



第32図 10層上面平面・断面図

なお、遺物は出土しなかった。

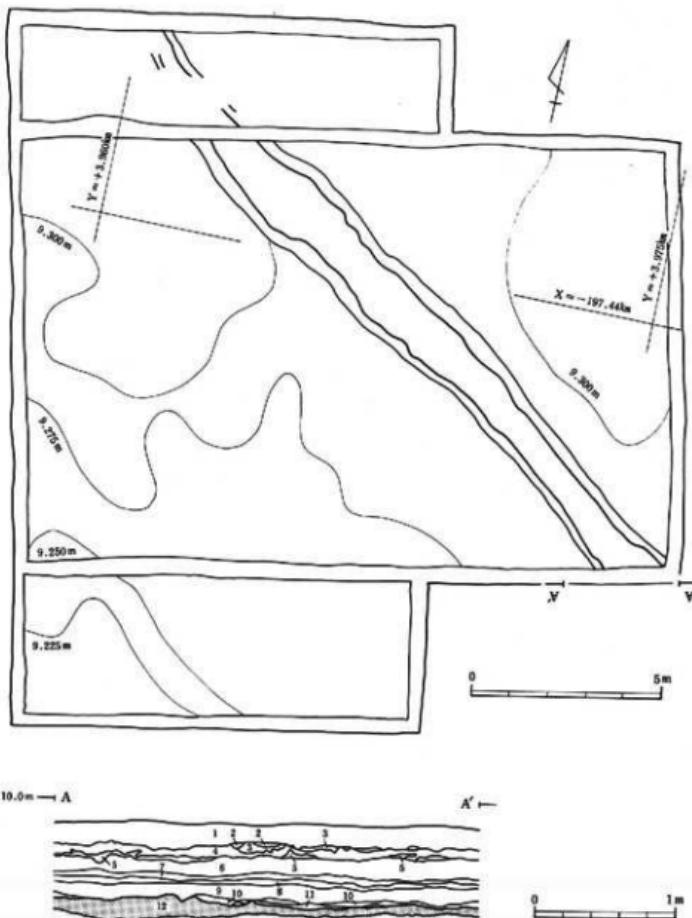


第33図 10層上面標高

(4) 12層上面

12層水田跡（第34図）

〈遺構状況〉 大畦畔を1条検出した。11層は部分的に遺存するのみであるので、畦畔は10層を削り込む過程で確認した。



第34図 12層水田跡平面・断面図

耕作土：耕作土は基本層12層で、黒褐色の泥炭質粘土である。厚さは2~20cmで一定せず、下面はやや起伏がある。

畦畔：検出した畦畔は大畦畔1条のみで耕作土を盛り上げて作られている。方向はN-55°-Wではば直線的に延びる。規模は上端幅43~166cm（平均104cm）、下端幅80~224cm（平均165cm）、高さ2~7cmである。

水田区画：大畦畔によって造られた大区画が認められたのみで、区画の規模などの詳細は不明である。

水田面の傾斜：水田面は全体の地形と同様に南に下がっており、調査区内における水田面の標高は9.20~9.32mである。調査区南西部がやや傾斜があるが、勾配は約7cm/10mである。区画が不明なため区画内及び区画間の比高差は明らかではない。

なお、遺物は出土しなかった。

#### (5) その他の出土遺物（第35図）

1・2層中から土師器、赤焼土器、須恵器、かわらけ、陶器、磁器、瓦、石器（剥片）、石製品、金属製品、土師質土器、瓦質土器、鉄滓等、30層上面から石器1点が出土した。1・2層中の遺物はほとんどが細片で図化できたものは少ない。

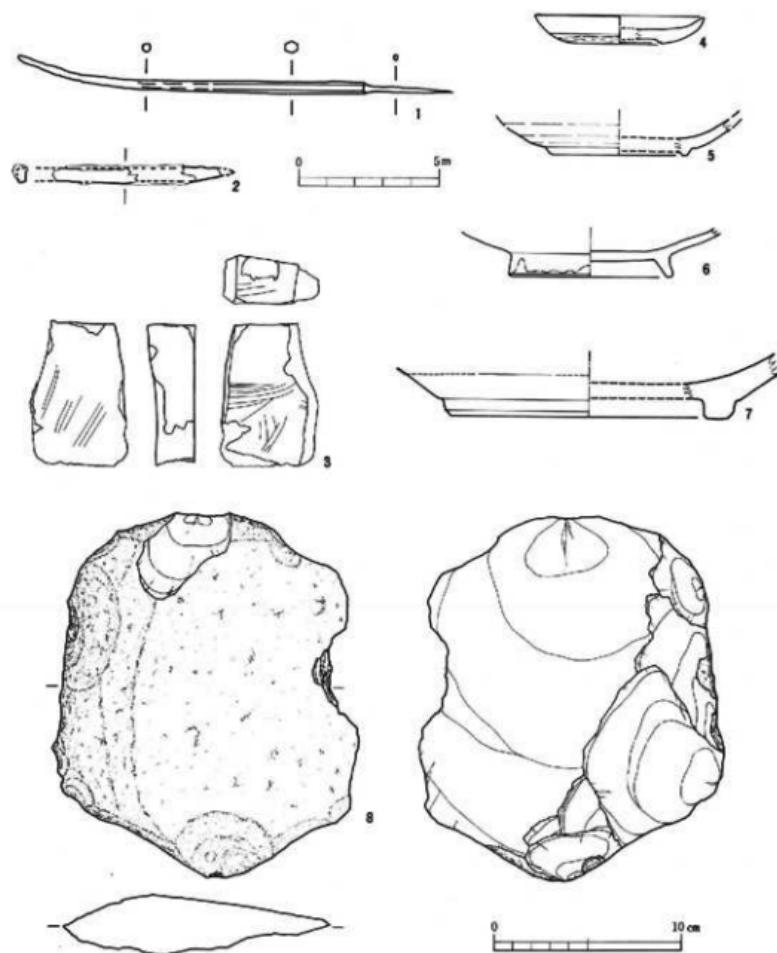
陶器のうち産地・年代を確定できるものは少ないが、2層中からは瀬戸・美濃産の皿(4)、志野産の丸皿(5)が出土しており、これらが2層の年代の上限を示す可能性はある。

#### (6) 下層の調査

13層以下は約8×8mの試掘区を設けて掘り下げた。調査区南西200~300mに位置する第30次・58次調査区では後期旧石器時代に属する生活跡・樹木群等が検出されているため当調査区におけるそれらの有無を確認するのが主目的である。

13層以下は泥炭質粘土層から粘土層へ移行し、27層以下が粘土層のみになる。グライ化が顕著になる30層上面で礫石器1点（第35図8）が出土したが、遺構は検出できなかった。この30層以下は粘土に砂粒が混入するようになるが、これらのグライ化した粘土層（30~35層、厚さ約1m）の直下標高約5.9mで色調の薄い腐植質粘土層<sup>(1)</sup>（36層）を検出した。この腐植質粘土層が第30次・58次調査区等で検出されたものと類似することから、これ以下の層の精査を実施した。

精査の結果36層以下にも2枚（38・39層）の腐植質粘土層が検出された。38層は上面の標高が約5.75mで色調の濃い腐植質粘土層と色調の薄い腐植質粘土層の互層、39層は上面の標高が約5.6mで、部分的な分布を示し、粘土層中に色調の薄い腐植質粘土層が斑状に含まれるものである。各層上面はかなり起伏があるが、上層の32層以下40層上面まではかなり起伏があるので、層の起伏は腐植質粘土層に限ったものではない。



No.	形状・回数	通称・部位	種類	特徴	着目度	口径	底径	壁高	色		特徴
									外 面	内 面	
1	53-1	2層	鉄製品	丸形	金	約15.5cm					断面八角形・用途不明
2	53-2	1・2層	鉄製品	丸形	丸形欠損			達計長: 6.0cm			錆化が激しい
3	53-3	2層	石製品	靴形	靴形片						
4	53-4	2層	陶器	縁	1/6	(9cm)	(4.4cm)	(1.5cm)	灰青色(内側)・灰白	浅青色釉	漆死品、内・外面灰胎、腹口尖端、16cm?
5	53-5	2層	陶器	丸底	底盤小片	?	(7.5cm)	?	灰青色	灰青色	削り出し両台、内・外面灰胎、底口、17cm?
6	53-6	1層	陶器	縁	下盤小片	?	(6.8cm)	?	灰青色	灰青色	削り出し両台、内・外面灰胎、底口、18cm?
7	53-7	2層	陶器	縁	底盤小片	?	(15.4cm)	?	オリーブ無色	オリーブ無	削り出し両台、内・外面灰胎、底、19cm?
8	53-8	30層上位	二次加工のある片片	藍大兵16.5cm・藍大盤16.1cm・盤33.4cm・盤31.2cm(宝山青)							

第35図 その他の出土遺物

なお、間の37層を含めて、各層上面や層中からは遺構・遺物は検出されず、樹木や結晶等の自然遺物も全く認められなかった。土壤水洗の結果も同様である。<sup>(註1)</sup>

また、最後に43層を標高5mまで掘り下げたが他に腐植質粘土層は確認できなかったため、調査を終了した。

#### 4. 遺構の所属年代とまとめ

1. 検出遺構は4・5・7・12層水田跡とSK1である。このうち7層水田跡は耕作土のみの検出であるが、東方約150m離れた第28次調査区（佐藤：1988）および49次調査との層位の対応関係から水田跡と認定した。またこの他2・3・10層も水田土壤の可能性がある。
2. 各水田跡のうち遺物が出土したのは4層水田跡のみで、その他は遺物が皆無であった。また4層水田跡の場合も遺構に伴う遺物を限定することはできなかった。このため各層の年代を限定するのは困難であるが28次・49次調査区との層位の対応関係から以下のように推定される。

〔第74次調査〕 〔第28次調査〕 〔第49次調査〕

4層水田跡	4層	4a層	灰白色火山灰降下時以降
5層水田跡	5層	5a層	灰白色火山灰降下時以前
7層水田跡	9a層	9a層	弥生時代（十三塚式期）
12層水田跡	11a層	11層	弥生時代（掛形圓式期）

3. 36～39層については花粉分析結果から30次・58次調査等で検出された旧石器時代の層に対応する可能性はあるが、遺構・遺物等が検出されなかつたため確定できない。現段階ではその可能性を指摘するに留めておきたい。

（註1）腐植質粘土層については富沢遺跡第57次調査（佐藤他：1991）を参照。

（註2）35～40層についてサンプル土を採取し、各層2kgずつを無作為に抽出して土壤水洗を行った。

## 第6節 富沢遺跡第75次調査

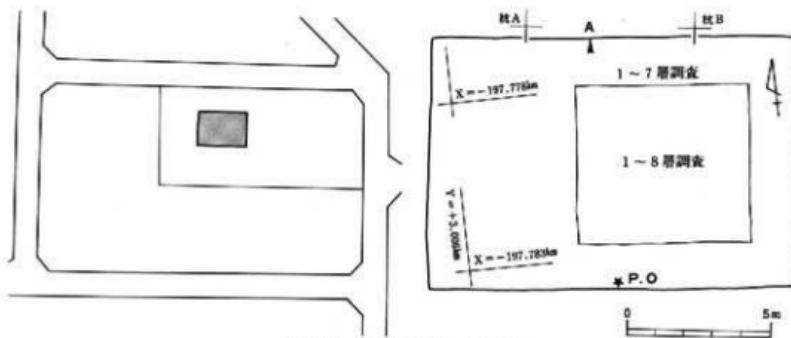
### 1. 調査方法

調査区の設定面積は約115m<sup>2</sup> (12.8×9 m) である。調査は、盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）までを重機で排除し、以下は人力により行った。8層上面までは調査区全面の精査を行ったが、8層以下は安全確保のため6×5.5mの調査区とし段階を行っている。調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けている。測量は杭A・Bを基準としている。杭の座標値は平面直角座標第X系で、杭A : X = -197.97546km, Y = +3.76706km・杭B : X = -197.97618km, Y = +3.01468kmである。

### 2. 基本層序

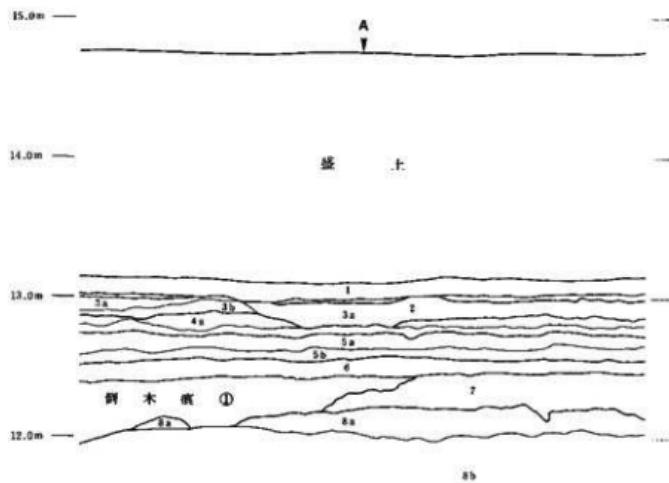
調査区内において盛土下に大別で8層、細別で12層の層序を確認した。各層の性質は1～4層がやや砂質の粘土質シルトで、3a・3b層では灰白色火山灰が検出されている。5a層は砂で、5b層にも粗砂が含まれるが、5b～8層までは粘土である。7層下部からグライ化がみられ8層では顕著になる。各層ともほぼ水平な堆積状況を示すが、若干東南方向へ緩やかな傾斜がみられる。遺物出土層は1・2・3a・3b・7・8a層である。

当調査区では2層から6層までの計8地点のプラント・オパール分析を実施（第3章参照）した。結果として、2・3a・3b・4a・4b層からイネのプラント・オパールが検出され、特に3b層では高い値となっている。



第36図 調査区位置図・設定図

当調査区南側に第24次調査区が位置している。調査結果としてⅠ～Ⅹ層の基本層が確認され、造構として近世～弥生時代の水田跡・縄文時代の包含層等が確認されている（工藤他：1988）。詳細な層対比には難があるが当調査区3層はV層に、5a層はⅦ層に、8層はⅩ層にほぼ対比可能かと判断される。



第37図 基本層序

層序	色	調	性	質	厚	鐵化	侵入物	遺	考
1	灰 黃褐色	10YR 4/2	新	土質シルト	8~16cm	下部に褐鐵	—	—	現代の水田土層
2	角 細	10YR 3/2	新	土質シルト	5cm前後	鐵大有	—	—	—
3a	角 細	10YR 2/3	新	土質シルト	5~10cm	鐵文有	層中に火山灰のブロック	水田土壤・土壌鉄・褐鐵礫片	—
3b	角 細	10YR 2/3	新	土質シルト	5~10cm	—	層中に火山灰のブロック	水田土壤・土壌鉄片	—
4a	灰 黃褐色	10YR 4/2	新	土質シルト	9~14cm	—	—	—	—
4b	灰	10YR 2/1	新	土質シルト	8cm前後	—	—	—	—
5a	灰 黃褐色	10YR 4/3	砂	土	6~14cm	—	—	—	—
5b	角 細	10YR 4/4	砂	土	4~12cm	—	鐵分	—	—
6	角	10YR 1/7/1	砂	土	6~16cm	—	—	—	—
7	角 細	10YR 2/2	砂	土	15~23cm	—	—	—	石器・縄文土器片
8a	カーブ灰褐色	10Y5/2	砂	土	26~36cm	—	—	—	グリーン化
8b	カーブ灰褐色	10Y5/2	砂	土	35cm以上	—	—	—	グリーン化・8aに較べ暗い
①	角	10YR 1/7/1	砂	土	—	—	—	—	飼木痕跡

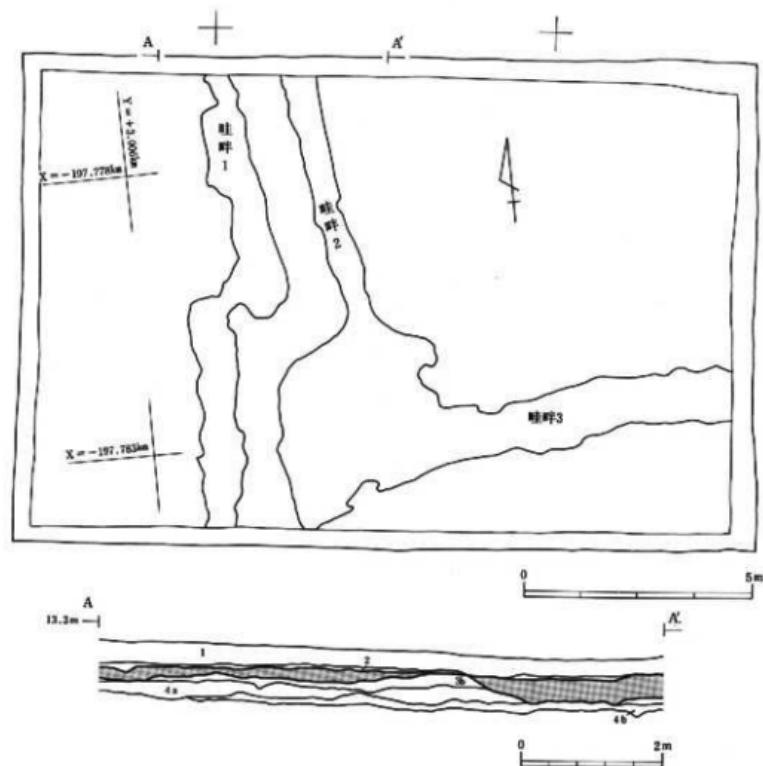
### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 3a層水田跡（第38図）

〈遺構の検出〉 3b層上面で東西及び南北に延びる幅50～100cm程の駐畔状の高まりを3条

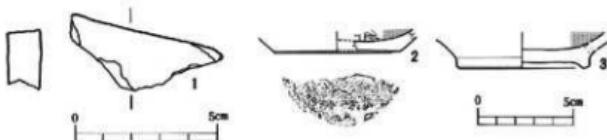
確認した。土層の特徴及び断面状況から擬似畦畔B（斎野他：1987）と考えられ、擬似畦畔が検出された直上の3a層上面に畦畔が存在していたものと判断された。擬似畦畔（以後、畦畔）1と畦畔2は80cm程の間隔をおき南北に延びるもので状況から間に水路が存在していたものかと考えられた。畦畔の方向はN-9°-Wである。畦畔3は畦畔2にはば直交する形でとりつき、接地部分は幅が広くなっている。畦畔2の方向はE-3°-Nである。区画は3区画検出した。規模・形状は知り得ないが状況から方形を基調とするものと考えられる。耕作土は5～18cm程残存しており、下面には浅い凹凸がみられる。東側部では攪拌のため3b層が点的にしか遺存しない所がみられ、層中には3b層及び灰白色火山灰が小ブロックで混じっている。

〈出土遺物〉 耕作土中より破片資料ではあるが土師器・須恵器が若干量出土している。掲載遺物は土師器壺と須恵器壺？の2点である。土師器壺はロクロ使用の底部破片資料である。内



第38図 3a層水田跡

面にはヘラミガキ・黒色処理が施され、外面はロクロ調整のみである。切り離しは回転糸切りで無調整である。須恵器は小破片で器種が断定できない。断面の一面 ( $12 \times 56\text{mm}$ ) が擦られており砥石として再使用されたものと考えられる。



No.	写真図版	層位	種別	特徴	遺存度	基部	側面	背面
1	3a層	土 壤 面	鉢?	全体小片	—	灰 色	灰 色	範石に軽用(側面を使用)
2	3a層	土 壤 面	外	紅部 1/3 (6.6cm)	—	灰 色	灰 色	底面回転糸切り調整。外側マクローランナ。内面ヘリカギ・黒色処理
3	3b層	土 壤 面	高砂村原	鉢	7cm	灰 色	灰 色	付け西面、底部回転糸切り、外側マクローランナ。内面ヘリカギ・黒色処理

第39図 3a・3b層水田跡出土遺物

## (2) 7・8層出土遺物

各遺物にまとまりではなく、調査区内で散在した状況で縄文土器・石器・礫が出土している。7層では縄文土器37点・石器142点、8層では縄文土器2点・石器42点・礫2点が出土した。縄文土器はすべて小破片で地文がかすかに確認されるのみで、器形等は不明である。胎土に纖維が含まれるものもある。尚、7層上面で倒木痕跡を1基確認している。

### ① 7・8層出土石器

基本層7層から142点、基本層8層から42点、計184点の石器が出土している。これらはすべて打製石器である。以下のようにI～IV類に分類され、V・VI・VII類を除き、細分を行なった。またV～VI類、VII類の類別基準は芹沢編(1979)『聖山』にもとづいており、V～VI類は「不定形石器」として分類されたものに含まれている。

#### 1) 分類

I類：石鏃。13点出土している。基部の形態によりa種：平基式（第40図1）、b種：凹基式（第40図2）に分けられる。この他c種として、未製品・基部の形態の不明な折損品を分けた。

II類：尖頭器。4点出土している。a種：凹基式石鏃と同様の形態で大型のもの（第40図3）と、b種：両側縁が平行し、細長いもの（第40図4）に分けられる。

III類：石錐。2点出土している。a種：錐部が太く、短いもの（第40図5）と、b種：錐部が棒状で細身のものがある。

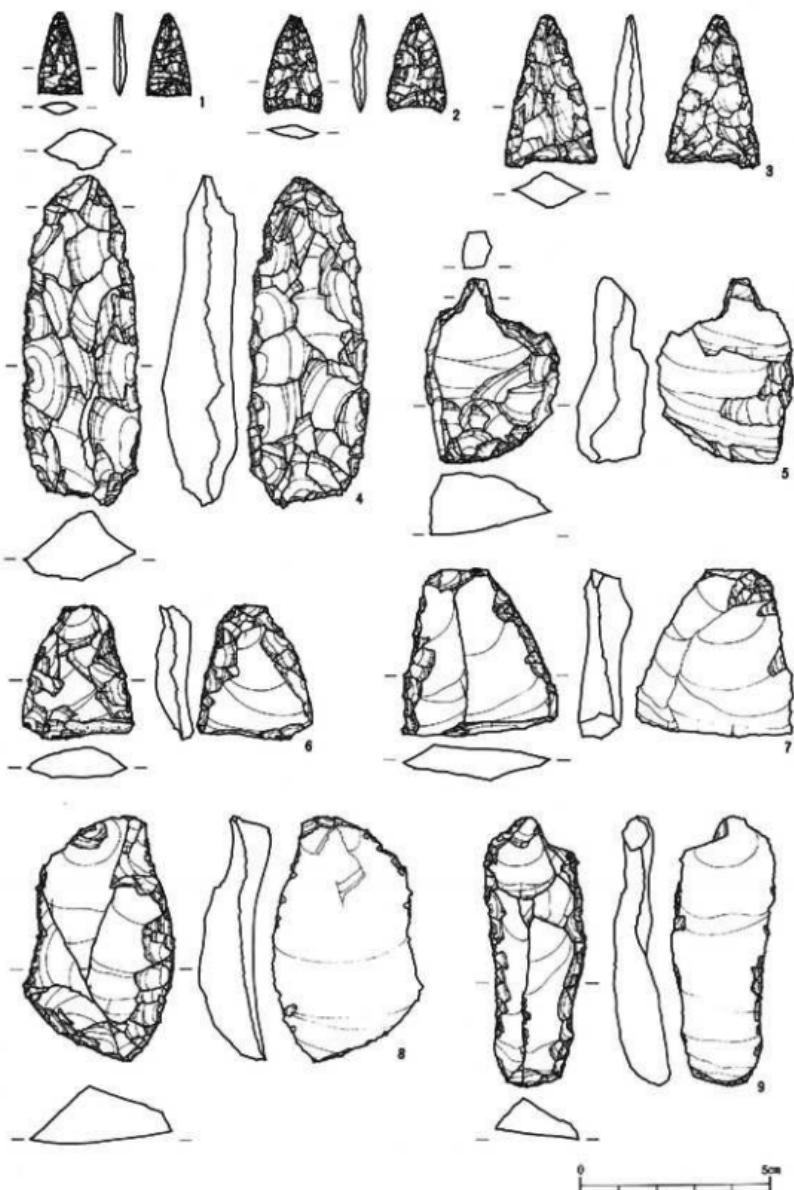
IV類：「平坦な二次加工が連続して施された刃部を有するもの。所謂「スクレイパー」。」10点出土している。a種：二側縁を刃部とするもの4点と、b種：末端と側縁を刃部とするもの3点に分けられる。a種には錯交剥離が施されているもの（第41図1・2）と背面加工のもの（第

第5表 7層出土石器の類別と石材の関係

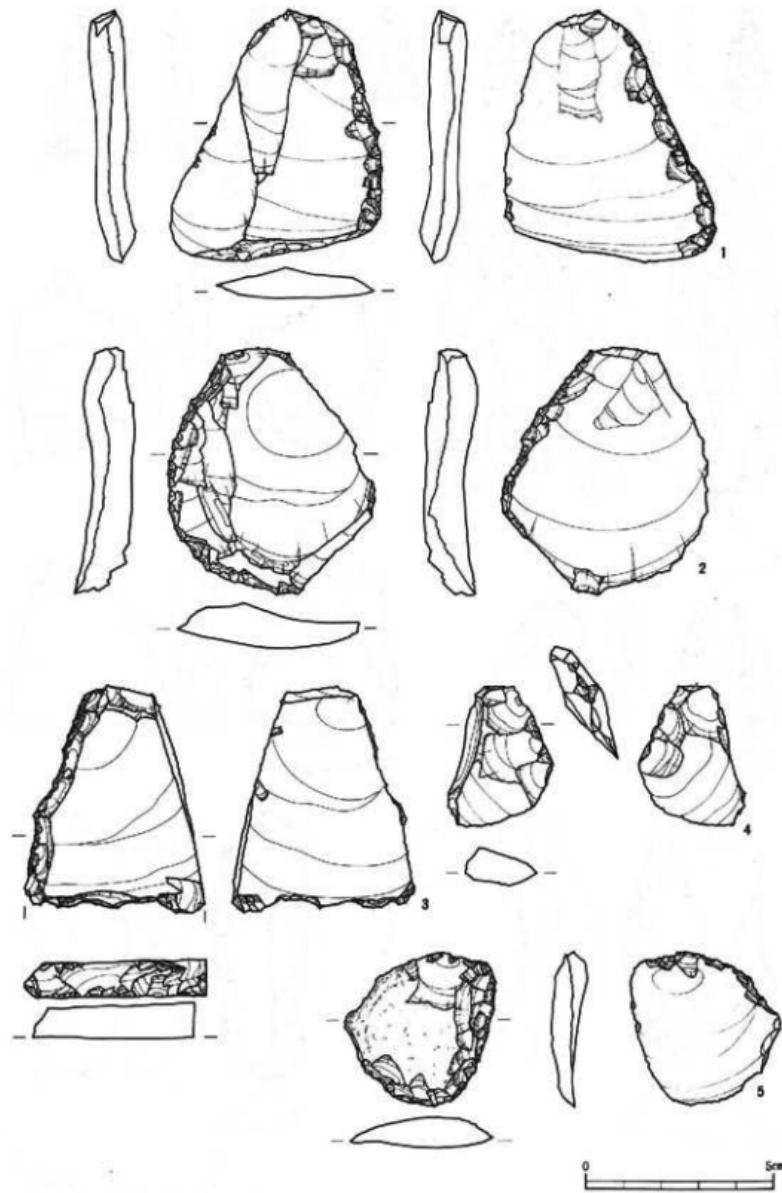
	I	II	III	N	V	VI	VII	VIII	K	X	XI	計										
	7	2	0	8	1	1	19	5	15	9	64	131										
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	a	b	c										
	1	4	2	1	1		4	2	2	4	3	12	1	4	7	6	2	4	5	32	5	27
珪質頁岩	1	2	1	1			4	2	2	1	2	3		4	5	2			9	3	8	50
細粒珪質 凝灰岩										2	1	1		1			1	6		6	18	
石英安山岩 質凝灰岩		1	1					1		1	4		1	1			1	3	2	9	25	
石英安山岩								1		2						2	3	2	2	12		
黒曜石									1	2		3	1			1	1	10	2	21		
玉髓	1											1									2	
碧玉	1																2				3	

第6表 8層出土石器の類別と石材の関係

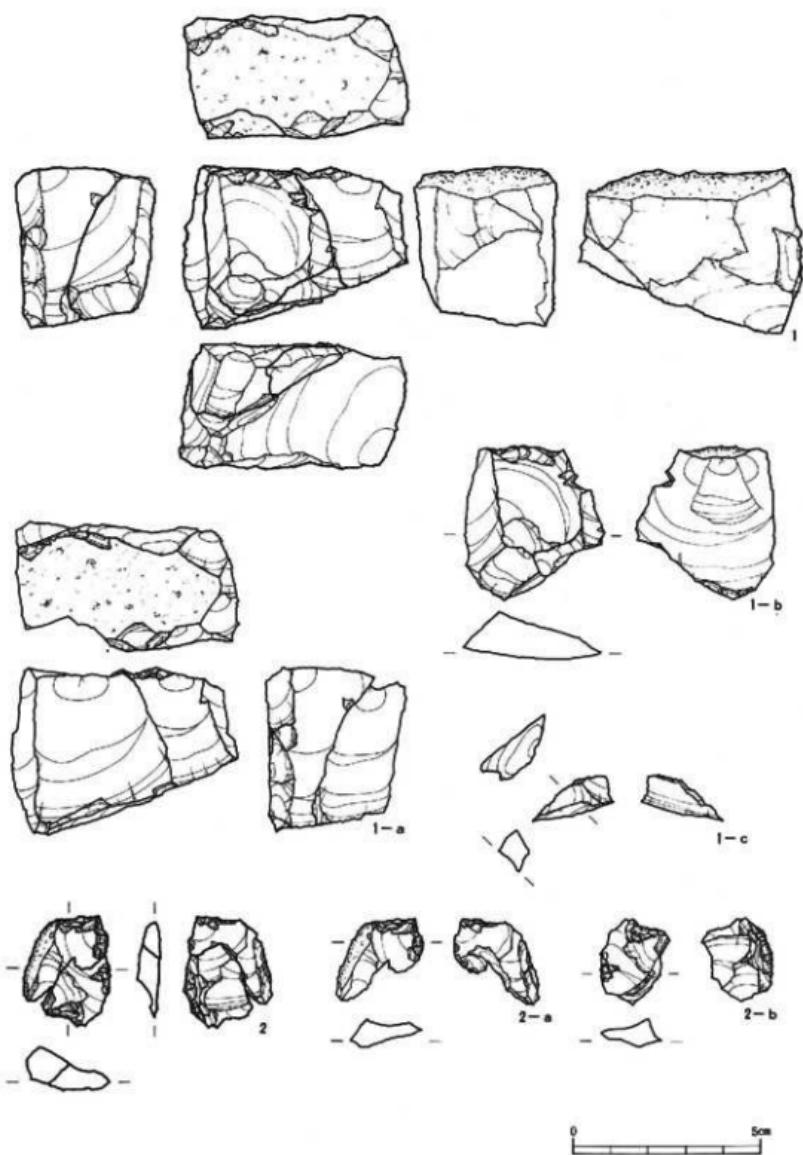
	I	II	III	N	V	VI	VII	VIII	K	X	XI	計			
	1	1	1	2	1	2	4	4	4	0	20	40			
	a	b	c	a	b	a	b	c	a	b	c	a	b	c	
	1	1	1		1	1		1	1	3	1	7	2	11	
珪質頁岩				1		1	1		2	2		2	1	3	14
細粒珪質 凝灰岩								1	1			1			3
石英安山岩 質凝灰岩	1	1					2	1	1	1	1	1	1	6	16
石英安山岩															0
黒曜石									2			3	2	7	
玉髓															0
碧玉															0



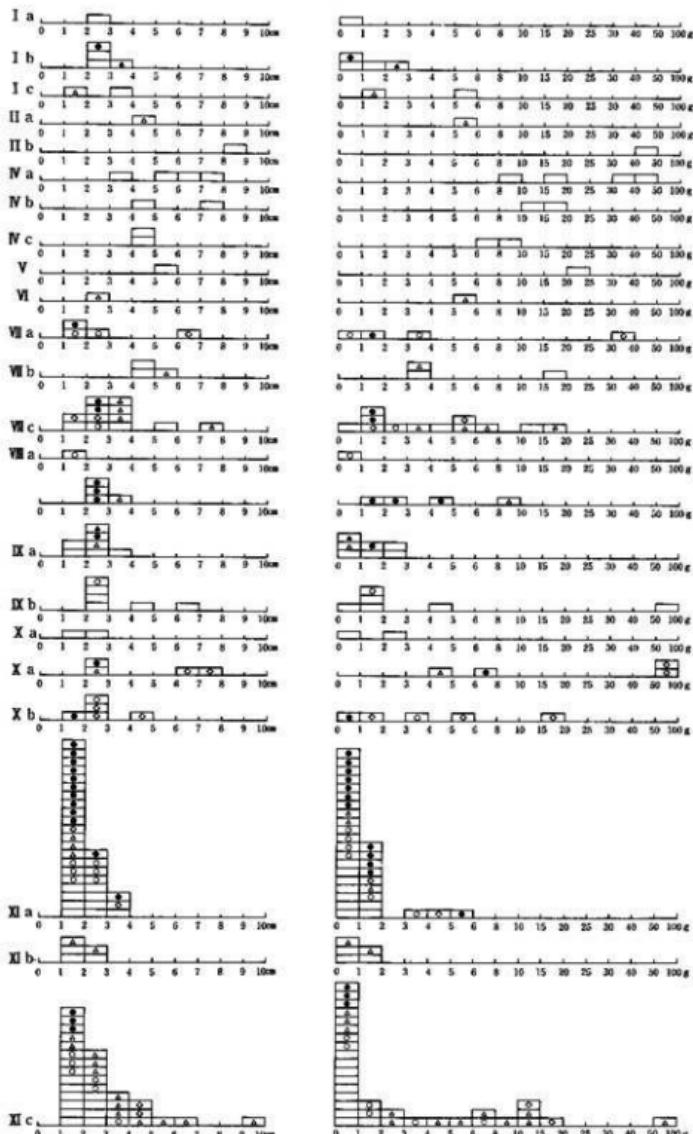
第40図 7層・8層出土石器実測図(1)



第41図 7層・8層出土石器実測図(2)

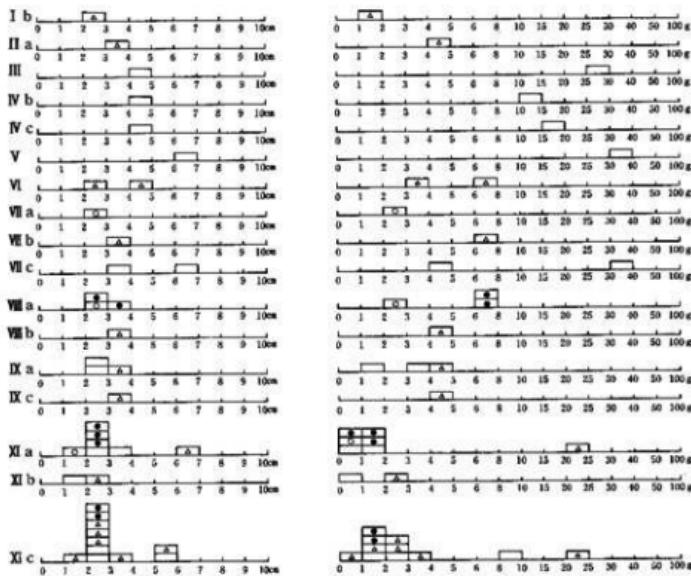


第42図 7層・8層出土石器実測図(3)



凡例 □ 共質良岩 ○ 細粒珪質凝灰岩 ▲ 石英安山岩質凝灰岩 ◑ 石英安山岩 ◎ 黑曜石 △ 下駄 ◆ 塔玉

第43図 類別の最大長、重さ、石材との関係（7層）



凡例 □ 块質頁岩 □ 鈍粒頁質凝灰岩 □ 石英安山岩質凝灰岩 □ 黒曜石

第44図 類別的最大長、重さ、石材との関係（8層）

第7表 7層・8層出土石器観察表

探査番号	採取番号	出土層位	名 称	最大長さ	最大幅	厚さ	重さ	石 材	加付	備 考
第40回 1	54-1	7 層	石縫	2.16	1.11	0.26	0.7	块質頁岩	I a	
第40回 2	54-2	7 层	石縫	2.41	1.48	0.37	1.0	块質頁岩	I b	
第40回 3	54-3	7 层	尖頭器	4.93	2.35	0.84	5.1	石英安山岩質凝灰岩	I a	
第40回 4	54-4	7 层	尖頭器	8.8	3.15	1.77	46.0	块質頁岩	I b	
第40回 5	54-5	8 层	石縫	4.93	2.65	1.45	27.0	块質頁岩	II	
第40回 6	54-6	7 层	メタレイバー(不定形石縫 1段)	3.70	3.15	0.84	8.5	块質頁岩	II a	
第40回 7	54-7	7 层	メタレイバー(不定形石縫 1段)	5.1	4.41	1.2	19.0	块質頁岩	II a	斜面面有り
第40回 8	54-8	7 层	メタレイバー(不定形石縫 1段)	6.54	4.21	1.73	34.5	块質頁岩	II b	
第40回 9	54-9	7 层	メタレイバー(不定形石縫 1段)	7.2	2.59	1.26	18.0	块質頁岩	II b	
第41回 1	54-10	7 层	メタレイバー(不定形石縫 1段)	7.2	3.03	0.88	23.0	块質頁岩	II a	斜面面有り
第41回 2	54-11	7 层	メタレイバー(不定形石縫 1段)	6.84	3.36	1.37	42.0	块質頁岩	II a	
第41回 3	54-12	8 层	尖頭器打削直端	6.48	4.65	0.89	36.0	块質頁岩	V	
第41回 4	54-13	8 层	不定形石縫打削	4.93	2.65	0.95	7.5	石英安山岩質凝灰岩	VI	
第41回 5	54-14	8 层	メタレイバー(不定形石縫 1段)	4.3	3.64	0.8	13.0	块質頁岩	II b	斜面面有り
第42回 1		7 层	—	—	—	—	—	石英安山岩	第40回 1 a + b + c が結合	
第42回 1-a		7 层	石縫	6.15	4.72	3.14	91.0	石英安山岩	X a	
第42回 1-b		7 层	剥片	4.27	4.03	1.14	16.5	石英安山岩	X b	
第42回 1-c		7 层	剥片	2.14	0.80	0.78	1.5	石英安山岩	X c	
第42回 2	54-15	7 层	ビーム・スリムセード	2.9	2.6	0.92	4.0	黑曜石	—	第42回 2-a + b + c が結合
第42回 2-a	54-14a	7 层	ビーム・スリムセード・崎片	2.9	1.71	0.92	2.5	黑曜石	崎 b	
第42回 2-b	54-14b	7 层	ビーム・スリムセード・崎片	2.29	2.08	0.74	1.5	黑曜石	崎 b	

40図7)両面加工のもの(第40図6)がある。第40図6はヘラ状石器として理解することもできる。この他a種とb種の判別ができないもの3点をc種として分けた。

V類:「片面加工による、急角度でかつやや大きな凹凸のある刃部を有するもの。」2点出土している。第41-3図は末端と一側縁に腹面からの連続した二次加工が施されている。

VI類:「側面観がジグザグな刃部を有するもの。」3点出土している。すべて二次加工は背腹両面から交互に行なわれている。第41-4図。

VII類:二次加工のある剥片。部分的あるいは連続的な二次加工が施されているもの。23点出土している。a種:折れ面のないもの、b種:折れ面はあるが、打面を残しているもの、c種:折れ面があり、打面を残していないものに細分した。

VIII類:ビエス・エスキューとその碎片。a種:ビエス・エスキューは「両極剥離痕」と2ヶ1対の鋭い刃部を有し、小形で、「四辺形の石器」であり、b種:その碎片は「2ヶ1対の刃部を有さないもの」である。a種4点、b種5点が出土している。第42-2図はビエス・エスキューの碎片2点が接合したものである。

X類:微細剥離痕のある剥片。15点出土している。石材の種類による石質の違いはあるが、ここでは森嶋・岡村(1984)にもとづき、便宜的に剥片の側縁に長さ2mm未満の剥離面が連続的に認められるものとした。剥離面の長さは、1mm未満のものが多い。VII類と同様、a~c種に分けた。

XI類:石核。9点出土している。a種:分割礫を素材とし、90度・180度の打面転移を行なうもの(第42図1-a)とb種:剥片を素材とし、腹面を作業面としているものに分けられる。第42図1はa種と剥片の接合資料である。a種の接合資料は2例、b種は1例認められる。

XII類:剥片。90点出土している。VII類と同様、a~c類に分けた。

XIII類:チップ。最大長10mm未満の剥片、碎片。部分的に採取された土壤サンプルの水洗選別により、38点が検出されている。

## ii) 石材

鰐沢聰史氏の鑑定により、石材は7種類に識別された。総数184点のうち、最も多いのは珪質頁岩の71点である。次いで石英安山岩質凝灰岩の46点、黒曜石の29点、細粒珪質凝灰岩の21点と続く。珪質頁岩と石英安山岩質凝灰岩が多数を占める傾向は、7層、8層とともに認められる。この両者には最大長4cmを越えるものも多い。黒曜石、細粒珪質凝灰岩の出度数量は比較的多いが、大きさは4cm未満で、同一母岩の可能性を示すものもある。黒曜石の石質については、7層から出土した1点だけが流紋岩質の透明感があるもので、他はすべて流理構造の認められる石英安山岩質の透明感のないものである。なお、8層には、石英安山岩、玉髓・碧玉は認められない。

これらの石材の産地は、黒曜石を除き、奥羽山系に求められるが、なかでも石英安山岩質凝灰岩、珪質細粒凝灰岩、石英安山岩は、富沢遺跡周辺での採取が容易なものである。黒曜石の産地については不明である。

### iii) 石材と類別された石器との関係（第43・44図）

- 7層：最も多く出土している珪質頁岩はV類・X類を除く各類に認められるが、I～III類の定形化した剥片石器及びIV類・V類との関連性の強いことが知られる。なかでもII類b種～V類はすべて珪質頁岩製である。他の石材では、石英安山岩質凝灰岩、玉髓、碧玉はI類、II類a種の石材としても用いられているが、主にVI～XI類に認められる。また、各種石材が認められるVII・K・XI類については、a～c種に分けたことによる石材及び大きさの違いはあまりないが、XI類での最大長2cm未満、重さ1g未満の比率が他に比べ高く、その中に含まれる黒曜石の点数も比較的多い。

- 8層：7層とほぼ同様の傾向にあるが、I類、II類に石英安山岩質凝灰岩が用いられている点でやや異なる。

### (3) その他の出土遺物

基本層1層から陶器片・石器が各1点出土し、2層では陶器・磁器・土師器片が計12点出土している。2層中の遺物は陶器・磁器が主体を占め、近世～近代頃の年代が想定される。

## 4. 遺構の所属年代とまとめ

検出した遺構は、3b層上面検出の3a層水田跡と7層面での倒木痕跡1基である。水田跡に関しては検出状況・分析結果から2層・3b層も水田跡と判断される。

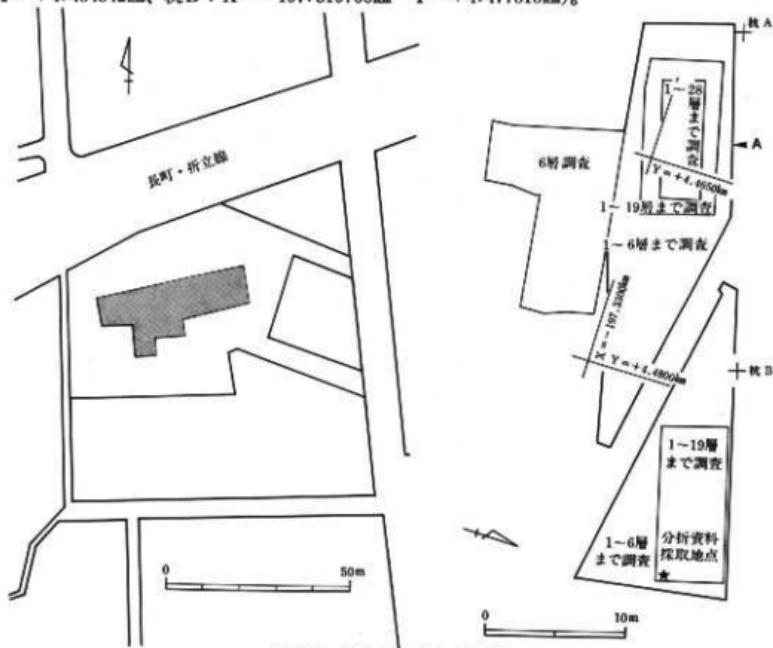
3a層水田跡は区画等詳細は明らかに出来なかったが、出土遺物・灰白色火山灰の存在から平安時代（10世紀前半以降）頃の年代が考えられる。畦畔は部分的な検出ではあるがほぼ南北方向を示しており、条里型土地割を考える（平間：1988）上での好資料となりうる。尚、3b層水田跡は断面観察等の状況から3a層水田跡と同様な規模・区画をもっていたものと判断され、時期も平安時代頃と考えられる。

7層及び8層で縄文土器・石器を検出したが、遺構としては7層面での倒木痕跡のみとなっており、遺物包含層としてとらえ得るものである。出土遺物に所謂纖維土器が含まれているが他の土器の存在も考え併せて、時期は縄文時代早期末・前期初頭以降としておく。

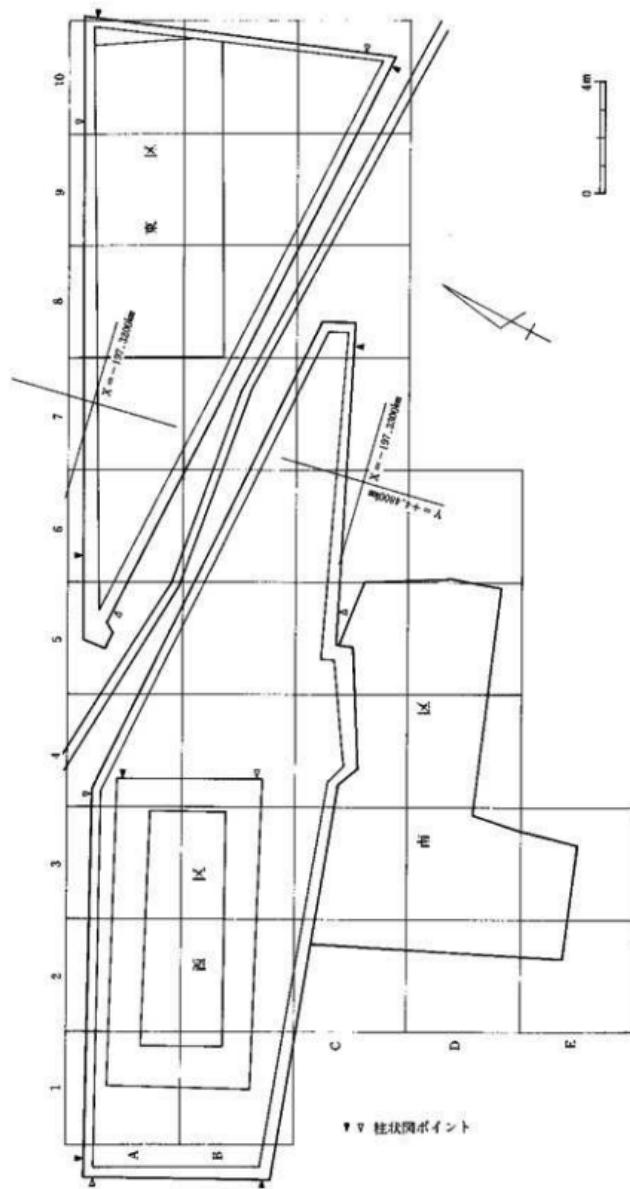
## 第7節 富沢遺跡第77次調査

## 1. 調査方法

調査区の設定面積は、約470m<sup>2</sup>である。調査は盛土及び直下の1層（旧水田耕作土）上面までは重機で排除し、以下は人力により行った。なお、調査区内には土層観察及び排水用の側溝を設けた。調査は東区、西区、南区の3箇所に分けて実施し、東区、西区は6層まで全面の精査を実施し、6層以下はそれぞれ1箇所ずつ試掘区を設けて掘り下げた（東区試掘区では20層上面まで約4.5×11mで調査を行った。西区試掘区では20層上面まで約5×11m、20層以下は約4×8.5mで調査を行った。）。南区では擾乱が深く重機により4層下面まで排除し、5・6層の調査を実施した。遺構の測量は、任意に設定した4×4mのグリッド（南北軸A～E、東西軸1～10）を基準として実施した。なお、グリッド基準杭（杭A・B）の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺構内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197.326651km Y = +4.454542km、杭B：X = -197.319755km Y = +4.477515km）。

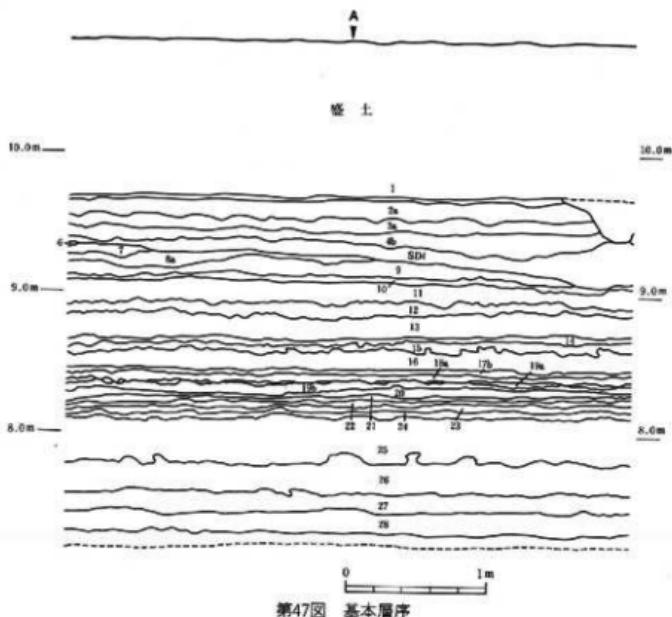


第45図 調査区位置図・設定図



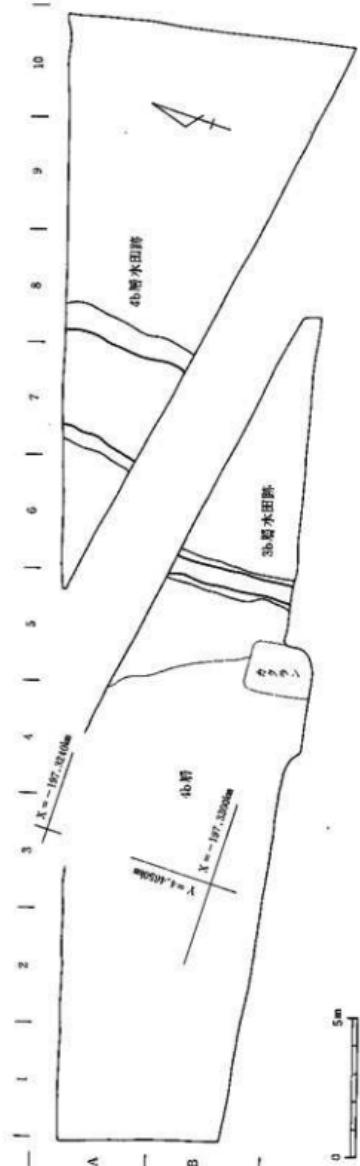
## 2. 基本層序

今回の調査では盛土下に大別28層、細別37層が確認されているが、擾乱によって一部壁面観察が実施できない箇所があった。各層の土質は、1層から4層は粘土質シルトで、5層から28層までは粘土、特に16層以下では泥炭質の粘土である。5層の下部には他よりも色調の暗い部分が認められたが、部分的なもので分層はできなかった。現代のものをのぞく水田土壌は、3b層・4b層・10層・17a層・18a層・19a層である。水田土壌の可能性のある層は7層・14a層・15層である。全体的な層の傾きは、ほぼ平行であるが、南西方向への若干の下り傾斜が見られる。なお、当調査区は第15次調査（斎野他：1987）IV区、第35次調査（平間：1992）、第40次調査（平間：1989）に隣接しており、基本層に対応が一部認められる。各層の対応関係については造構の対応関係と共に後述する。



第47図 基本層序

順序	色調	性質	層厚	液化度	地人物	備考
1	オリーブ黒色 5 Y3/2	シルト質粘土	1~26	あり		田舎山耕作土
2 a	黄褐色 10YR5/8	シルト質粘土	1~13	あり(密状)		
2 b	褐色 10YR4/0	シルト質粘土	1~8			部分的分布、表面土壤?
3 a	緑マリーヌ褐色 2.5Y3/3	粘土	2~12		マンゴン粘(上部)	水田土壤?
3 b	褐色 10YR4/4	シルト質粘土	1~38	あり(密状)	マンゴン粘(上部)・炭化物	水田土壤・部分的分布
4 a	オリーブ黒色 5 Y3/2	シルト質粘土	1~18		マンゴン粘(全層)	水田土壤?、底分の分布
4 b	黑色 10YR2/2	シルト	1~29	あり(密状)	マンゴン粘(全層)	水田土壤
5	赤褐色 10YR2/2	粘土	1~30		10YR4/6(灰化)	
6	赤褐色 10YR5/4	粘土	1~16	あり	マンゴン粘	
7	緑マリーヌ褐色 2.5Y3/3	粘土	1~9			水田土壤?
8 a	黒褐色 2.5Y3/1	粘土	1~13	あり	マンゴン粘(ロット)	部分的分布
8 b	赤褐色 10YR4/2	粘土	1~12			部分的分布
9	黄褐色 10YR5/8	シルト質粘土	1~19			
10	黄褐色 10YR4/2	粘土	1~18		マンゴン粘(全層)	水田土壤
11	黄褐色 10YR5/8	粘土	1~28		10YR5/3シザーフロット状、10YR7/5密状(縮子泥)	
12	黄褐色 10YR4/2	粘土	1~14		10YR6/4シザーフロット状	
	赤紅い黄色 2.5Y5/3	粘土				
13	黒褐色 2.5Y3/2	粘土	10~38			
	色 10YR1.7/1	泥炭質粘土				
14 a	黄褐色 2.5Y5/2	粘土	1~11		2.5Y3/1をフロット状	水田土壤?
14 b	黒褐色 2.5Y5/1	粘土	1~5			部分的分布
	色 10YR1.7/1	泥炭質粘土				
15	オリーブ褐色 5 Y3/2	粘土	1~11			
16	黑色 5 Y3/2					
17 a	色 10YR1.7/1 混灰質粘土	3~29		5 Y3/1を密状(層中)		
17 b	色 5 Y4/2	粘土	2~11			水田土壤、下向非常に凹凸
18 a	オリーブ色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	1~7			
18 b	オリーブ色 5 Y3/2	泥炭質粘土	1~10		下層ミドロット	水田土壤、下層非常に凹凸
19 a	オリーブ褐色 5 Y3/1	粘土	1~10			水田土壤、部分的分布
19 b	オリーブ色 3 Y3/2	粘土				
	色 3 Y3/1					
	色 10YR1.7/1	泥炭質粘土	1~29			
20	オリーブ色 5 Y3/2	泥炭質粘土	2~24			
21	オリーブ色 5 Y3/2	泥炭質粘土	2~4	細砂ブロック		
22	オリーブ色 5 Y3/2	泥炭質粘土	2~7			
23	オリーブ色 7.5Y3/2	泥炭質粘土	2~7	あり(密状)		
24	オリーブ色 5 Y3/2	粘土	2~7			
	色 5 Y3/1	泥炭質粘土				
25	色 7.5Y4/1 オリーブ褐色 2.5Y4/2	シルト質粘土 泥炭質粘土				
	オリーブ色 5 Y3/5	シルト質粘土	24~37	あり(密状)		
	オリーブ褐色 3 Y3/2	泥炭質粘土				
	オリーブ色 5 GY4/1	シルト質粘土				
	オリーブ色 7.5Y3/2	シルト質粘土				
26	色 5 Y2/1	泥炭質粘土				
27	色 7.5Y4/2 オリーブ色 10YR1.7/1	粘土 泥炭質粘土	16~30			
28	オリーブ色 5 Y3/2	粘土	9~16			
	黒褐色 5 Y3/2	泥炭質粘土	16~17			
	オリーブ色 5 Y3/2	粘土				



第48図 3b層・4b層水田跡平面図

### 3. 検出遺構と出土遺物

#### (1) 3b層上面

##### 3b層水田跡 (第48図)

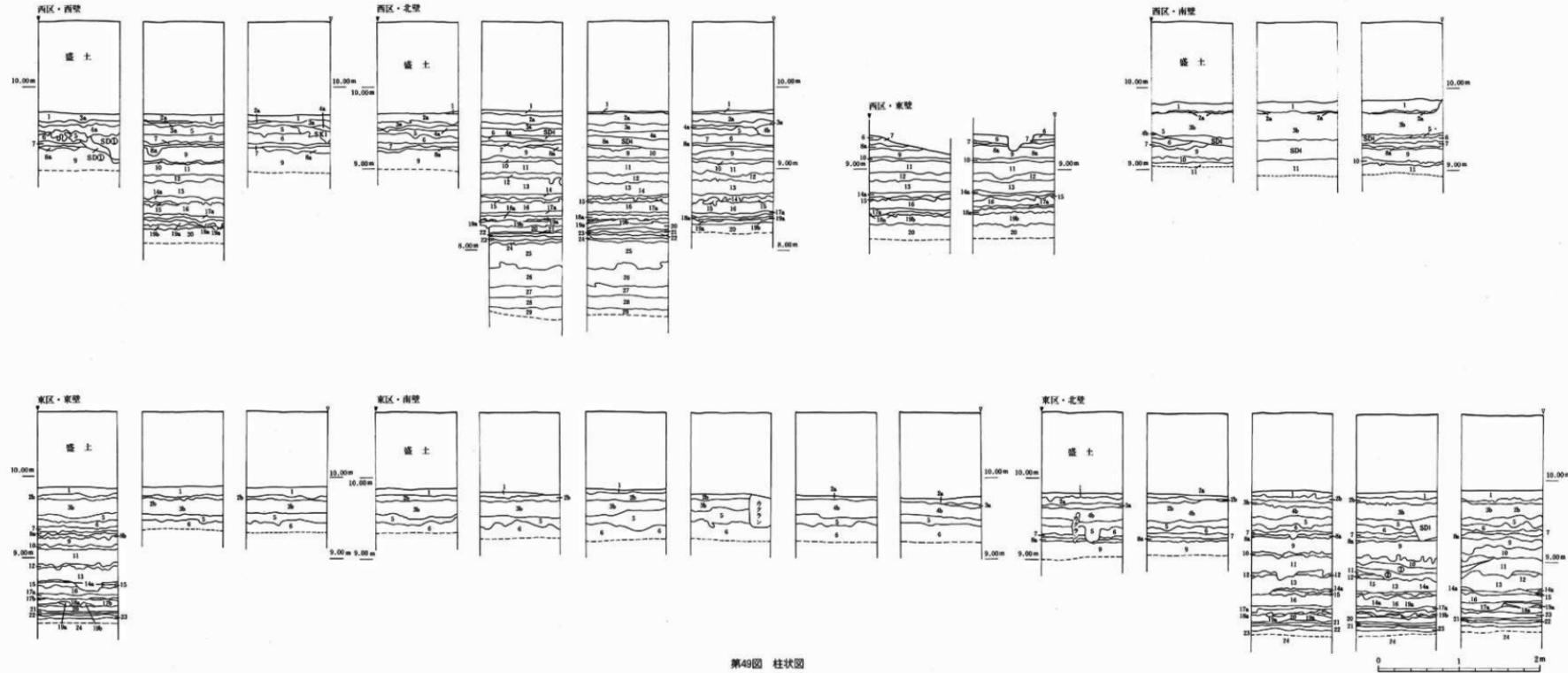
〈遺構状況〉西区3b層上面で畦畔を1条検出した。東区では耕作土の連続は確認されたものの、上層の水田耕作の影響で畦畔等の遺構は検出されなかった。また、西区西半分にこの層が存在しない部分がある。

検出された畦畔は耕作土と同じ3b層を盛り上げて作られており、直線的ではほぼ真北を向き下端幅は0.8~1.4m、検出長は4.4mである。耕作土上面からの比高差は10~17cmである。

水田区画は2区画確認できるが、前述のように上層の影響や分布が一様でないことから本来的な区画の形状は不明である。

耕作土3b層は褐色のシルト質粘土層で、分解はあまり進まず色調に変化が認められる。層厚は1~38cmである。層上部にマンガンを帶状に含んでいる。層下面の起伏はあまり顕著ではない。

〈出土遺物〉(第71図) 土師器片(2点)、陶磁器片(12点)、古銭(1点)が出土している。2は新寛永銭である。6は鉄釉の施された捕鉢の体部破片であるが、産地は不明である。11は鉢底部破片である。表面に指頭痕が残っている。この鉢は在地産のもので、胎土中に白針状物質を多くふくんでいることや、器厚が厚く焼成が甘いなどの特徴を持っている。このような特徴を示す陶器はこれまで、今泉遺跡などで確認されている(佐藤: 1983)。白石窯の製品(甕・鉢)などと共に伴する事例が多いことから、13世紀から14世紀頃の所産と考えられている。



第49図 柱状図

## (2) 4 b 層上面

## 4 b 層水田跡（第48図）

〈遺構状況〉東区4 b 層上面で1条の畦畔を検出している。西区では一部に耕作土の連続が認められたが、ほとんど存在していない。

検出された畦畔は耕作土と同じ4 b 層を盛り上げて作られており、直線的で方向はN-4°-E、下端幅は4.38~4.46m、検出長は3.8mである。耕作土上面からの比高差は10cmである。

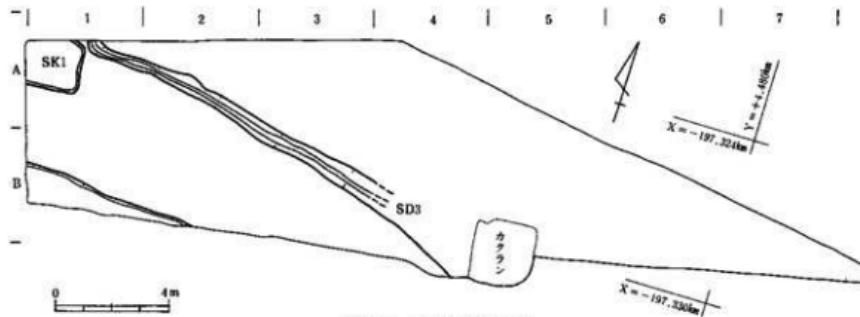
検出された畦畔によって確認される水田区画は2区画であるが、部分的な検出であり全容は明らかではない。

耕作土4 b 層は黒褐色のシルト層であり、分解度に違いの認められる箇所がある。層厚は1~29cmで、層全体にマンガン粒を含んでいる。層下面の起伏はあまり顯著ではない。

〈出土遺物〉(第71図) 土師器片(8点)、須恵器片(4点)、陶磁器片(8点)、銅製品(1点)が出土している。1は煙管の吸い口である。内部に“ラウ”が遺存している。8は渥美産の壺体部破片である。時期は12~13世紀頃のものである。10は砥石に転用した須恵器体部破片である。

## (3) 5層

5層上面で検出できた遺構以外は全て6層上面まで下げたところで確認している。しかし、前述したように5層下部には色調に違いの見られるところがあったが、現場での明確な層の分離ができなかった。その後の整理作業において、遺構の検出状況、遺物の出土状況や隣接する調査区(第15次調査・第35次調査・第40次調査)での遺構等の状況などから検討を加えた結果、6層上面で検出した遺構群は、5層上面あるいは5層中から掘り込まれたものが混在していた可能性が高い。そこで、ここでは5層上面、6層上面として検出した遺構・遺物の事実関係だけの記述にとどめ、詳細は5. 遺構の所属年代とまとめの項で記述することとする(なお、植物種子、昆虫遺体については4. 分析・同定の項にまとめてある。)。



第50図 5層上面平面図

### 5層上面（第50図）

#### 畦畔状遺構

西区A-1、2、B-1~4グリットに位置している。直線的に延びており、方向はN-78°-W、検出長は約10mである。幅は4.0~4.4mで、上面は平坦である。周囲との比高差は約10cmあり畦畔、あるいは道路として機能していた可能性も考えられるが、部分的な検出であり断定は差し控えたい。

#### 3号溝跡-SD3-

西区A-1、2、B-3、4グリットに位置している。ほぼ直線的に延びており、畦畔状遺構に平行している。検出長は約15m、幅は0.36~1.4mである。東に行くほど底面が高くなり不明瞭になる。堆積土は1層である。遺物の出土はみられなかった。

#### 1号土坑-SK1-（第60図）

西区A-1グリットに位置している。全体的な平面形は調査区外へ延びているために明らかではない。東辺長は約200cmである。堆積土は1層で人為的な堆積状況を呈し、深さは10~20cmで底面に著しい凸凹が見られる。SK1は畦畔状遺構を切っている。遺物の出土はみられなかった。

### 6層上面

#### 1号建物跡-SB1-（第51図）

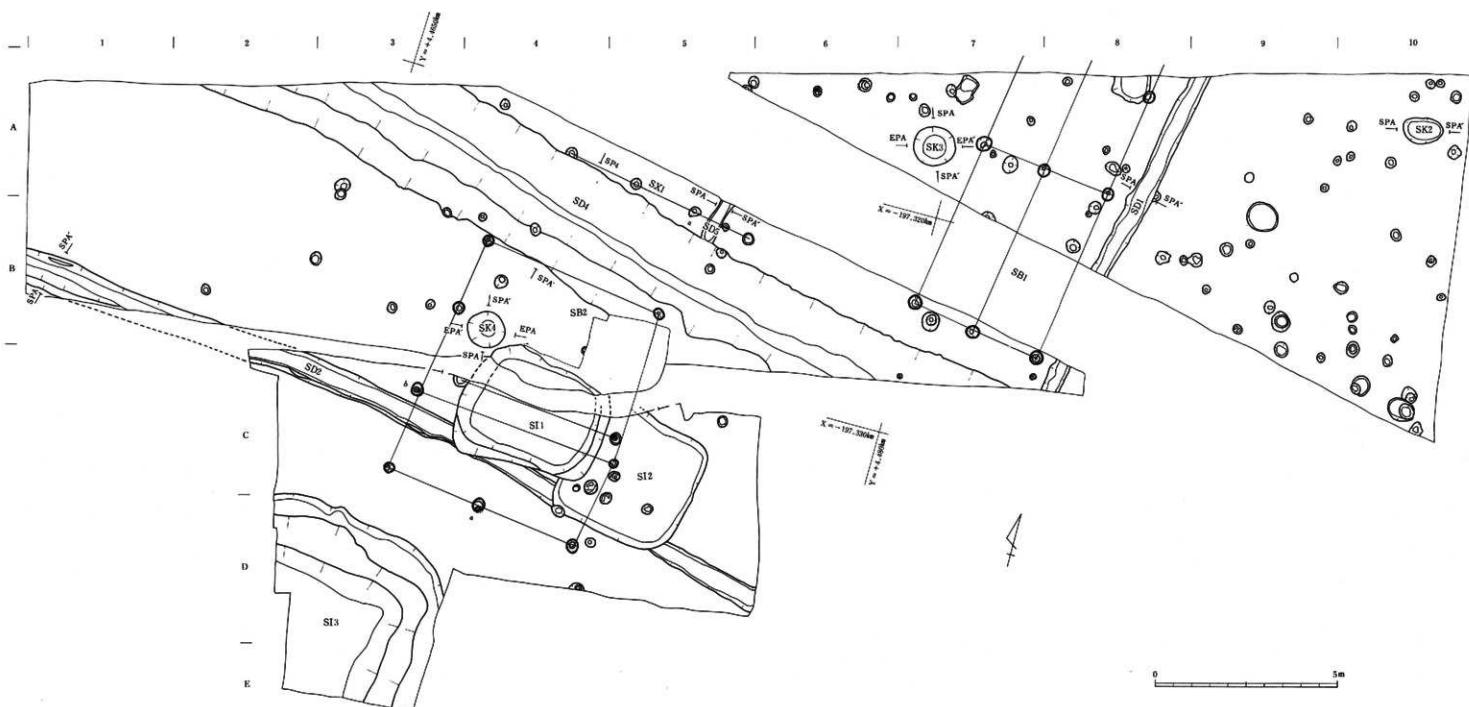
東区A-7・8、B-7・8、西区B-7、C-7グリットに位置している。桁行3間以上（柱間寸法240cm~280cm）総長7.7m以上、梁行2間（柱間寸法180cm~190cm）総長3.7mの南北棟で、北側は調査区外に延び全体規模は不明である。建物内部にも床束ないしは間仕切柱がある。桁柱列方向はN-7°-Eである。柱穴はほぼ円形で直径30~40cm、深さ20~40cmである。南1東2柱穴で直径15cmほどの柱根が遺存するが、他の柱穴では柱痕跡が明らかではない。柱穴埋土は黒褐色粘土で、炭化物を含むものがある。遺物の出土はみられなかった。

#### 2号建物跡-SB2-（第51図）

西区B-3~5、南区C-3~5、D-4グリットに位置している。桁行3間（柱間寸法210cm~260cm）総長7.0m、梁行2間（柱間寸法260cm~280cm）総長5.4mの南北棟建物である。桁柱列方向はN-7°-Eである。柱穴はほぼ円形で直径24~38cm、深さは20~40cmである。南1東2、西1南2柱穴で直径18cmほどの柱根が遺存するが、他の柱穴では柱痕跡が明らかではない。柱穴埋土は黒褐色粘土で、炭化物を多く含んでいる。SB2はSI1と重複しているが、新旧関係は不明である。遺物の出土はみられなかった。

#### SX1性格不明遺構（第51図）

西区A-4・5グリットに位置している。直線状に並ぶピット列で、方向はN-80°-Wで



第51図 6層上面平面図

ある。これらのビットの直径は30~35cmで、深さは15~42cmである。掘り方埋土は黒褐色の粘土で、炭化物を含んでいる。柱痕跡は確認できなかったが、a以外で底面に根石を確認している。ビット中央部を中心として計測すると間隔は西から2m、1.8m、1.8mである。SX1はSD4・5と重複関係にあり、SD4に切られているが、SD5との新旧関係は不明である。これらビット列の性格として、辦あるいは掘立柱建物の一部と考えることができるが詳細は不明である。

#### 1号堅穴遺構-SI1-(第52図)

〈遺構状況〉南区C-3グリッドに位置している。SI1はSI2とSD2と重複関係にあり、これらすべてを切っている。上端平面形は隅丸長方形を呈し、長軸370cm、短軸270cmである。検出面からの深さは87cmである。本来の掘り込み面は5層上面か、5層中であると考えられるが、攪乱が深く及んでいるために確定はできない。底面は平坦で、ビット等の施設は検出されなかった。壁はほぼ急角度に立ち上がる。堆積土は大別2層で、12層に細分される。4層までは地山土がブロック状に入り込んでおり人為的な堆積と考えられる。5層以下は自然堆積状況を示し、8層以下からは植物遺体が多く含んでいる。(特に8層は、ワラ状の植物遺体層である)周囲にはビットがいくつか確認されている。そのうち長軸線上に位置しているa・bは柱痕跡の確認はできなかったが規模、形状から柱穴であったと思われ、SI1に伴う可能性が考えられる。方向はN-85°-Wである。

〈出土遺物〉遺物は、土器、陶器、木製品、石製品、漆製品、植物遺体、昆虫遺体等が出土している。

#### 石製品

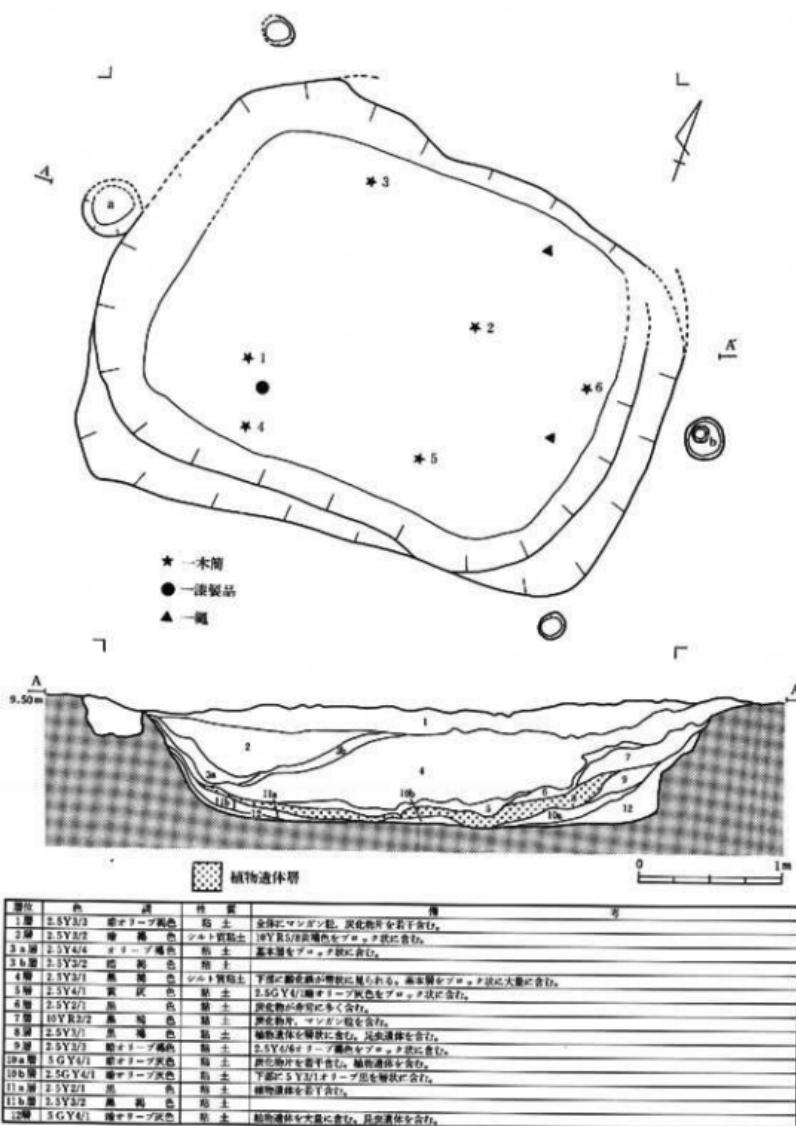
(第56図1) 堆積土中から出土している。硯の一部と思われる。幅0.6mmの沈線文が施してある。

#### 陶器

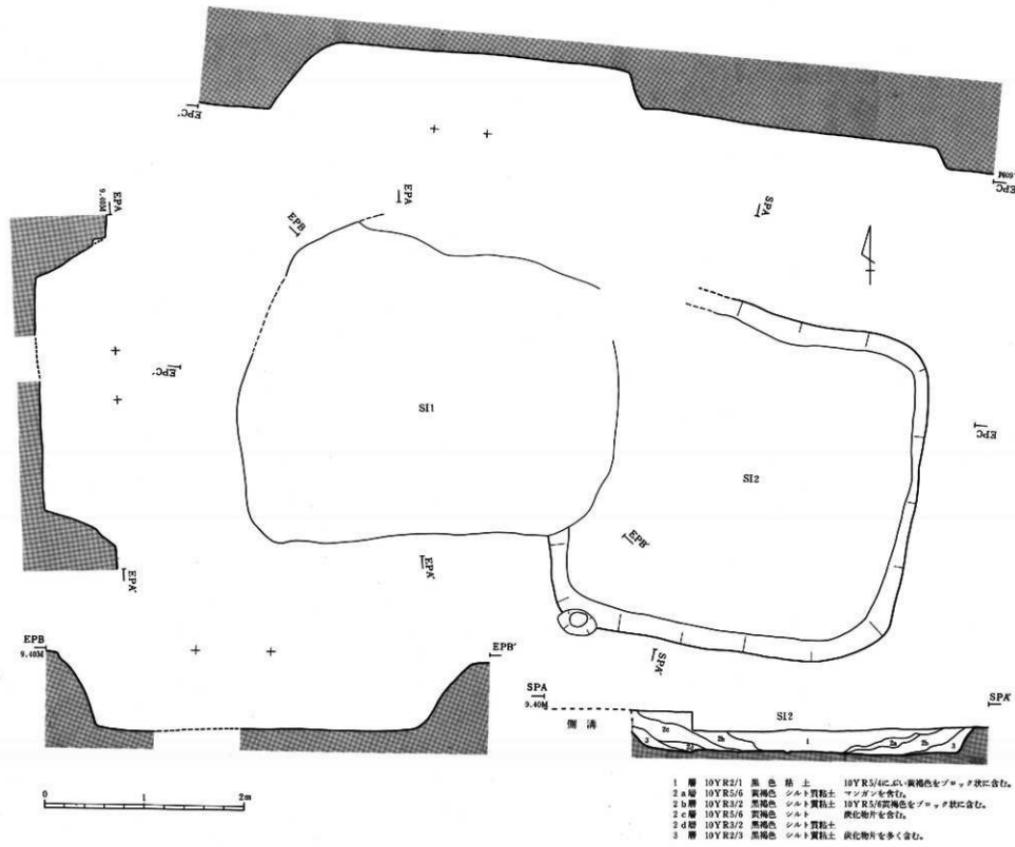
(第56図2) 堆積土中から出土している。甕の体部破片である。外面に自然釉が見られる。常滑産のものであると考えられる。所属する年代等は不明である。

#### 木製品

(第54図1~7) これらは全て底面から出土している。1~3・5は木筒である。1は上部と側面を欠損している。残存する長さは9.5cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmである。表裏ともに墨痕が認められるが、にじんだような状態で判読はできなかった。樹種はスギである。この木筒は形状等から付け札と考えられる。2は完形品である。下端を尖らせ、上端を平らに削っている。長さは14.6cm、幅2.5cm、厚さ0.3cmである。表裏ともに墨痕が認められ、特に表面は「三斗三升」と肉眼でもはっきりと判読できる状態である。裏面は、書体がかなり書き崩してあり、また削り痕もあり判読はできなかった。樹種はヒノキ科ネズコである。この材は軽軟で加工が容易であり、保存性が高いことから木筒に適する材の選択であると指摘されている。<sup>註1</sup>この木



第52図 S I 1 平面図・断面図



第63図 S I 1 + 2 平面図・断面図

簡は形状等から付け札であると考えられる。3は完形品と思われ、上下端ともに斜めに裁断されている。表裏ともに墨痕が認められるが、にじんだような状態で判読はできなかった。長さは14.6cm、幅2.0cm、厚さ0.2cmである。機能については不明である。樹種はスギである。5は欠損が著しいが表裏ともに墨痕が認められる。墨痕はにじんだ状態で判読はできなかった。残存する長さは6.9cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmである。樹種はアスナロである。6は上下端ともに欠損している。表裏に掛引線が認められ、間隔は0.8~1.0cmである。樹種はスギであり、加工の形態や樹種からみて曲げ物の一部であろう。4は欠損が著しく、その機能等は不明である。7は箸の一部であると考えられる。

#### 漆製品

埋土8層下部で出土している。遺存状況が悪く図示はできなかった。周囲に植物製品（竹製の籠か？）のようなものがありその中に納められていたようである。<sup>註2</sup>黒漆を重ね塗りしており、遺存している部位の形状からみて鳥帽子である可能性が強い。取り上げる際に下から別個体が出土しているので、枚数は少なくとも2枚はあったものと思われる。

#### 2号竪穴遺構-SI2-(第53図)

南区C-4・5、D-4・5グリットに位置している。SI2はSI1とSD2と重複関係にあり、SI1に切られ、SD2を切っている。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。幅は約340cm、検出面からの深さは20cmでほぼ一定であり、底面は平坦である。堆積土は3層に分層され、地山土がブロック上に入り込み人為的な堆積状況を呈している。遺物の出土はみられなかった。

#### 3号竪穴遺構-SI3-(第55図)

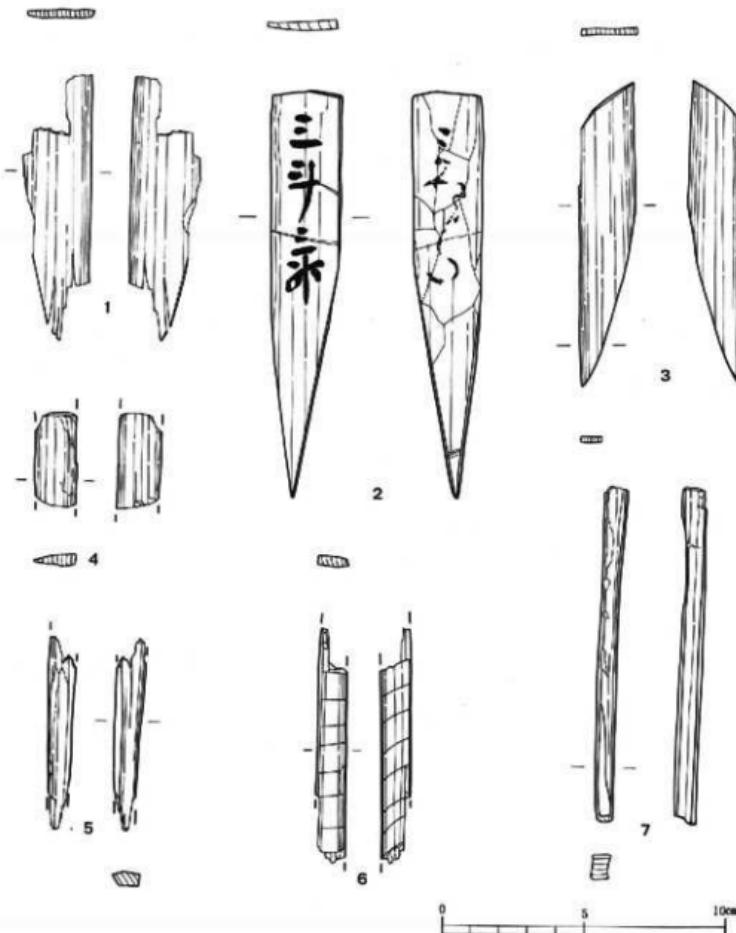
〈遺構状況〉南区E-2・3、F-2・3グリットに位置している。遺構が調査区外へ延びているが、底面の形状から隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出面からの深さは105cmであるが、攪乱が深く及んでいるので掘り込み面の確定は困難である。底面は平坦であり、ピット等の施設は確認されなかった。壁は急角度に立ち上がり、上半部は外へ開いている。堆積土は12層に分層され、自然堆積状況を示している。

〈出土遺物〉遺物は層中及び底面から加工痕のある木材、土師器、須恵器、陶器、種子、昆虫遺体等を出土している。

#### 陶器

(第56図3・8・9) 堆積土中から出土している。在地産の鉢である。3b層水田跡のものと同様に胎土中に長さ1mmほどの白針状物質を含んでいる。時期は13世紀から14世紀頃のものであろう。

(第56図5・7) 堆積土中から出土している。常滑産の壺体部破片である。外面に押印が認



番号	笠置面積	区別	遺物	層位	種別	形	材質	形状状況	長さ(cm)	幅・直径(cm)	厚さ(cm)	備考
1	SII-3	南区	SII 6層下部	木	筒	×	木	直・斜	9.5	2.4	0.3	墨痕
2	SII-1	南区	SII 11a層下部	木	筒	×	木	直・斜	14.6	2.5	0.3	墨痕「三斗三升」
3	SII-2	南区	SII 11a層下部	木	筒	×	木	直・斜	10.0	2.0	0.2	墨痕
4	SII-5	南区	SII 8層下部	木	筒	?	木	直・斜	3.4	1.5	0.4	
5	SII-10	南区	SII 11a層下部	木	筒	?	木	直・斜	6.0	0.9	0.5	墨痕
6	SII-6	南区	SII 11a層下部	木	竹	?	木	直・斜	8.4	1.0	0.4	
7	SII-7	南区	SII 8層下部	漆	筒	—	漆	直	12.1	0.8	0.9	

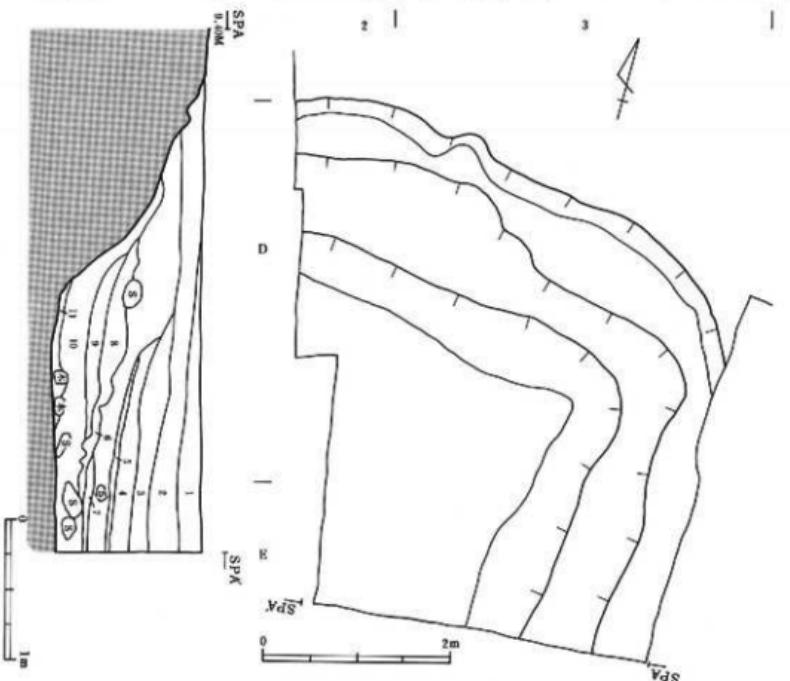
第54図 SII 1出土遺物

められる。時期は上記の在地産のものとほぼ同じ頃のものであろう。

(第56図6) 堆積土中から出土している。渥美産の甕体部破片である。時期は12~13世紀の間に位置するものと思われる。

### 土師器

(第56図4) 堆積土中から出土している。甕底部から体部にかけての破片である。外面の底部から体部の境に段を有している。内面に段は認められない。調整技法は底部は手持ちヘラケズリ、体部はココナデであると思われるが摩滅が著しい。内面はヘラミガキ・黒色処理である。



層位	色	形	土	性
1層	7.5G Y3/1	桔梗式灰色	土	黒化鉄、インガソンの沈着。
2層	7.5Y4/1	灰	土	黒化鉄バグロット状に発達。
3層	5Y3/1	オフード三色	土	黒化鉄をブロード状に含む。
4層	5Y3/6/1	オフード三色	土	3層より若干薄る。
5層	5Y3/2	オフード黑色	土	植物遺体を大量に含む。
6層	7.5Y2/1	オフード黑色	土	植物遺体を含む。
7層	2.5Y3/2	黑	土	植物遺体を大量に含む。
8層	5Y3/1	オフード黑色	土	植物遺体を含む。
9層	2.5G Y3/1	桔梗オフード灰色	土	植物遺体を含む。
10層	7.5Y3/1	オフード黑色	土	植物遺体を含む。
11層	7.5Y2/2	オフード黑色	土	植物遺体を含む。

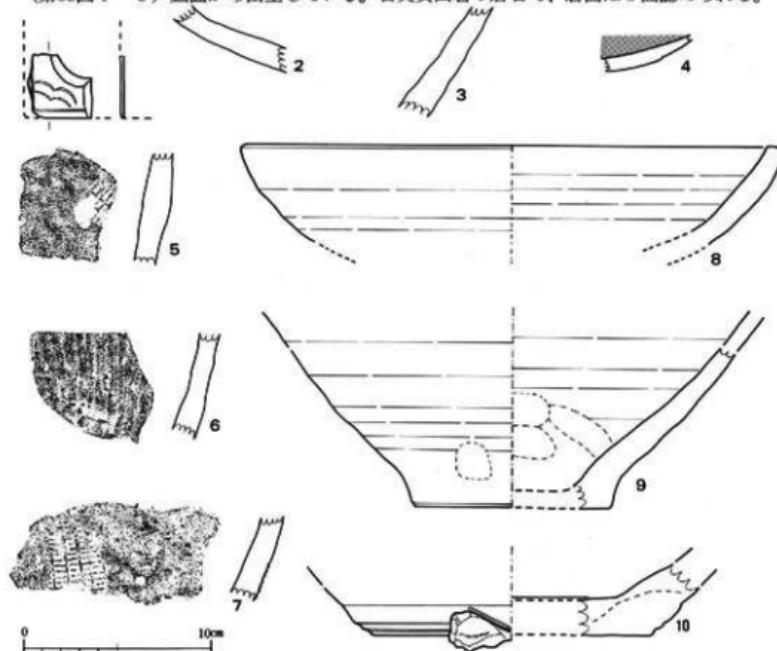
第55図 S I 3平面図・断面図

## 木製品

(第57図1~11) これらは全て底面から出土している。建築材と考えられる。いずれも先端部を斜めに裁断している。3には「抉り」と思われる加工が施してある。4は方形に成形してあったと考えられるが、一面は焼けており詳細は不明である。6は方形に成形してあるが、両端部分は一段細く削られている。他は加工痕は認められるものの、欠損部分が多く詳細は不明である。

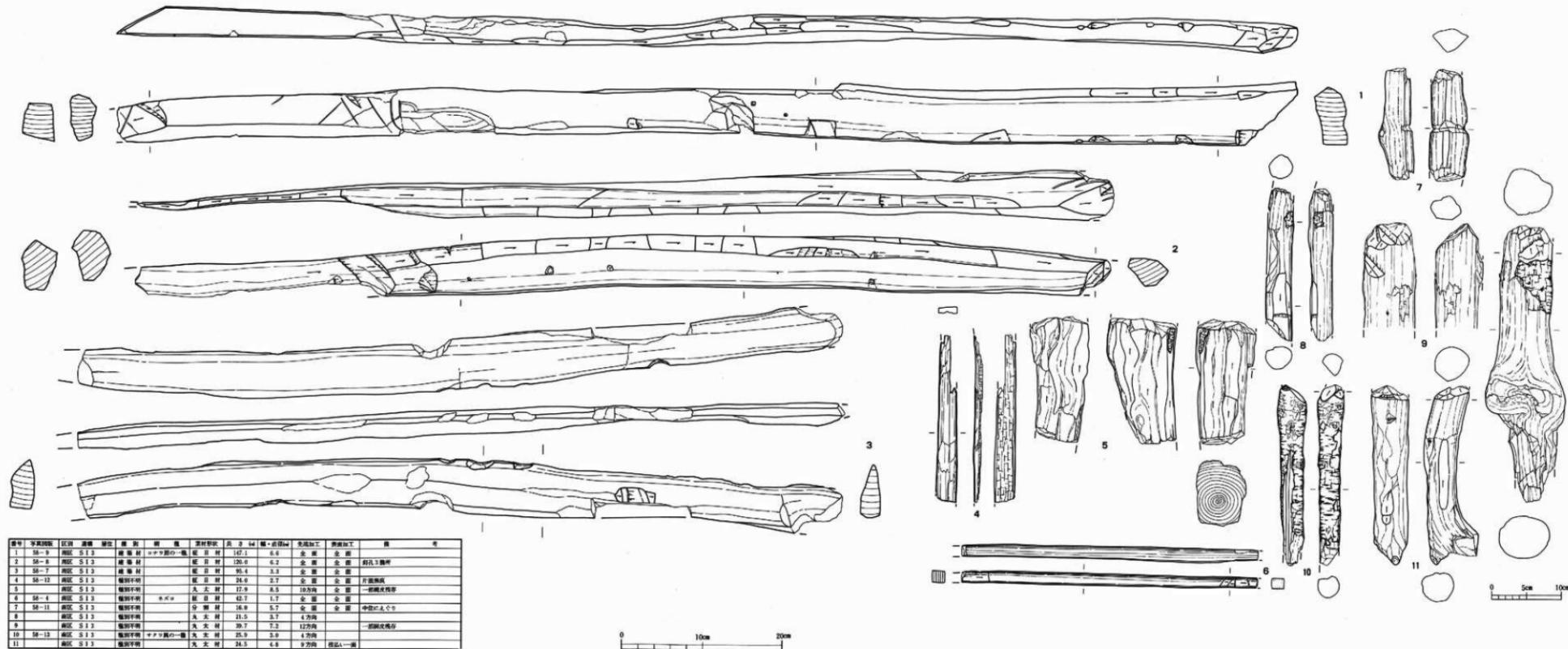
## 石製品

(第63図1~3) 底面から出土している。石英安山岩の磨石で、磨面は3面認められる。



番号	平面図	区別	遺物	頂部	基部	遺存度	口幅	底幅	壁高	表面・側面・色調		備考
										外 面	内 面	
1	57-15	南区	S 1.1	石製品	鉋	両面小片						0.6mmの比較文
2	56-5	南区	S 1.1	鉋	鉋	体面上小片				緑褐色	外表面自然顔・空洞・中空	
3	53-5	南区	S 1.3	鉋	鉋	体面上小片				灰褐色	存地	13~14c・白鷺を含む
4	57-6	南区	S 1.3	1個器	鉋	底部一端部小片				青・グレー	ヘタ(ガキ)・黑色丸尾	
5	56-4	南区	S 1.3	鉋	鉋	体面上小片				灰・灰褐色	ビロード・褐色	常滑・小柱・押印
6	56-9	南区	S 1.3	鉋	鉋	体面上小片				灰褐色	細糸状	常滑・12~13c
7	56-6	南区	S 1.3	鉋	鉋	体面上小片				赤褐色	本體・小柱・押印・内側に網状孔	
8	55-7	南区	S 1.3	鉋	鉋	口幅1/3	(29)			赤褐色	内・外褐色	鉋頭・在地・13~14c・白鷺を含む
9	55-3	南区	S 1.3	鉋	鉋	下半1/3		(10.4)		赤褐色	鉋頭・在地・13~14c・白鷺を含む	
10	57-8	南区	S 1.3	鉋	鉋	下半1/3		(14.8)		灰白色	内面自然顔・外表面土塊状・黒色不規・少量	

第56図 S I 1・3出土遺物



第57図 S I 3出土遺物

## 1号溝 - SD 1 - (第51・58図)

〈造構状況〉 西区A-8・9、B-8、東区C-8グリットに位置している。検出長は9.7mで、直線的な溝である。方向はN-10°-Eである。深さは18cm、堆積土は1層で、人為的な堆積状況を呈し、断面形は逆台形である。底面は平坦である。SD 1はSD 4と重複関係にあると思われるが、調査区外であるため詳細は不明である。

〈出土遺物〉 (第59図1) 堆積土中から土師器杯底部破片が1点出土している。調整技法はクロ調整と思われるが、摩滅が著しく断定はできない。内面はヘラミガキ・黒色処理である。

## 2号溝 - SD 2 - (第51・58図)

西区B-1、南区C-2~4、D-4・5グリットに位置している。SD 2はSI 1、SI 2と重複関係にあり、すべてに切られている。検出長は22m、直線的な溝である。方向はN-78°-Wである。深さは18~22cmで、堆積土は2層で自然堆積状況を呈し、断面形は皿状である。底面はほぼ平坦で東から西方向への下り傾斜が認められる(平均勾配1cm/10m)。遺物は土師器片が2点出土しているが、いずれも細片で摩滅しており図示は困難できなかった。

## 4号溝 - SD 4 - (第51・58図)

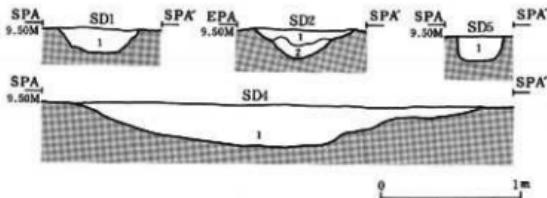
〈造構状況〉 西区A-2~5、B-3~6、C-5~7グリットに位置している。直線的な溝で方向はN-75°-W、検出長は15.5mである。深さは28~32cm、堆積土は1層であるが、グライ化が進んでいる。断面形は南側で平場を有するがほぼ皿状を呈している。底面はほぼ平坦で、西から東方向への下り傾斜が認められる(平均勾配7cm/10m)。SD 4はSD 5と重複しているが切り合い関係は不明であるが同時期の可能性も考えられる。

〈出土遺物〉 遺物は土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦、石製品等が出土しているが、細片が多く図示できたものは以下のものである。5以外は堆積土中からの出土である。

## 土師器

## (第59図2) 土師

器坏である。調整技法はクロ調整で、内面はヘラミガキ・黒色処理である。



遺跡名	層位	色	高	土	性	備
SD-1	1層 2.5YR3/3	暗 黒 色	10YR3/3	シルト質粘土	10YR3/3	10YR3/3
SD-2	1層 2.5YV1/2	黒 黒 色	10YR3/3	粘土	10YR3/3	10YR3/3
SD-4	1層 10YR4/1	黄 灰 色	10YR4/1	粘土	10YR4/1	10YR4/1
SD-5	1層 2.5Y3/2	黑 黑 色	10YR4/1	粘土	10YR4/1	10YR4/1

第58図 SD 1・2・4・5断面図

## 磁器

(第59図3) 青磁碗口縁部破片である。文様はみられないが、中国龍泉窯系のものであると考えられ、時期は13~14世紀頃のものであろう。

## 陶器

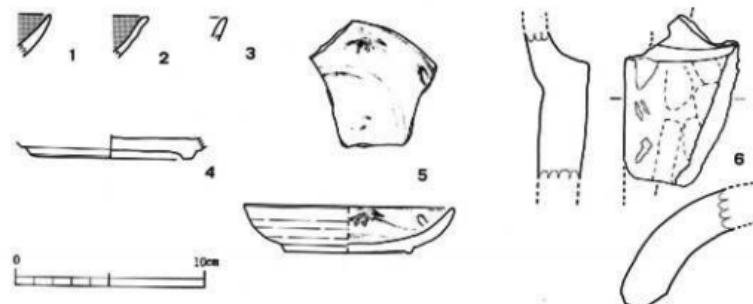
(第59図4) 削り出し高台を持つ志野皿の底部破片である。時期は17世紀前半頃と考えられる。

(第59図5) 削り出し高台を持つ志野織部小皿である。内面に水鳥文と唐草文(鉄絵)を施しており、時期は17世紀前半頃と思われる。底面より出土している。

(第59図6) 燐瓦の一部である。内面に炭化物が付着している。時期は江戸時代前半頃であろう。

## 5号溝-SD5-(第51・58図)

西区B-5グリットに位置している。直線的な溝で方向はN-10°-E、検出長は55cmである。深さは16~20cmで、堆積土は1層で、人為的な堆積状況を呈し、断面形はU字形である。底面は平坦であり、北から南方向への下り傾斜が認められる。SD5はSD4と重複しているが、切り合い関係は不明である。SD4に流れ込み溝である可能性も考えられる。遺物の出土はみられなかった。



番号	写真図版	区名	遺跡	層位	個数	形態	度	年	度	断面測定			色調	備考
										外	内	面		
1	57-14	東区	SD1	上部段	片	口縁部小片				11.2	6.4	2.4	レッド?	ヘラミガキ・黒色斑斑
2	57-3	西区	SD4	上部段	片	口縁部小片				10.0	6.4	2.4	ロウテ	ヘラミガキ・黒色斑斑
3	57-4	西区	SD4	青 瓷	底	口縁部小片				明暗灰			明灰灰	中国龍泉窯系 13~14c
4	57-16	西区	SD4	陶 瓦	瓦	瓦底1/5				(8.4)				削り出し高台・古判・17c前半
5	58-6	西区	SD4	陶 瓦	瓦	瓦底1/5	1/3	(11.2)	(6.6)	3.5				削り出し高台・底面・古野織部・17c前半 写真57-5と同様
6	58-2	西区	SD4	瓦	瓦	瓦底							ヘラミガキ・ナゲ	内面に××付着

第59図 SD 1・4 出土遺物

**2号土坑-SK2-（第60図）**

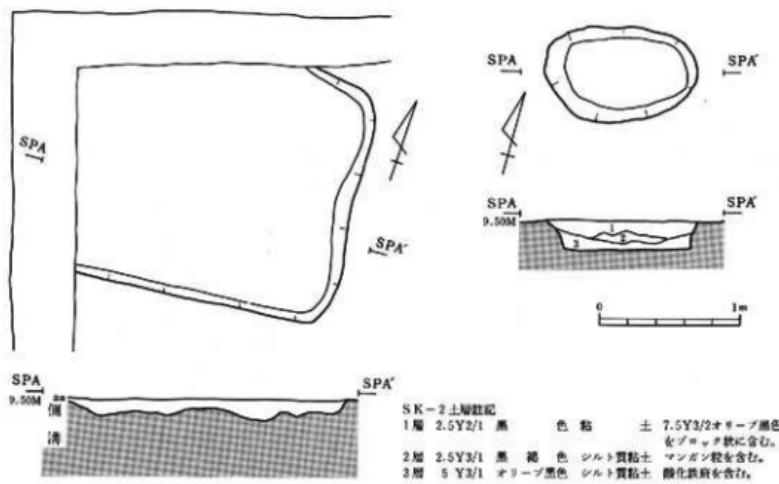
東区A-10グリットに位置している。上端平面形は橢円形を呈し、長軸109cm、短軸67cm、深さは20cmである。断面形は逆台形を呈しており、底面は平坦である。堆積土は3層に分層されるが、人為的な堆積状況を呈している。遺物の出土はみられなかった。

**3号土坑-SK3-（第61図）**

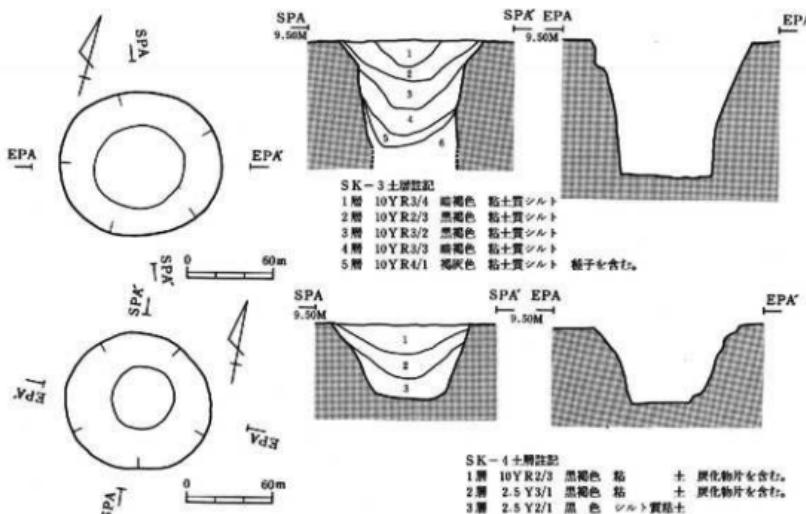
東区A-7グリットに位置している。上端平面形は橢円形を呈し、長軸115cm、短軸100cm、深さは100cmである。断面形は開口部付近で広がるがほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。堆積土は6層に分層され、自然堆積状況を呈している。遺物として、堆積土中より焼きぶくれをおこしたオオムギの種子が多数出土している。SK3は、断面形状や深さなどから、井戸として機能していた可能性が考えられる。

**4号土坑-SK4-（第61図）**

西区B-4グリットに位置している。上端平面形はほぼ円形を呈し、径は120cmで、深さは55cmである。断面形はすり鉢状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は3層に分層されるが、人為的な堆積状態を示している。遺物は石英安山質細粒凝灰岩の磨石（第63図2）を1点出土し、磨面は3面認められる。



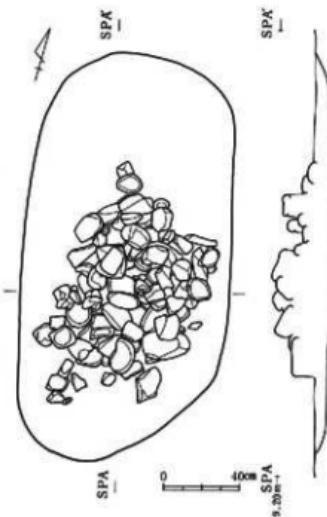
第60図 SK1・2 平面・断面図



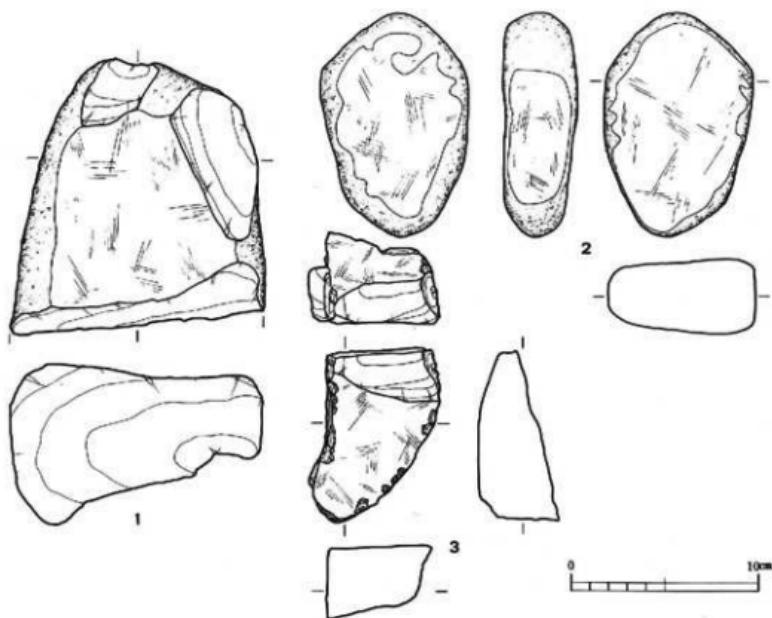
第61図 SK 3 \* 4 平面・断面図

## 5号土坑-SK 5-（第62図）

南区D-3、E-3グリットに位置している。上端平面形は橢円形を呈し、長軸218cm、短軸110cm、深さは10cmである。断面形はすり鉢状を呈し、底面は平坦である。堆積土は1層であるがグライ化が進んでいる。また、この土坑の上部には、1.2×0.8mの範囲の中に約180点の礫を約20cmの高さに積み上げている。これらの礫の中には意図的に割られて隙間に積めたと考えられるものもある。さらにこの周囲には多くの礫がありこの石積みから崩れたものであるかについては不明である。この遺構の性格として墓坑も考えられるが断定は差し控えたい。遺物の出土はみられなかった。



第62図 SK 5 平面・断面図



番号	写真回数	区別	遺物	解説	種 別	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
1	57-1	西K	S1-3	前	G	14.7	13.6	6.3	2000	石英安山岩	
2	57-9	西K	SK4	前	G	12.0	7.9	6.0	530	石英安山岩質無機質混在	
3	57-10	西K	S1-3	前	G	7.1	9.1	2.8	290	石英安山岩	

第63図 出土遺物(1)

#### (4) 10層上面

##### 10層水跡 (第64図)

〈遺構状況〉東西両調査区で9条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出した。畦畔は直上10層下面で検出し、遺存状況は良好であった。

検出された1～9の畦畔は、ほぼ等高線に沿って延びる3条の大畦畔とそれに接続する5条の小畦畔から成っている。畦畔は耕作土と同じ10層を盛り上げて作られている。

これらの畦畔によって区画される水田区画は12区画である。大畦畔と小畦畔の接続部には接続しない部分があり、水口と考えられる。

耕作土10層は灰黄褐色の粘土層で、層厚は1～18cmほどで分解が進んでいる。主に直下の11層を攪拌することで形成されたと考えられるが、11層と10層とでは色調に差異が認められるので、間に別の層が存在していた可能性も推定できる。層全体にマンガン粒を含んでいるが、下

面に酸化鉄の沈着は認められなかった。屑下面の起伏はあまり顕著ではない。

遺物の出土はみられなかった。

#### - 西区 - (第65図)

西区では5条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出している。1は水田の大区画を形成する大畦畔、2～5はこの中をさらに細かく区画する小畦畔と理解しておきたい。1は、途中で弯曲しているが他はほぼ直線的に延びている。畦畔の接続は「T」・「+」字状の両者が認められる。1は方向N-58°-W前後で、検出長は5.4mである。下端幅は0.9～1.4mで、耕作土上面との比高差は1～3cmである。2は方向N-42°-Wで、検出長は6.6mである。下端幅は0.38～0.42mで、耕作土上面との比高差は1～3cmである。3は方向N-45°-Wで、検出長は5.5mである。下端幅は0.34～0.62mで、耕作土上面との比高差は1～3cmである。4は方向N-50°-Wで、検出長は3.3mである。下端幅は0.36～0.42mで、耕作土上面との比高差は1～2cmである。5は方向N-48°-Wで、検出長は0.5mである。下端幅は0.30～0.40mで、耕作土上面との比高差は約1cmである。

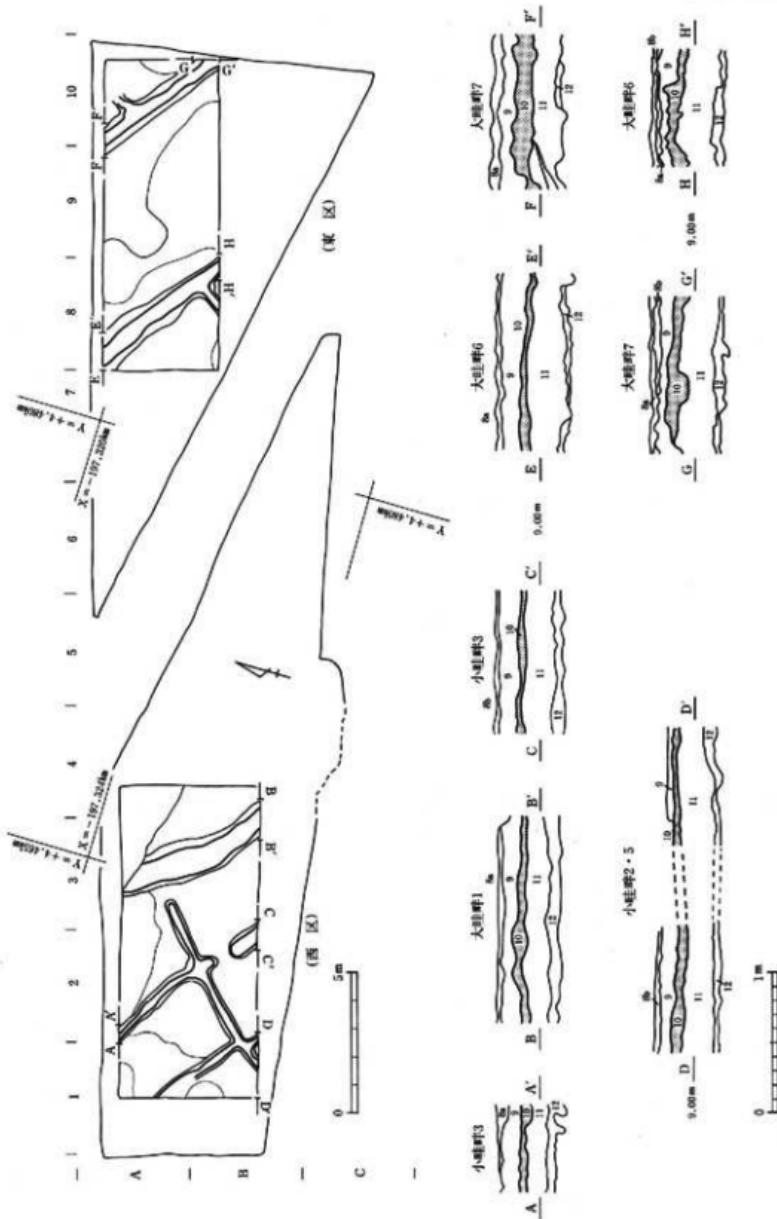
検出された畦畔によって確認できる水田区画は①～⑦の7区画であるが、いずれも部分的なものであり完結したものではない。水田面上面の標高は9.10～9.20mである。調査区内の平均勾配は10cm/12mで、南東から北西へ緩やかに下がっている。区画の形状は畦畔のあり方から短冊形を基調とするものと推察され、地形の傾斜を考慮した水田区画のあった可能性も考えられる。

畦畔の連続しない部分が2箇所認められ、水口と考えられる。ここを水口とした場合、底面のレベルは耕作土上面より若干下がる程度である。水の流れは区画③×⑤、③→②の流れが考えられる。

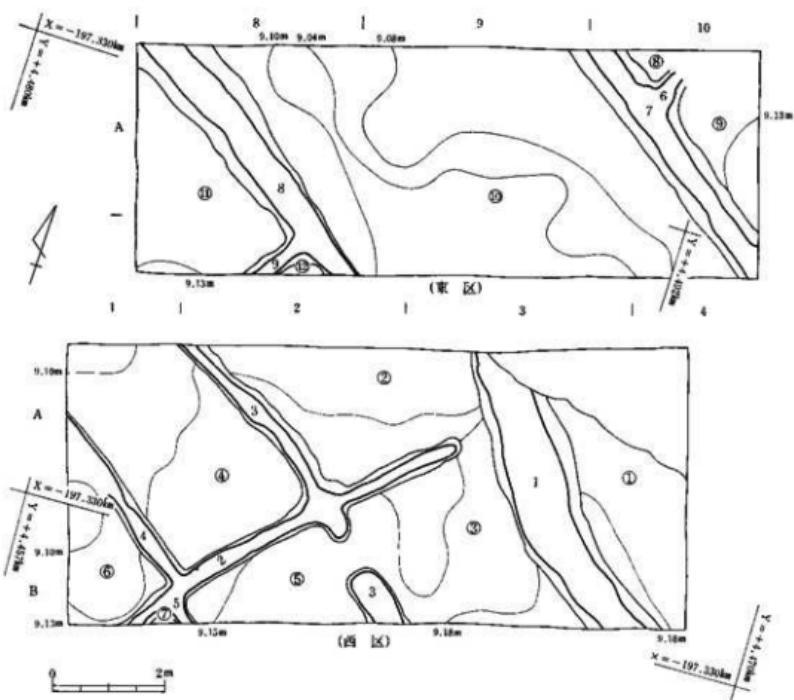
#### - 東区 - (第65図)

東区では遺存状況はあまり良好ではないが4条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出している。7、8は大区画を形成する大畦畔、6、9はこのなかをさらに細かく区画する小畦畔として理解しておきたい。畦畔はいずれも直線的に延びており「T」字状に接続する。6は方向N-30°-Eで、検出長は約0.6mである。下端幅は0.46～0.50mで、耕作土上面との比高差は1～2cmである。7、8は方向がほぼ同じでN-53°-Wであり、規模は以下のとおりである。7は検出長4.8m、下端幅0.78～0.90mで、耕作土上面との比高差は2～6cmである。8は検出長5.2m、下端幅は0.55～1.2mで、耕作土上面との比高差は1～4cmである。9は方向N-36°-Eで、検出長は約1mである。下端幅は0.44～0.62mで、耕作土上面との比高差は1～2cmである。

検出された畦畔によって確認される水田区画は⑧～⑫の5区画であるが、いずれも部分的な



第64図 10層水田跡平面・断面図



第65図 10層水田跡平面図

検出であり完結されたものではない。耕作土上面の標高は9.04~9.13mである。畦畔のあり方から短冊形を基調とする水田区画の存在が推察されるが、区画⑩では同一区画内の比高差が10cm以上あり、また、東区はあまり遺存状況が良好でないことからさらに畦畔で細かく区画されていた可能性は充分に考えられる。なお、畦畔6は途切れる形で検出しており、この部分に水口が存在していた可能性が考えられるが断定は差し控えたい。

#### (5) 17a層上面

##### 17a層水田跡（第66図）

〈遺構状況〉東区17a層上面で3条の畦畔と、これによって区画される水田区画を検出した。西区では耕作土の連続は確認されたものの、畦畔等の遺構は検出されなかった。畦畔の検出は直上16層の下面である。遺存状況は不良で、本来はこれら以外に畦畔が存在した可能性が考えられる。

検出された1～3の畦畔はいずれも直線的で比較的整った状態を示している。1はほぼ等高線に沿って延びており、2、3はこれに直交し「T」字状に接続する。なお、最も規模の大きな畦畔である1の直下でのみ、17a層上面で擬似畦畔Bが確認された。このため1を水田の大区画を形成する大畦畔、2、3はこの中をさらに細かく区画する小畦畔であると理解しておきたい。

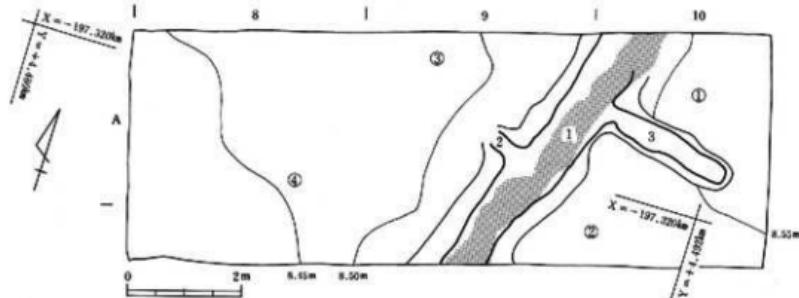
いざれの畦畔も耕作土と同じ17a層を盛り上げて作られており方向、規模は以下のとおりである。1は方向がN-20°-E、検出長5.2m、下端幅は1.2～1.5mで、耕作土上面との比高差は1～4cmである。2は方向がN-67°-W、検出長0.7m、下端幅は0.5～0.8mで、耕作土上面との比高差は1～2cmである。3は方向がE-12°-S、検出長2.0m、下端幅は0.5～0.7mで、耕作土上面との比高差は1～2cmである。

畦畔の遺存状況が悪く本来的にはこの他にも畦畔が存在していた可能性もあり、本来の水田区画の全容を明らかにすることはできなかった。今回検出された畦畔によって確認できる水田区画は①～④の4区画であるが、いざれも部分的なもので完結したものはみられない。

水田面上面の標高は8.43～8.57mである。調査区内の平均勾配は1.2cm/mで、北東から南西へ緩やかに下がっている。区画の形状は畦畔のあり方から、方形を基調とするものと推察される。また、水田区画はほぼ等高線に平行する大畦畔とこれに直交する小畦畔で形成されており、微地形を意識した水田区画である可能性が考えられる。なお、畦畔3は途切れる状態で検出され、この部分に水口が存在していた可能性も想定できるが、断定は差し控えたい。

耕作土17a層は灰色の粘土層で、層厚は4～8cm程度であり、比較的分解が進んでいる。主に直下の自然堆積層17b層を攪拌することによって形成されたものと考えられ、17b層は主に大畦畔下に認められる。攪拌は一部20層まで及んでいる。層下面の起伏は顕著である。

遺物の出土はみられなかった。



第66図 17a層水田跡平面図（スクリーントンは擬似畦畔B）

## (6) 18 a 層上面

## 18 a 層水田跡（第67図）

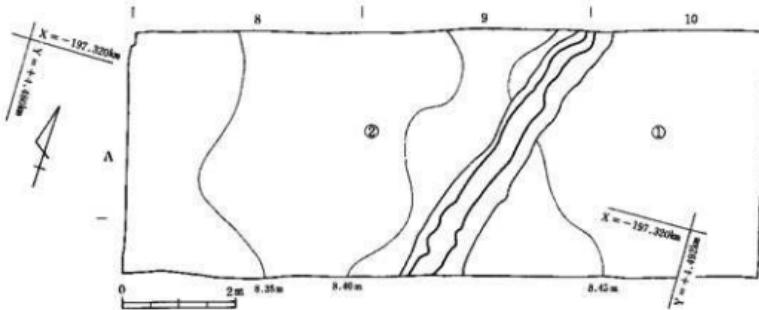
東区18 a 層上面で1条の畦畔と、これによって区画される水田区画を2区画検出した。西区では耕作土の連續は確認されたものの、畦畔等の遺構は検出されなかった。畦畔の検出は17 a 層水田跡大畦畔の直下であり検出状況は比較的良好であった。しかし、他の部分は17 a 層水田の耕作により遺存状況は良好なものとはいえない。

検出された畦畔は直線的で、ほぼ等高線に沿って延びており、耕作土と同じ18 a 層を盛り上げて作られている。畦畔の方向、規模はN-18°-E、検出長5.3m、下端幅0.68~0.95m、耕作土上面との比高差は1~7cmである。

検出された畦畔によって確認される水田区画は2区画であるが、上層の水田耕作により、この畦畔以外の部分の遺存状況は良好とはいえない、さらに畦畔で細かく区画されていた可能性が考えられる。全体的な水田面上面の標高は8.29~8.50mである。平均勾配は2cm/mで、北東から南西への下り傾斜が認められる。

耕作土18 a 層は灰オリーブ色の泥炭質粘土層で、層厚は3~9cmである。主に直下の自然堆積層18 b 層を攪拌することによって形成されたものと考えられるが、18 b 層は畦畔下でわずかに認められる程度である。攪拌は一部20層まで達するところがあり、下層土を層中にブロック状に含んでいる。下面の起伏は顕著である。しかし、18 a 層と19 a 層とは色調、土質が似ており両層が重なるところでは分離しにくい箇所もあった。

遺物の出土はみられなかった。



第67図 18 a 層水田跡平面図

## (7) 19 a 層上面

## 19 a 層水田跡（第68図）

〈遺構状況〉東区で擬似畦畔Bによる水田区画と、溝状の落ち込みが1条検出された。しかし、

19 a 層上面は上層の水田耕作によって擾乱を受けており、このため畦畔は上面では検出されず、層下面で擬似畦畔 B として直下層の高まりを検出した。また、掘り過ぎのために一部下層の自然堆積層である 19 b 層を露出させてしまった箇所がある。西区でも層の連續は確認できたが部分的なものであった。

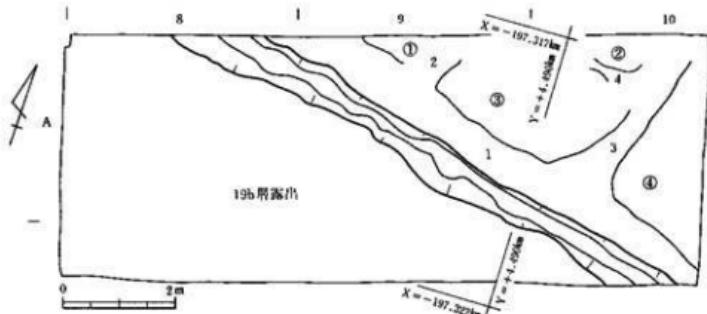
検出された 1 ~ 4 の畦畔はいずれも直線的に延びている。2、3 は 1 に直交し「T」字状に接続している。4 は断片的ではあるが 3 に直交する畦畔で「T」字状に接続するものと考えられる。1 の方向は N-75°-W、幅は 50~80cm、検出長 8.2m である。2、3 は平行しており方向はほぼ N-23°-E である。幅は約 40~60cm、検出長はそれぞれ 0.7~2.3m である。4 の方向は N-75°-W、幅は 20~30cm、検出長は 0.8m である。

水田区画は①~④の 4 区画確認できるが、遺存状況が悪く部分的なものであり完結したものではない。区画の形状はほぼ 3 辺を検出している区画③から方形を基調とする小区画水田であると推察される。面積は 5 m<sup>2</sup> 前後になるものと思われる。水田面上面の標高は計測できなかつたが、調査区内の標高は 8.38~8.45m で北東から南西への緩やかな下り傾斜が認められ平均勾配は約 1 cm/m である。

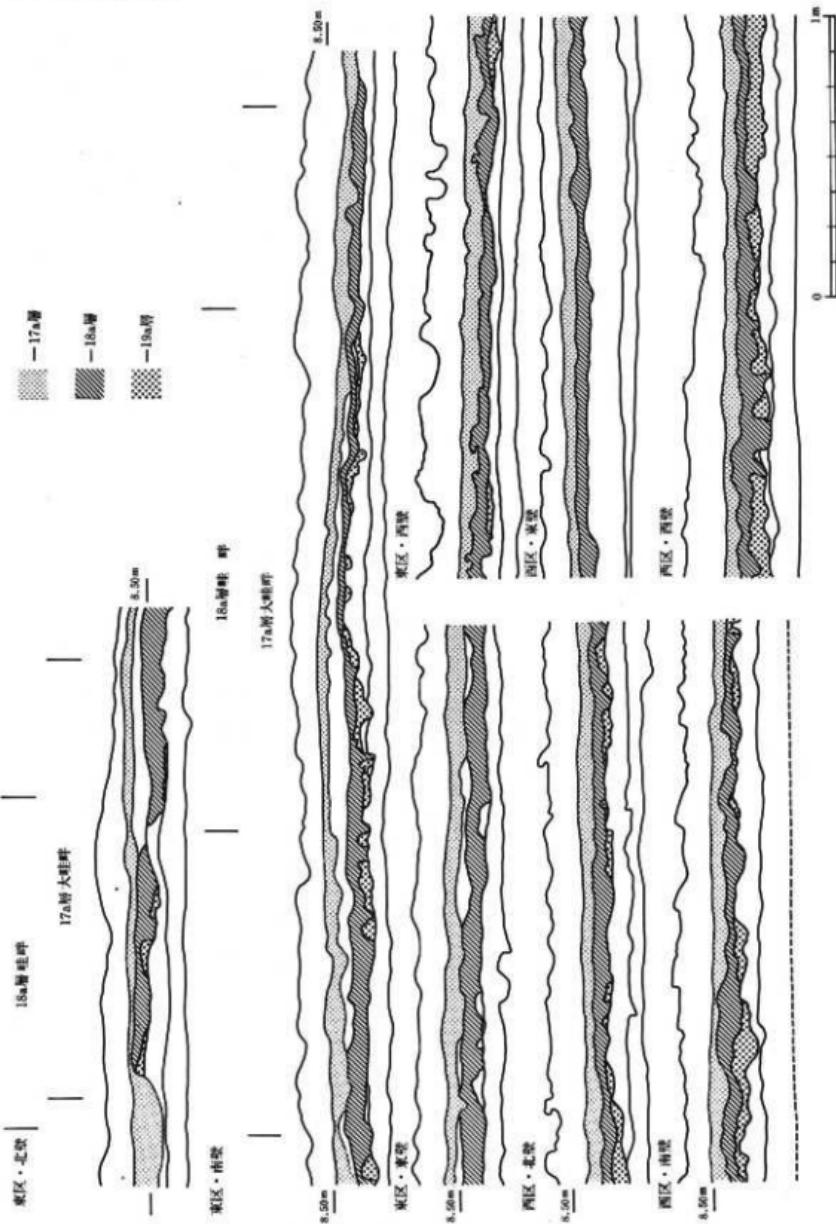
耕作土はオリーブ黒色の粘土層で、主に自然堆積層である直下の 19 b、20 層を攪拌することによって形成されたと考えられる。

遺物は西区で杭を 1 本出土している。(第70図 1) 先端加工は 2 方向から数回の打撃が認められるが焦痕があり詳細は不明である。樹種はカヤと固定されている。

畦畔に平行する溝状の落ち込みを検出している。しかし、これより南側は下層が露出してしまった部分であり水田に伴う水路である可能性も考えられるが、断定は差し控えたい。



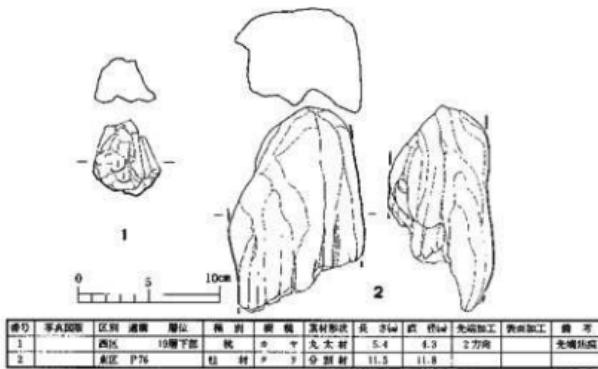
第66図 19 a 層水田跡平面図



第69图 17层·18层·19层断面图

## (8) その他の出土遺物 (第71図)

基本層1層からは土師器片(1点)、陶磁器片(8点)が出土している。いずれも細片であり図示はできなかった。基本層2層からは陶磁器片(53点)が出土し、5は常滑産の窯体部破片で外面に押印がみられる。時期は中世であろう。他には須恵器片等が出土しているが、図示はできなかった。基本層5層からは土師器片(16点)、須恵器片(1点)、陶器片(1点)が出土している。4は土師器底部である。調整技法はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理で、底部の切り放し調整は回転糸切り無調整である。基本層6層以下では、6・7・9・10層より土師器片、須恵器片等が出土しているが図示できたのは3・9の須恵器片だけである。また、第70図2は6層上面で確認された柱穴に遺存していた柱根である。樹種はクリである。



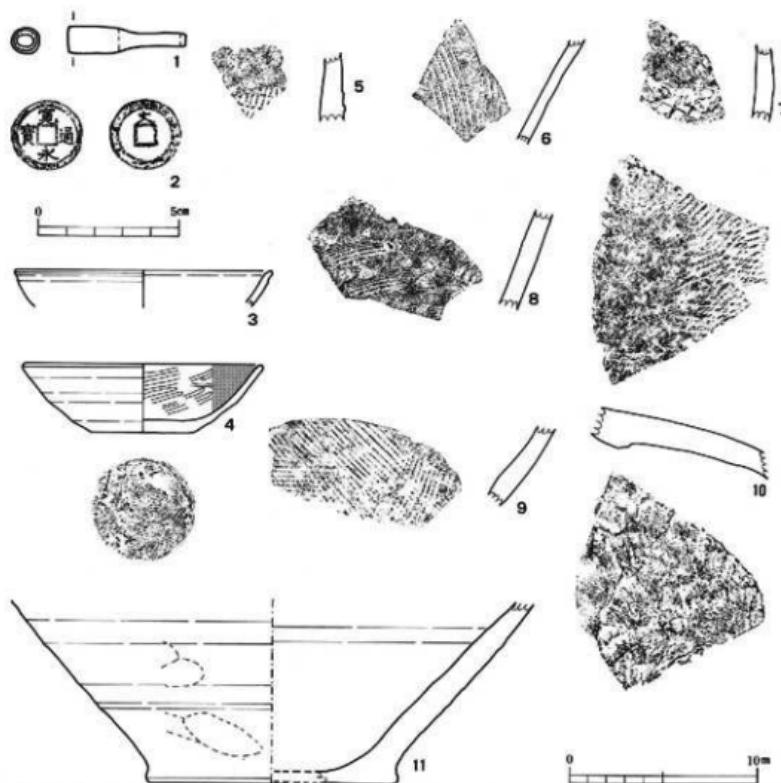
第70図 出土遺物(2)

## 4. 分析・同定

## 仙台市富沢遺跡産昆虫化石（昆虫遺体）のリスト

愛知県埋蔵文化財センター 森 勇一

試料1 ヒメコガネ *Amomala rufocuprea* Motschulsky 前胸背板(S I 1) アオオムサシ *Carabus insulicola* Chaudoir 右鞘翅スジアオゴミムシ *Haplochaenius Costiger* (Chaudoir) 左鞘翅試料2 ヒメコガネ *Amomala rufocuprea* Motschulsky 前胸背板(S I 3) ヒメコガネ *Amomala rufocuprea* Motschulsky 右鞘翅ヒメコガネ *Amomala rufocuprea* Motschulsky 中胸腹板ヒメコガネ *Amomala rufocuprea* Motschulsky 腹節ドウガネブイブイ *Anomala cuprea* Hope 左鞘翅片



番号	平成初期	江戸 漢字	漢字	種別	尺				い		口		面 名
					長	幅	厚	面	前	後	左	右	
1	57-11	西区	4層	漆 常	4.2	×	0.9						底面・内面にラミの一部が保存
2	57-12	西区	3層	漆 銘	2.5			直	裏	裏	左	右	裏面・正字入文
番号	平成初期	区別	造様	器形	幅	深	厚	口	直	裏	左	右	面名
3	57-2	西区	6層	漆油器	3.5			口幅	内	外	面	内	漆油器・色調
4	56-4	東区	5層	土白器	1/4	(12.4)	5.5	3.7		タケ	ヘラ・タケ・褐色	茶葉・切刃・切刃・切刃・切刃	茶葉・中世
5	56-18	東区	2層	陶 素	素?	漆油器小片				タケ			漆油器・底地不明・17c?
6	56-7	西区	3層	陶 素	漆油器	漆油器小片							
7	56-11	東区	P52	陶 素	素?	漆油器小片				漆子目タケ	ヘラナグ		漆油器・12~13c
8	56-3	東区	4層	陶 素	素?	漆油器小片				ナグ→ヘラナグ	ナグ→ヘラナグ		漆油器・12~13c
9	56-8	東区	9層	漆油器	素?	漆油器小片				平行タケ	ナグ		
10	57-7	東区	4層	漆油器	素?	漆油器小片				平行タケ	ナグ→ヘラナグ		鏡石転用
11	56-1	東区	3層	陶 素	素?	下平1/2	(12.4)			エタヒナグ			底地・12~14c

第71図 出土遺物(3)

試料3 サクラコガネ *Anomala daimiana* Harold 左鞘翅片

(S I 3) エンマコガネ属 *Onthophagus* sp 中後胸腹板

カドマルエンマコガネ *Onthophagus lenzii* Harold 中後胸腹板

サクラコガネ属 *Anomala* sp 脊節

〈昆虫化石の生態等〉

(試料1) 二次林や草地などに生息し、人間が植栽したブドウ・クリ・マメ科植物などの果樹や、各種広葉樹、及びクズ・農作物等の葉を広く食害する食葉性のヒメコガネ (*Anomala rufocuprea*) のほかに、食肉性のアオオムサシ (*Carabus insulicola*)・スジアオゴミムシ (*Haplochaenius Costiger*) が出現している。アオオサムシ・スジアオゴミムシはとともに夜行性で、日中は落葉の下や土中にひそみ、夜になると地上にててミミズや他の虫・小動物の屍体(ネズミ・モグラなど)などをあさる。

(試料2) ヒメコガネ4点・ドウガネブイブイ1点 (*Anomala cuprea*) が発見された。両者とも各種広葉樹の葉や、人間によって植栽された果樹等の葉を食べる。

(試料3) 食葉性のサクラコガネ (*Anomala daimiana*) 及びサクラコガネ属 (*Anomala* sp) に同定される昆虫片を産した。

他に食葉性昆虫として知られるカドマルエンマコガネ (*Onthophagus lenzii*) と、それよりやや小型のエンマコガネ属 (*Outhophagus* sp) の、それぞれ中後胸腹板が発見された。小型のエンマコガネ属は分類を進めれば、コブマルエンマコガネかマルエンマコガネ等に同定される可能性が高いものであると考える。これらは獸とくに牛馬糞を好み、鹿や犬の糞・人糞にも集まる。このことからS I 3の付近に、人糞を含む獣糞が存在したことは確実であろう。

No.	次数	年・月・日	時間	種	形	備考
1	77次	S I - 1	午前	ヒメコガネ アオオムサシ スジアオゴミムシ ドウガネブイブイ	前胸背板 右側面 左側面 左側面	午食の性様が 考えられる。
2	77次	S I - 3	午前	ヒメコガネ ドウガネブイブイ	右側面・前胸背板・中胸背板・腿節・左 側面片	午食の性様が 考えられる。
3	77次	S I - 3	午後	サクラコガネ エンマコガネ カドマルエンマコガネ サクラコガネ属	左側面片 小後胸腹板 小後胸腹板 尾部	小食の性様が 考えられる。

第8表 昆虫遺体

富沢遺跡第77次調査植物種子調査報告

東北大學農學部 星川清親・庄司駒男

1. SK-2

オオムギ(皮麥) 一かなり焼きぶくれの跡あり。

2. SK-5

ホタルイ、サンカクイ、タイヌビエ、ヒメジソ、イシミカワ、シロザ、シロバナサクラタデーすべて湿地またはその周辺の荒れ地の雑草である。

#### 3. S I - 1

モモ、オナモミ果実、ミゾソバ—当時人家の庭か住居に近い場所だったと思われる。

#### 4. S I - 1

オオムギ（皮表）、イネの穀殼、スズメウリまたは小形のウリ、トウガン、ミゾソバ、ヒメジソ、カナムグラー土蔵に貯蔵した食物の類か。穀殼とトウガンとミツバ種子は炭化せずに原形のまま遺存している。トウガンは果実のままでつぶれた状態で、多くの種子がそのままの形で遺存している。ミツバと思われるセリ科の種子が見出されたことは珍しい例で、当時の野菜の種類を知る手がかりとして注目される。

#### 5. S I - 3

クルミーやや長形のものである。

#### 6. S I - 3

ヒメミカンソウ、イシミカワー—当時この近くが湿地または半湿地状態であったろう。

### 5. 遺構の所属年代とまとめ

1. 今回5・6層上面で検出された遺構は、出土遺物から中世から近世に所属する可能性が考えられる。（6層上面の遺構は、前述したように本来5層上面あるいは5層中から掘り込まれた可能性が考えられる。）基本層5層は黒褐色の粘土層で、隣接して行われている過去3回の調査（第15次調査・第35次調査・第40次調査）で中世から近世に対応されている層と層相がほぼ同様である。このようなことから以下のようないくつかの関係が考えられるが、各調査とも年代を決定するに充分な遺物の出土が少ないとから所属年代には明確な対応が得られていない。今後さらに富沢遺跡北東部微高地周辺での調査が重ねられることにより検証がなされていくことに期待したい。（第77次調査の所属年代以外は各次調査の報文による。）

77次調査	15次調査	35次調査	40次調査
5層上面（中世～近世）	3a層上面（中世）	5層上面（13～14c）	4層上面（15～17c初）
			5層上面（15～17c初）
6層上面（中世～近世）	3b層上面（中世）	6層上面（12～13c）	6層上面（15～17c初）
2. 今回検出された竪穴遺構は3基である（S I 1～3）。いずれも南区で検出され、遺物などから中世に所属するものであると考えられる。これらの竪穴遺構はその規模や、形状等に共通する部分が多くみられるので以下のようないくつかの点から検討を加えてみた。			
○平面形—いずれも隅丸長方形を基調としている。S I 3は部分的な検出である。			

- 断面形－壁はほぼ急角度に立ち上がり、底面との境は明瞭である。壁面には凸凹はみられず、形状は逆台形を呈する。深さはS I I + 3で80cm～100cmである。
- 底面－底面は中央部が僅かに下がる程度で、ほぼ平坦である。貼り床やピット等の施設は認められなかった。
- 柱穴－遺構内部（底面、壁面）には柱穴は認められない。S I I の周囲ではピットが検出されているが、柱痕跡は確認されていない。しかし、S I I の長軸線上に位置しているピット2基は規模や形態的に柱穴と考えることができ、何らかの上部構造があった可能性がある。
- 堆積土－S I I + 3は自然堆積状況を呈し、層中に植物遺体を多く含んでいる。（S I I は下層部分が自然堆積である。）

このような形態を示す遺構として次のような遺構が考えられよう。

- 1) 壺穴住居
- 2) ゴミ穴
- 3) これら以外の目的の地下施設

これらの可能性についてそれぞれ考えると、1) であるとした場合、カマドを持たないこと、生活の痕跡を示すような土器類の出土がほとんど見られないこと、深さに対して出入口となるような施設が確認できること、S I I 以外では柱穴になりそうなピットがなく上部構造物があった可能性が少ないとなどの点から、壺穴住居とするには不十分であろう。次に2) であるとした場合、検出されたように平面形や、断面形などに共通する規格性を持つ必要性が考えられること、底面を水平に作る必要性が考えられないこと、さらにゴミ穴であるとすれば、堆積土中に多くの遺物が残されているものと考えられるが、今回堆積土中からの遺物の出土は僅かである、などの点から当初からゴミ穴として利用することだけを目的として構築されたとは考えるには困難な点が多い。しかし、堆積状況が自然堆積状況であるので、これらの遺構が埋没していく過程でゴミ穴として利用された可能性は否定されるものではない。次に3) であるとした場合、平面形、断面形に規格性が認められる。また、底面を水平にしていることからこの形であることに目的があったと考えられる。底面から付け札木簡が3点出土していることから、ここに何らかの荷物が置かれた可能性が考えられよう。さらに米、種子、繩等が出土していることからも荷物が置かれた可能性を示すことと矛盾はないであろう。

以上のことから今回検出された壺穴遺構は住居やゴミ穴ではない別の目的を持って構築された地下施設であると考えられ、貯蔵施設であった可能性が考えられる。

このような形態を示す遺構は今泉遺跡（佐藤：1983）、隣接する山口遺跡第10次調査（中富：1991）でも検出されている。また、県内では觀音沢遺跡（加藤・阿部：1980）、川上遺跡（大

友他：1990）が知られている。いずれもその形態、出土遺物から半地下式の貯蔵施設の可能性が指摘されている。

3. 今回の調査で出土している遺物には、木筒、鳥帽子の可能性のある漆製品、青磁、白磁、などがあり、また、貯蔵を目的とする施設が複数存在していることなどから、ある程度の身分を持ったものの屋敷が周辺に存在していた可能性が考えられる。

4. 弥生時代の水田跡は17a層、18a層、19a層で検出されている。しかし、遺物は19a層で杭が1点出土しているのみで時期を決定するような遺物の出土はなかったが、第15次調査・第35次調査との層の対応から次のようない推定が可能であろう。

77次調査	15次調査	35次調査	所属年代
17a層		24層	樹形圓式期～十三塚式期
18a層	11a層	25層	樹形圓式期
19a層	12層？		樹形圓式期以前

これらの水田跡は間に互層をなす自然堆積層の存在がそれぞれの大畦畔直下で確認されている。そのうち17a層水田跡と18a層水田跡の関係は17a層水田跡が18a層水田跡の畦畔を踏襲して作られており、17a層水田跡の大畦畔下には互層をなす自然堆積層（18b層）が擬似畦畔Bとして遺存している。この関係は第35次調査24層水田跡、25層水田跡の形成過程でも認められることから、18a層水田跡が自然堆積層（17b層）に覆われた後に17b層を主な母材層とする17a層水田跡が復旧されたものと考えることができ、継続して水田經營が行われたのではなく途中に中断期があったものと考えられる。

19a層水田跡は擬似畦畔のみの検出であり、また、一部掘り過ぎの箇所もあることから不確定要素が大きいが畦畔方向が18a層とは大きく違うことや傾斜角度などから第15次調査12層と対応される可能性が考えられる。しかし、18a層と19a層の分層については前述したように、課題が残されており、19a層水田跡の認定については今後の調査によって検証されていく必要があろう。

5. この他に遺構を検出したのは3b・4b・10層上面で、それぞれ水田跡を検出しておらず、各層の対応関係をまとめると以下のようない推定が可能であろう。

77次調査	15次調査	35次調査	所属年代
3b層	2a層	2層	近世～現代
4b層	2b層	4層	近世
10層	7a層	15層	古墳時代（南小泉式期）

註1 高橋利彦氏のご教示による。

註2 伊達泰宗氏のご教示による。

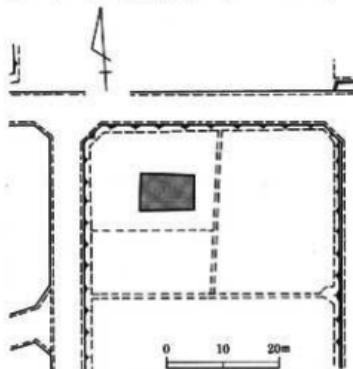
## 第8節 富沢遺跡第79次調査

### 1. 調査方法

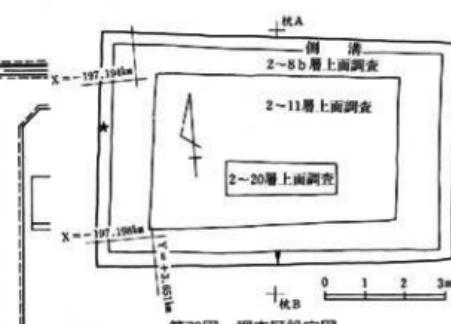
調査区の設定面積は約 $8.8 \times 5.7\text{m}$ （約 $50\text{m}^2$ ）である。調査は、盛土および直下の1層（旧水田耕作土）上面までを重機で除去し、以下は人力により行った。なお、調査区周辺には土層観察および排水用の側溝を設けた。8 b層上面までは調査区全面の精査を実施し、8 b層以下は約 $6.0 \times 3.8\text{m}$ の試掘区を、さらに11層からは約 $4.0 \times 0.8\text{m}$ の試掘区を設けて、最終的には1層から約3.5m下の20層中まで掘り下げた。遺構の実測は、杭A・Bを基準として実施した。なお、基準杭の平面直角座標系Xにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭A：X = -197.19311km, Y = +3.65460km 杭B：X = -197.19954km, Y = +3.65390km）。

### 2. 基本層序

今回の調査では、盛土下に大別20層、細別では22層が確認された。各層の土質は1層はシルト、2・3層は粘土、4～7層は泥炭質粘土、8～19層は粘土と泥炭質粘土の互層となり、15層以下は粘土である。特に9・10層は泥炭や粘土を層中に挟む泥炭質粘土が極めて厚いのが特徴といえる。グライ化は16層以下から漸次進み、18層以下からは顕著なグライ化をなし、極めて堅密な層となる。なお、ここでは調査土層中からは旧石器時代に属する植物遺体を含む層は確認されなかった。現代のものを除く水田土壤は2・3・4 a・5・6・8 aの6つの層である。また、7層も水田土壤の可能性が高い。各層の傾きは、8 b層まではいずれの層もわずかながら、南東方向に下がっている。



第72図 調査区位置図



第73図 調査区設定図

### 3. 検出遺構と出土遺物

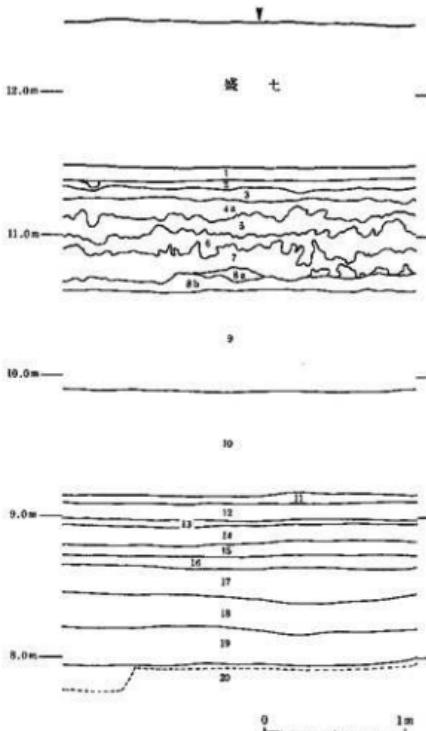
遺構は5層・6層・8a層上面でそれぞれ水田跡が検出された。また、2・3・4a層の各層では遺構は検出されなかったものの、土層の特徴や下面の状況から水田土壤と考えられた。

#### (1) 5層上面

##### 5層水田跡（第75図）

###### 遺構状況

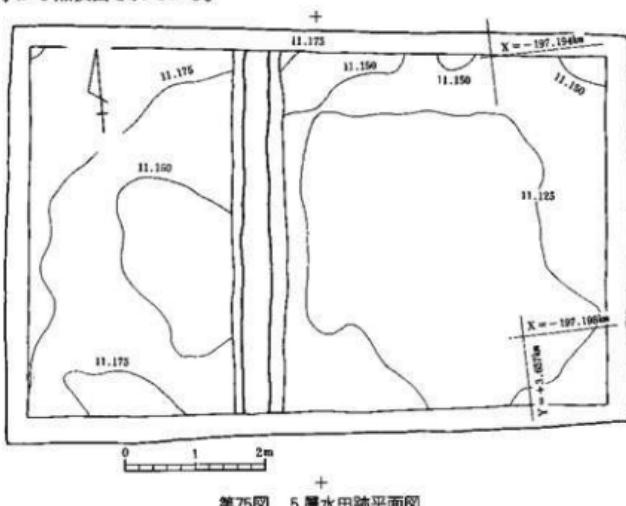
ほぼ真北方向に走る畦畔が1条検出されたのみである。畦畔は土盛り畦畔で、断面は台形状を呈する。規模は下端部が0.7m前後で、耕作土上面からの高さは3cm前後である。畦畔の方向はN-7°-Eである。耕作土は泥炭質粘土であり、耕作土の厚さは6~20cmである。また、その下面には凹凸が顕著に認められ、酸化鉄もわずかに認められた。水田面の標高は11.12~11.20mで、わずかに南東方向に下がる傾斜を示している。



第74図 基本層序

層序	色	調	性質	層厚	鉱化鉄	人	物	名
1	#V-17褐色	2.5Y4/3	粘土質シルト	10cm前後	有			現代の水田土壤
2	褐	黄	2.5Y4/2	シルト質粘土	2~5cm	無		水田土壤
3	黄	灰	2.5Y4/3	粘土	6~10cm	有		水田土壤
4a	黄	灰	2.5Y4/1	粘土	6~15cm	有		水田土壤、下部粘土
4b	黑	色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	1cm前後	—		瓦砾、4a層の骨材等
5	黄	灰	2.5Y5/3	粘土	6~20cm	有(少)		水田土壤、下部粘土
6	墨	褐	2.5Y3/1	泥炭質粘土	4~20cm	—	1.表面より下部約2~5cmの灰白色火山灰ブロック少量下部ブロッ	本層土壤、下部粘土
7	黑	色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	2~20cm	—	本層土壤?	下部や中部
8a	褐	褐	2.5Y3/1	粘土	2~10cm	—	本層土壤、古土部は分離しない	
8b	褐	褐	2.5Y5/2	粘土	6~20cm	—	下部は黑色の泥炭質粘土と互層、8a層の骨材等	
9	褐	黄	2.5Y4/2	泥炭質粘土	20cm前後	—	層中に灰褐色の粘膜を保存	
10	褐	色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	20cm前後	—	層中に黄褐色の粘土層を保存	
11	青	灰	2.5Y4/1	粘土	8cm前後	—	植物遺体	
12	黑	褐	2.5Y3/1	泥炭質粘土	20cm前後	—		
13	褐	灰	2.5Y4/1	粘土	4cm前後	—	植物遺体	
14	褐	色	2.5Y2/1	泥炭質粘土	12cm前後	—	植物に近い、層中にうすく砂層保存	
15	黑	色	2.5Y2/1	粘土	10cm前後	—	植物遺体	
16	黄	灰	2.5Y4/1	粘土	8cm前後	—	植物遺体	側グライ
17	黄	灰	2.5Y4/1	粘土	25cm前後	—	砂丘	側グライ
18	褐	灰	10G-Ya/1	粘土	20cm前後	—	—	側グライ
19	褐	灰	3 G6/1	粘土	25cm前後	—	植物、側グライ	
20	褐	褐	3 G7/1	粘土	10cm以上	—	側グライ	

〈出土遺物〉 土師器・赤焼土器の土器片が6点出土したが、図示できるものはなかった。その他に種子が1点検出されている。



第75図 5層水田跡平面図

## (2) 6層上面

### 6層水田跡 (第76図)

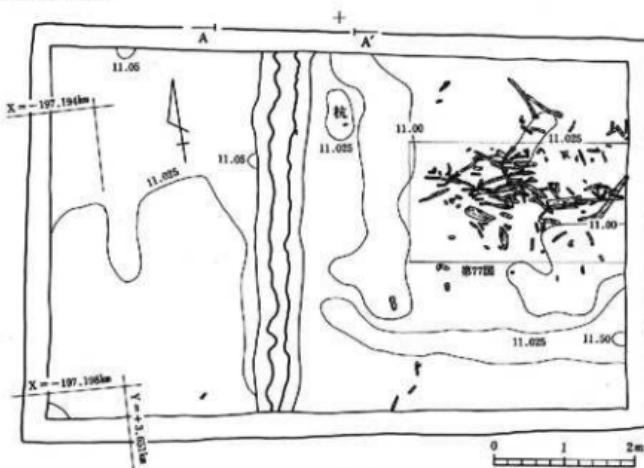
#### 〈遺構状況〉

5層水田跡の畦畔とはほぼ同位置に畦畔が1条検出された。また、畦畔の東側からは杭や木材群も検出されている。畦畔は土盛り畦畔で、断面は台形状を呈する。規模は、下端幅が0.6m前後で、耕作土上面からの高さは10cm前後である。畦畔の方向はN-8°-Eである。耕作土は泥炭質粘土であり、厚さは4~20cmである。その下面には凹凸が顕著に認められる。また、耕作土上面および上部には灰白色火山灰のブロックが少量認められた。水田面の標高は11.00~11.05mでほぼ平坦である。

〈杭〉 一本検出されている(第81図4)。畦畔から東へ約0.8m離れた地点である。遺構との関わりは明らかではない。

〈木材群〉 畦畔の東側を中心、東西約3m、南北約2mの範囲から木材が集中して多数検出された。その大半が層中からの出土であり、東西方向に横たわった状態で出土している例が多い。木材群の中には自然木の他に大足・加工材・杭材なども多数含まれていた。この木材群については方向性などから畦畔の一部として、畦畔を補強するために意図的に入れ込まれた可能性が想定されるが、明確にはできなかった。

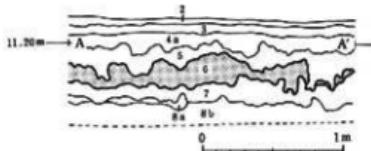
第8節 宮沢遺跡第79次調査



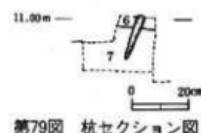
第76図 6層水田跡平面図



第77図 6層水田跡木材群



第78図 6層水田跡断面図



第79図 杭セクション図

〈出土遺物〉 土師器片（4点）・大足（1点）・杭材（53点）・その他の木材（113点）の他、昆虫遺体や種子も出土している。土師器は図示できたものは壊1点で、ロクロを使用して製作されており、底部は回転糸切り無調整である。大足は長方形の板状を呈する形態のものと推測され、鼻緒孔が3孔認められる。杭材では、保存状況から図示できたのは15点のみである。これらは全てが丸太材で、直径では1～3cm、末端加工では1面のみのものが比較的多い。

### （3）8 a層上面

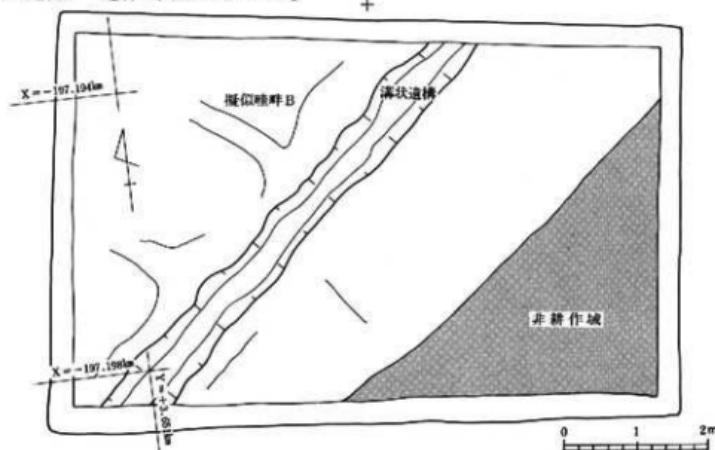
#### 8 a層水田跡（第80図）

##### 〈遺構状況〉

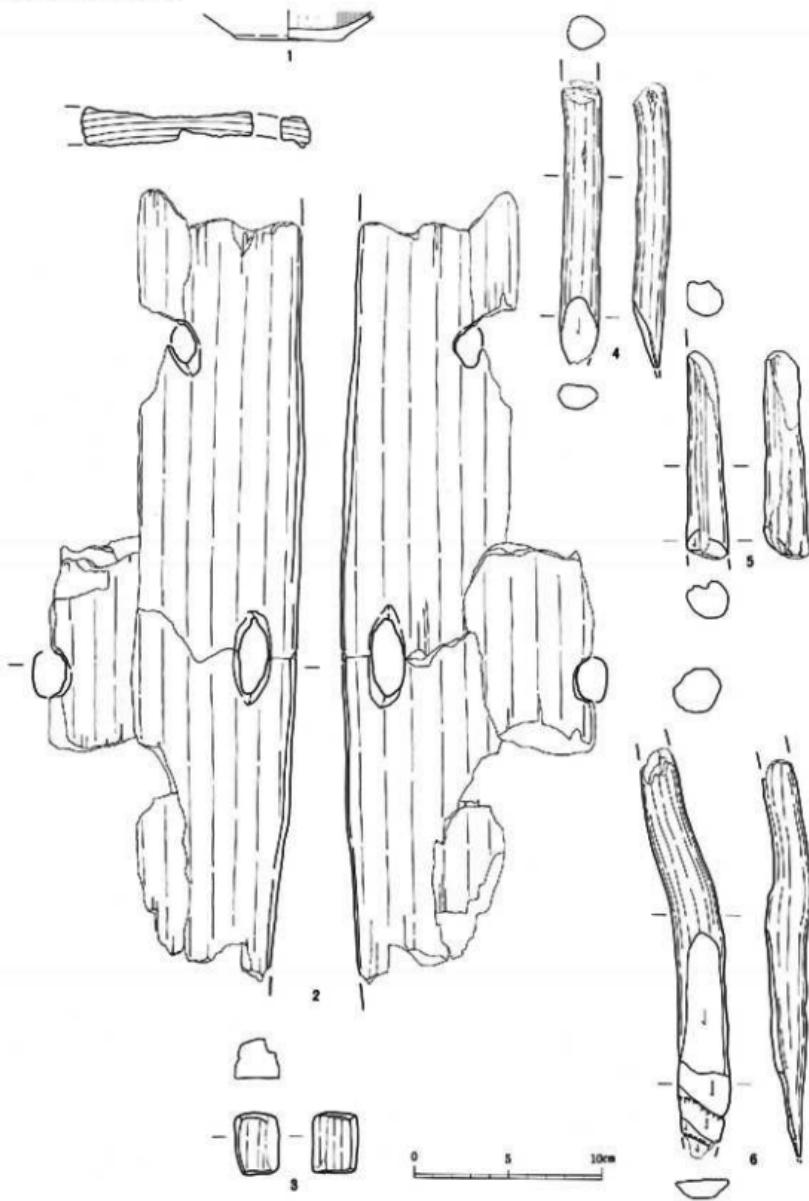
擬似畦畔Bが数条と溝状遺構が1条検出されている。調査区南東部は8 a層は分布しておらず、非耕作域となっている。擬似畦畔Bは溝状遺構の両側に沿うように2条、そこからほぼ直角に北西方向に2条と南東方向に1条が確認された。方向は前者がN-47°-E、後者がN-54°-Wである。また、その幅は前者は0.3～0.6m、後者は30cm前後である。水田区画全体を把握できた例はないが、方形で1辺が2m程度の小規模な水田が想定される。なお、南東部の非耕作域が地形的に一段低くなっていることから、水田区画はほぼ地形の傾斜に即して行われているといえる。耕作土は8 b層を母材としており、粘土である。また、下面には凹凸が認められる。

〈溝状遺構〉 擬似畦畔Bと方向を同じくしており、この水田跡に伴う遺構と考えられる。上端幅は0.5～0.8mで、深さは10cm前後である。堆積土は1層で、8 a層とはほぼ同様の特徴をもつものである。この溝状遺構については水田跡に伴う水路や、畦畔を設置する際の掘り込み跡などが想定されるが、今回の調査では明確にはできなかった。

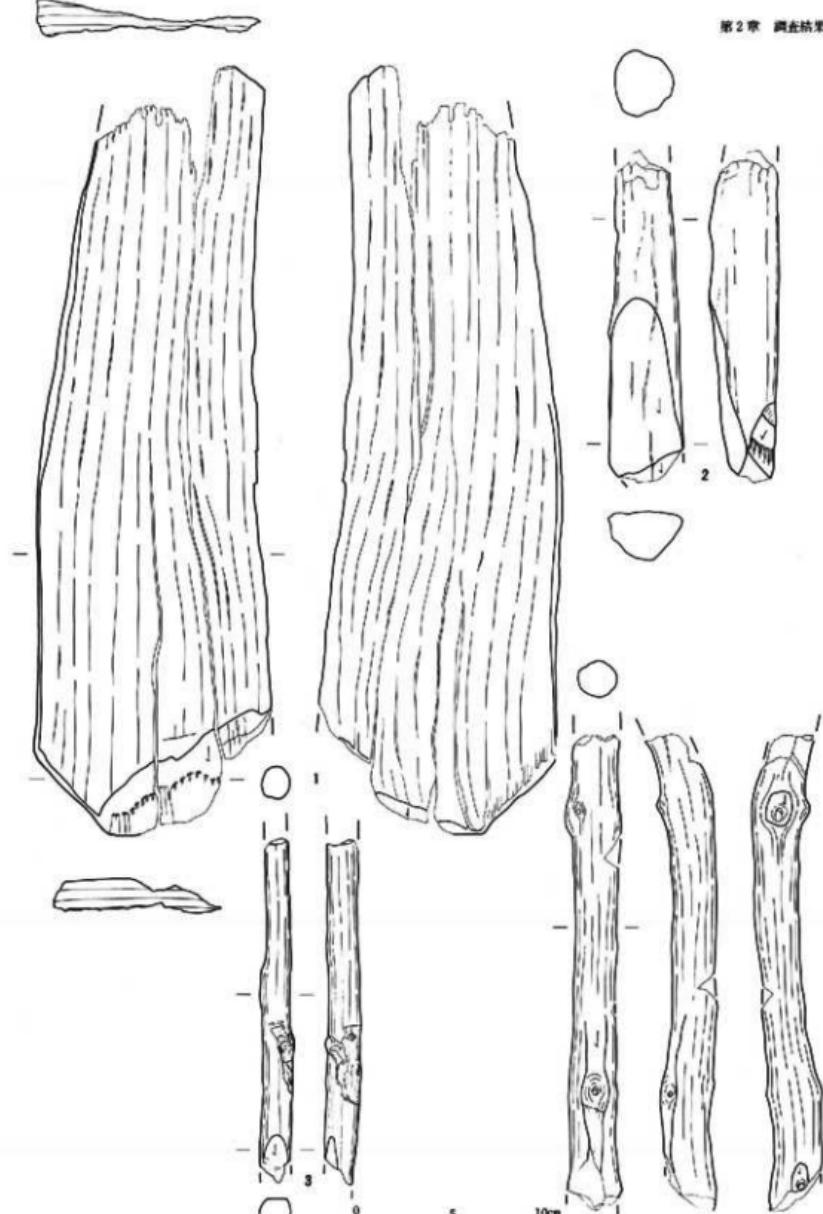
##### 〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。



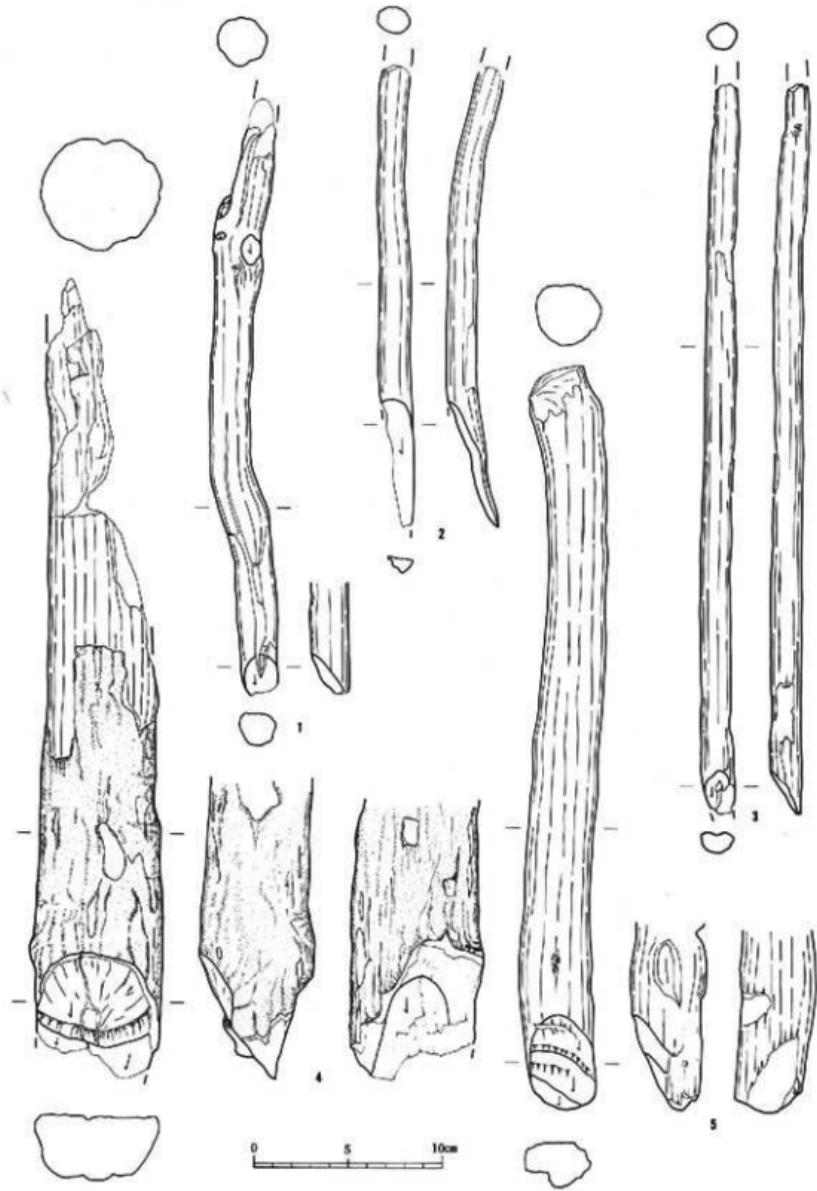
第80図 8 a層水田跡平面図



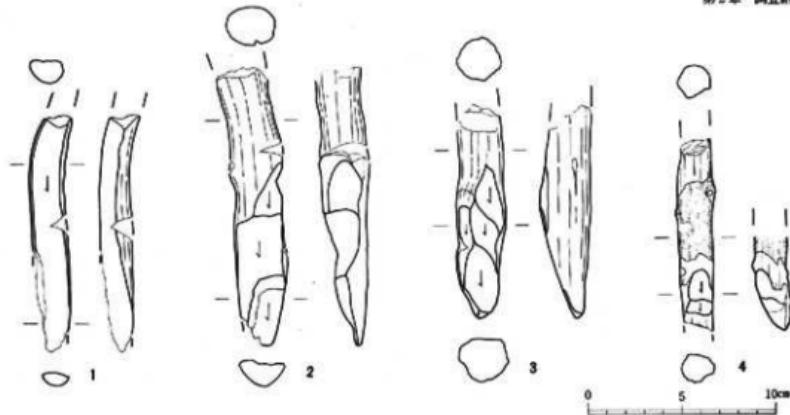
第81図 6層水田跡出土遺物(1)



第82図 6層水田跡出土遺物(2)



第83図 6層水田跡出土遺物(3)



第84図 6層水田跡出土遺物(4)

土器観察表

No.	標本番号	回収番号	遺構・部位	施	刻	縦	横	厚	口	深	底	基	色	調	特	記
1	第81回 1	59-1	6層水田跡	土器跡	杯	直形4/5	—	5.8cm	—	再一式白陶、内一黑色、内面黑色化粧。底部凹凸切り削鉢	—	—	—	—	—	—

木製品・加工材観察表

No.	標本番号	字名番号	出土遺構・部位	種	説	時	質	木材形状	長	幅	厚	底	色	調	特	記
1	第81回 2	59-4	6層水田跡木材料	大	足	キノ風の一箇	柳木材	コナラ風・ナラ風・カツラ風の一箇	丸太材	(42.3)	(13.1)	1.7	1面(黒面)	—	—	表面の板を剥離してしている。
2	第82回 1	59-5	6層水田跡木材料	加工材	キノ風の一箇	柳木材	ハシバミ風の一箇	丸太材	(41.0)	(12.0)	—	—	—	—	—	—
3	第82回 3	59-6	6層水田跡木材料	加工材	カナ	—	—	—	—	—	3.2	2.3	—	—	—	—

杭材観察表

No.	標本番号	字名番号	出土遺構・部位	種	説	材	質	木材形状	長	幅	厚	底	色	調	特	記
1	第81回 4	59-2	6層水田跡	杭	材	コナラ風・ナラ風・カツラ風の一箇	丸太材	(35.1)	2.0	1	面	—	—	—	—	
2	第81回 5	59-3	6層水田跡木材料	杭	材	—	丸太材	(31.1)	(2.0)	1	面(黒面)	—	—	—	—	
3	第82回 3	59-4	6層水田跡木材料	杭	材	ハシバミ風の一箇	丸太材	(36.3)	1.7	1	面	—	—	—	—	
4	第82回 2	59-5	6層水田跡木材料	杭	材	—	丸太材	(24.5)	1.7	1	面	—	—	—	—	
5	第82回 4	59-6	6層水田跡木材料	杭	材	コナラ風・ナラ風・カツラ風の一箇	丸太材	(45.5)	7.0	4	面	—	—	—	—	
6	第82回 5	59-7	6層水田跡木材料	杭	材	—	丸太材	(25.3)	2.3	1	面	—	—	—	—	
7	第84回 3	59-8	6層水田跡木材料	杭	材	鰐目材	丸太材	(39.0)	1.6	1	面	—	—	—	—	
8	第84回 1	59-9	6層水田跡木材料	杭	材	—	丸太材	(32.5)	(1.8)	1	面	—	—	—	—	
9	第84回 4	59-10	6層水田跡木材料	杭	材	—	丸太材	(39.3)	1.9	2	面	—	—	—	—	
10	第83回 1	59-11	6層水田跡木材料	杭	材	カツラ風の一箇	丸太材	(31.6)	2.6	1	面	—	—	—	—	
11	第83回 3	59-12	6層水田跡木材料	杭	材	シラキ	丸太材	(29.7)	3.6	4	面	—	—	—	—	
12	第84回 2	59-9	6層水田跡木材料	杭	材	シラキ	丸太材	(34.6)	2.5	3	面	—	—	—	—	
13	第82回 2	59-10	6層水田跡木材料	杭	材	カツラ風の一箇	丸太材	(37.7)	3.9	3	面	—	—	—	—	
14	第84回 3	59-11	6層水田跡木材料	杭	材	—	丸太材	(31.4)	2.6	6	面	—	—	—	—	
15	第81回 6	59-12	6層水田跡木材料	杭	材	コナラ風・ナラ風・カツラ風の一箇	丸太材	(39.9)	2.5	5	面	—	—	—	—	

#### 4. 遺構の所属年代とまとめ

検出遺構としては5層・6層・8a層の各水田跡がある。その内、5・6層水田跡については出土土器から平安時代に所属するものと考えられる。特に6層水田跡では層上部において灰白色火山灰も認められており、このことを補強している。8a層水田跡については出土遺物がなく、所属時期については不明である。ただし、上層の水田跡とは畦畔の方向が大きく異なり、地形の傾斜に即した水田区画が行われていることなどから、古墳時代以前にさかのぼる可能性が大きい。

## 第3章 分析・同定

### 第1節 花粉分析

#### 富沢遺跡（第74次調査）の花粉分析

守田 益宗

##### 1. 分析について

富沢遺跡の第74次調査区は、旧石器時代の遺物の出土した第30次調査区や第58次調査区の東方に位置している。本調査区では前記調査区から出土したグイマツ、アカエゾマツなどの大型植物遺体は見い出されなかつたが、下層部より腐植質粘土層が検出された。本報告は、この腐植質粘土層と旧石器時代層との関連を花粉分析の立場から検討を加えたものである。

花粉分析用試料は、35~40層より各1試料を採取した。試料の採取地点とその層位を図1に示す。試料の処理法、花粉・胞子の同定および出現率の算出は、これまでの報告と同様にして行なつた（例えば、守田1991など）。

##### 2. 結果および考察

各試料について検出された花粉・胞子を表1に示し、主要な花粉・胞子の消長を図1に示す。なお、図中白スキの部分は高木花粉が200粒に満たない層準であることを示す。

40層は花粉・胞子が極めて少ない。*Nyssa*（ヌマミズキ属）、*Liquidamber*（フウ属）などの第三紀植物の花粉がみられ、これらは明らかに二次堆積したものである。

39層の花粉・胞子含量は40層ほど極端ではないがやはり少ない。草本花粉（Herbs）やシダ胞子（Ferns）の占める割合が高く、高木花粉（Trees）の比率は低い。中でもCarduoideae（キク亜科）や*Lycopodium*（ヒカゲノカズラ属）が多く見い出される。高木花粉では*Pinus*（マツ属）、*Tsuga*（ツガ属）などの針葉樹や*Betula*（カバノキ属）の出現が目立つ。

38層は腐植質に富む粘土層である。花粉の保存状態は良好であり、高木花粉の占める割合が最も高い。*Betula*が最優勢で*Pinus*がこれに次ぐが、他の針葉樹花粉も多い。他の花粉・胞子ではEricaceae（ツツジ科）の出現率が比較的高いのが特徴である。

37層は高木花粉が高率を示す。*Betula*は約70%の高率である。その他の花粉・胞子では、Cyperaceae（カヤツリグサ科）、*Sanguisorba*（ワレモコウ属）が比較的多く見られる。二次堆積花粉もやや多く検出される。

36層は腐植質を含む粘土層である。花粉の保存状態は本層が最も良く、花粉含量も最も多い。高木花粉が60%以上の高率を占め、*Betula*や針葉樹の花粉が多い。針葉樹花粉の中では*Picea*（トウヒ属）の比率が高い。草本花粉ではCyperaceaeが高率を示す。シダ胞子は極めて低率

である。

35層では花粉・胞子含量が少ないが、低木花粉が約60%を占め最も多い。この大部分が *Alnus* (ハンノキ亜属) である。40層同様、*Fagus* (ブナ属)、*Quercus* (コナラ属) の比率が高く、二次堆積花粉も多く見い出される。

39~36層はその花粉の組成からも明らかに氷河期のものであり、距離的に考えて第30次調査、第58次調査の旧石器時代層とはほぼ同時代の堆積物と言えよう。したがって、本調査区から検出された *Pinus* はチョウセンゴヨウ、*Picea* はアカエゾマツ、*Betula* はシラカンバ、*Alnus* はヤマハンノキから由来したものと考えられる。

本調査区の環境変遷を推定すると、40層は花粉・胞子含量が少なく、二次堆積花粉が目立つことから、周辺の丘陵斜面あるいは河川などによる土砂供給の多い環境下にあったと言える。本層で検出される *Fagus*、*Quercus* も二次堆積花粉であろう。39層の時代になると、土砂供給がややおさまり、キク亜科やヒカゲノカズラ属などが多く生育するようになった。38層の時代には腐植質が多く、二次堆積花粉も検出されないことから、比較的安定した堆積環境のもとでツツジ科の低木が多い植生が成立していた。付近にはチョウセンゴヨウ、シラカンバの多い亜寒帯性の針葉樹林が広がっていたと考えられる。37層の時代に一時的に周囲からの土砂流入があり、ツツジ科の低木にかわってカヤツリグサ科やワレモコウ属が多い湿性の草地が広がったと推定される。36層の時代はより湿润で安定した堆積環境となり、付近にはアカエゾマツの林が広がったと推定される。35層では再び周辺からの土砂流入が多い環境となり、付近にはヤマハンノキが生育していたであろう。

本調査区の38~36層は高木花粉が上層に向って増加傾向を示し *Betula* が最優勢を示すこと、35層になって *Alnus* が増加することから、第30次調査のボーリング試料の23層および第58次調査区の37層以下の部分に対比される可能性が高い(守田1992)。本調査区の37層と第58次調査区の38層の関係が注目されるが、富沢遺跡の旧石器時代層は調査地点によって腐植層の数や層厚が異なること、また、花粉出現率の大まかな消長は地点間で互いによく似ているが、単層ごとの対比をするには出現率の変動が大きいため厳密な対比は難しい。そのため、第58次調査区の38層との対比は、その可能性だけにとどめておきたい。

#### 引用文献

- 守田益宗(1991) 富沢遺跡(第30次調査)の花粉分析、富沢遺跡(第30次調査)  
-近世～縄文時代編-
- 守田益宗(1992) 富沢遺跡(第30次調査)のボーリングコアの花粉分析
- 守田益宗(投稿中) 富沢遺跡(第58次調査)の旧石器時代の花粉分析

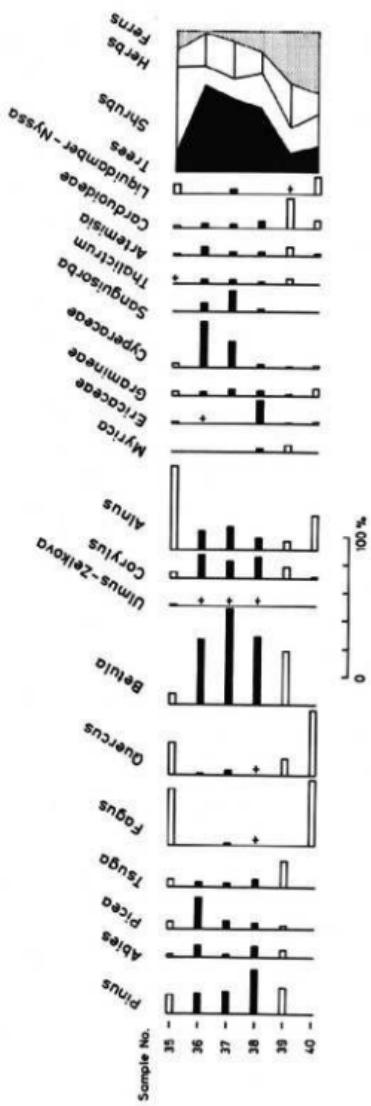


図1 花粉ダイアグラム

表1 花粉・孢子出現表

		35周	36周	37周	38周	39周	40周
<i>Pinus</i>	ツツクサ	8	45	34	80	8	
<i>Abies</i>	カシ属	1	27	4	21	2	
<i>Picea</i>	トウヒ属	3	69	13	11	1	
<i>Tsuga</i>	ツガ属	3	11	5	14	5	
<i>Larix</i>	カラマツ属		1				
<i>Cryptomeria</i>	スギ属			1			
<i>Betula</i>	カバノキ属	5	146	150	125	16	
<i>Carpinus</i>	クマシダ属					1	1
<i>Fagus</i>	ブナ属	24		3	1		6
<i>Quercus</i>	コナラ属	14	4	6	1	5	6
<i>Ulmus Zelkova</i>	ムレ属・ケヤキ属	1	2	2	2		
<i>Acer</i>	カエデ属		1				
<i>Tilia</i>	シタノキ属	1			1	1	
<i>Myrica</i>	ヤツリギ属				8	16	
<i>Salix</i>	ヤナギ属	1			2		
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	14	33	26	47	24	1
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	197	28	36	27	18	14
<i>Alnaster</i>	ヤシノキ属	1	4	2	9	1	1
<i>Ilex</i>	ヤチノキ属	8		1			
Araliaceae	ウロモドキ			1			
Ericaceae	ツツジ科	5	1		32	3	1
<i>Fusinus</i>	トキリ属	1					
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属	1	3		1		
Gramineae	イネ科	12	7	12	12	3	3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	12	62	40	10	3	1
<i>Typha</i>	ガマ属	1					
Liliaceae	ユリ科				4	1	
<i>Bistorta</i>	イブキトチノク属	1				5	
<i>Persicaria</i>	サナニシキ属	10		2		2	1
<i>Eryngium</i>	イカリヅタ属			1			
<i>Aconitum</i>	トリカブト属				2		
<i>Clematis</i>	センニンソウ属	1	1		1		
<i>Coptis</i>	オウレン属				10	4	
<i>Thalictrum</i>	カワラツツジ属	1	7	7	3	10	
<i>Ranunculus</i>	サンボウケ属				1		
<i>Sanguisorba</i>	ウレモコウ属		12	32	6		
other Rosaceae	バラ科		2				
<i>Geranium</i>	フウロソウ属		1			1	
Umbelliferae	セリ科	1	6	5	8	1	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	4	13	7	7	18	1
Carduoideae	キク属	5	5	6	13	60	3
Cichorioideae	タンポポ属		1				
1-lete type PS	単条葉型シダ孢子	45	5	24	64	73	25
3-lete type PS	双生葉型シダ孢子	1		2		1	5
<i>Lycopodium</i>	ヒカゲノカズワ属	3			18	49	
<i>L. serratum</i> type	トウゲシバ孢子			2			
<i>Sphagnum</i>	ミズメ属		7	8	24	19	
Trees	高木花粉	60	306	218	256	42	13
Shrubs	低木花粉	228	69	66	146	62	17
Herbs	草本花粉	48	117	112	81	103	9
Ferns	シダ孢子	49	5	28	82	123	30
Unknown	不明	45	18	31	20	28	7
<i>Liquidambar</i>	ツウ属	7		2		1	2
<i>Nyssa</i>	ヌマツキズモ属	18		6			5

## 第2節 樹種同定

### 1. 富沢遺跡第70次・72次・73次・77次調査出土材の樹種

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

**1. 試料と方法** 試料は19点で、表記調査で検出された木製品・加工材・自然木である（表1）。試料の解剖学的知見に基づいて同定した（詳細は紙数に限りがあるため割愛する）。作製したプレパラートは仙台市教育委員会と木工舎「ゆい」に1組ずつ保管されている。

**2. 結果と考察** 試料は、劣化のため確実な同定ができず類似種としたものを含め11科14分類群に同定された（表1）。なお同定の根拠となつた解剖学的特徴の記載は省略する。

木製品の用材をみると、下駄（No.1）はヤナギ属であり、ほとんど類似の知られていないものであった。鋤（No.4）はクヌギ節（クヌギと考える）であり、これは試料と同時期のものとされる第28次調査出土の鋤と同じ用材（高橋1988）であった。関東地方などでもクヌギ節（類）製の鋤・鎌類の報告が多いことから、当時これらの農具にクヌギ材を選択的に用いていたものと考える。木筒にはいずれも針葉樹の4分類群が用いられていた。加工性や比重と強度などが選択理由となつたものと思う。建築・土木用材にはそれぞれ異なる種類が用いられていた。以上のように、いずれの木製品・加工材も、その当時入手可能な樹種の中からそれぞれの用途にふさわしい材質のものを選択・使用してきたこと示しているものと考えている。

#### 引用文献

高橋 利彦 1988 富沢遺跡（総合支所予定地）出土材同定、「仙台市文化財調査報告書第114集富沢遺跡－第28次発掘調査報告書－」、仙台市教育委員会、131-136。

表1 樹種同定一覧表

試料番号	遺物番号	凹版番号	遺物の概想	遺物の層位	遺物の時代	樹種	次数
1	56-7	22.5.14	下駄	S D - 3	壁上 近世～現代	ヤナギ属	70次
2	33-37	無10.12	木材(杭?)	木州土	9層 弥生(円形窓)	イヌガヤ	70次
3	9	無25.12	杭	作土?	15a層 弥生(円形窓)	ナハダ	73次
4	12	無25.12	鉤	作土?	16a層 弥生(円形窓)	ヨナツ属・ナツマツ属・クサガタ節の一種	73次
5	108	無54.12	木筒	S T 1	埋土	ネズコ	77次
6	115	無54.12	木筒	S T 1	埋土	カヤ類似種	77次
7	117	無54.12	木筒	S T 1	11a層	アヌツ	77次
8	118	無54.12	木筒	S T 1	11a層	スギ	77次
9	119	無54.12	木筒	S T 1	11a層	スギ	77次
10	124	無54.12	木筒	S T 1	11a層	スギ	77次
11	127	無70.12	杭?	作土?	19層下部 弥生	カヤ	77次
12	146	無57.12	建築材	S I 3	埋土	キヅロ	77次
13	148	無57.12	建築材	S I 3	埋土	コナラ属・コナラ属・コナラ属の一種	77次
14	149	無57.12	杭	S I 3	埋土	サクランボ属の一種	77次
15	193	無70.12	柱材	P - 76	埋土	タリ	77次
16	1	樹木	SR - 1	壁上	縞文?	カシガ属の一種	72次
17	3	樹木	SR - 7	壁上	縞文	ヤマグワ	72次
18	10	樹木	SR - 7	埋土	縞文	カエデ属の一種	72次
19	16	樹木	SR - 7	埋土	縞文	エノキ属の一種	72次

## 2. 富沢遺跡79次調査で出土した材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社 高橋 敦

### 1. 試料及び方法

試料は、富沢遺跡の6層水田跡（平安時代）から出土した杭等の木製品13点で、剝離の刃を用いて、試料の木口・征目・板目の3断面の徒手切片を作製、ガム・クロラールで封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

### 2. 結果

No.4の試料は同定する事ができなかったが、他の12点の試料は解剖学的特徴から9種類に同定された（表1）。なお、試料の同定根拠となった組織の記載や図版の一部は紙面の都合上省略した。

木製品は、全て針葉樹である。これは高橋（1987）の指摘のように加工性や仕上がりの良さを意識した用材選択があったものと思われる。

上記以外の資料は全て杭とされるもので、10点で8種類が同定された。高橋（1987）は杭材の調査から、弥生時代から平安時代に材の利用形態や周辺植生の変化があったことを推定している。今回の結果は、高橋（1987）の指摘を示すものなのかもしれないが、試料数が少ないので判断できない。今後さらに試料数を増やして確認していく必要があるだろう。

### 文献

高橋利彦（1987）富沢遺跡出土材同定。「仙台市文化財調査報告書第98集 富沢一富沢遺跡第15次発掘調査報告書」、p. 397-412、仙台市教育委員会。

表1 樹種同定一覧表

試料No.	遺物番号	出取番号	遺物の種類	遺構・層位	樹種	備考
1	40	第81回2	大足（板目材）	6層水田木材群	モミ属の一種	
2	15	第82回1	板材	6層水田	モミ属の一種	
3	37	第81回4	杭材（丸太材）	6層水田a区	コナラ属コナラ属コナラ属の一種	
4	7	第82回3	杭材（丸太材）	6層水田木材群	欅材	
5	33	第82回3	杭材（丸太材）	6層水田	ハシバミ属の一種	
6	51	第83回4	杭材（丸太材）	6層水田	ロナラ属コナラ属クスギ属の一種	
7	53	第81回5	杭材（丸太材）	6層水田	タリ	
8	86	第83回1	杭材（丸太材）	6層水田	カニヅチ属の一種	
9	97	第81回6	杭材（丸太材）	6層水田	コナラ属コナラ属コナラ属の一種	
10	109	第84回2	杭材（丸太材）	6層水田	シラキ	
11	111	第83回5	杭材（丸太材）	6層水田	シラキ	
12	127	第82回2	杭材（丸太材）	6層水田	モクサ属の一種	
13	18	第81回3	木材（丸太材）	6層水田	カヤ	

### 第3節 プラント・オバール分析

#### 仙台市富沢遺跡（第70, 71, 73, 74, 75, 77, 79次調査）における プラント・オバール分析

古環境研究所

##### 1. 分析結果

プラント・オバール分析の結果を表1および図2に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ロン属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

##### 2. 考 察

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オバールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、富沢遺跡の場合はこれまでの調査の結果、プラント・オバール密度が3,000個/g未満の場合でも水田遺構が検出されていることから、ここでは判断の基準となる値を約3,000個/gとした。この判断基準にもとづいて、各調査区ごとに稲作の可能性について検討を行った。

###### (1) 第70次調査

5a層～16層について分析を行った。その結果、9層（水田耕作土）からイネのプラント・オバールが10,500個/gと非常に高い密度で検出された。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。

###### (2) 第71次調査

2層～8層について分析を行った。その結果、2層（水田耕作土）からイネのプラント・オバールが2,300個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層で稲作が行われていた可能性が考えられる。

###### (3) 第73次調査

12層～16b層について分析を行った。その結果、16a層（水田耕作土？）からイネのプラント・オバールが3,800個/gと高い密度で検出された。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

###### (4) 第74次調査

1層～13層について分析を行った。その結果、8層と13層を除く各層でイネのプラント・オ

バールが検出された。このうち、1層では密度が20,600個/gと非常に高い値である。同層は現耕作土であることから、ここで検出されたものは最近の水田耕作によるものと考えられる。9層と10層（弥生時代の水田耕作土）では、密度が8,900個/gおよび5,300個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。また、4層（平安時代の水田耕作土？）でも密度が2,800個/gと比較的高い値であることから、稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の5、6、7、12層では、密度が2,000個/g未満と比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

#### (5) 第75次調査

2層～6層について分析を行った。その結果、2層～4b層でイネのプラント・オバールが検出された。このうち、3b層（水田耕作土）では密度が14,200個/gと非常に高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は極めて高いと考えられる。2層と3a層（水田耕作土）でも密度が7,700個/gおよび5,900個/gと高い値であることから、稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。その他の層では、密度が約2,000個/g以下と比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

#### (6) 第77次調査

11層～20層について分析を行った。その結果、11層～14a層、15層、17a層、18a層、19a層、20層の各層でイネのプラント・オバールが検出された。このうち、17a層と18a層（いずれも水田耕作土）では密度が3,500個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。その他の各層では、密度がおよそ2,000個/g以下と比較的低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

#### (7) 第79次調査

2層～8b層について分析を行った。その結果、これらのすべての層からイネのプラント・オバールが検出された。このうち、2層、3層、4a層、5層、6層、8a層（いずれも水田耕作土）および7層では密度が3,800～7,800個/gと高い値である。したがって、これらの層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。8b層では密度が900個/gと低い値であることから、稲作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

### 3.まとめ

以上のように、水田耕作土とされていた層では、そのほとんどからイネのプラント・オバー

ルが検出され、各層で稻作が行われていたことが分析的に検証された。また、水田耕作土とされていなかった層でも、第74次調査の9層、第79次調査の7層などで稻作の可能性が高いと判断された。

## 【参考文献】

- 藤原宏志、1976. プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の硅酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9: 15-29.
- 藤原宏志、1979. プラント・オバール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定－. 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二、1984. プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オバール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17: 73-85.

表1 プラント・オバール分析結果

仙台市・宮城遺跡

70次地点 試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属 個/g	ウシクサ属 個/g	ナビ属 個/g
5a	65	5	0.70	0	0.00	3,900	71,100	900	0
5b	70	17	0.78	0	0.00	900	110,700	0	0
7	91	4	0.66	0	0.00	600	22,400	0	0
9	97	10	0.66	10,500	7.11	4,400	12,300	0	0
10	107	3	0.60	0	0.00	8,900	9,600	0	0
11	110	4	0.52	0	0.00	3,300	5,000	0	0
12	114	4	0.50	0	0.00	3,200	23,500	800	0
13	118	8	0.29	0	0.00	5,200	7,200	0	0
14	126	6	0.56	0	0.00	3,200	19,300	600	0
16	134	16	0.43	0	0.00	4,200	11,400	0	0

71次地点

71次地点 試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属 個/g	ウシクサ属 個/g	ナビ属 個/g
2	30	26	0.90	2,300	5.36	1,100	22,100	500	0
4	56	8	0.38	0	0.00	11,800	2,700	3,600	900
5	64	7	0.52	0	0.00	0	9,400	0	0
6	71	9	0.19	0	0.00	1,300	4,600	0	0
7	80	8	0.55	0	0.00	0	25,100	0	0
8	88	10	0.21	0	0.00	3,800	2,300	0	0

73次地点

73次地点 試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属 個/g	ウシクサ属 個/g	ナビ属 個/g
12	55	21	0.65	0	0.00	0	6,500	0	0
13	76	5	0.69	0	0.00	0	12,900	0	0
14	81	5	0.55	0	0.00	2,800	15,100	0	0
15	86	4	0.30	0	0.00	6,700	2,500	0	0
16a	90	3	0.47	3,800	0.56	0	3,000	0	0
16b	93	7	0.75	0	0.00	0	2,500	0	0

74次地点 試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ ク シ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属 個/g	ウシクヤ属 個/g	キビ属 個/g
1	0	17	0.98	20,600	35.20	1,800	27,200	0	0
4	17	5	0.80	2,800	1.13	900	36,400	0	0
5	22	4	0.49	500	0.08	500	5,100	0	0
6	26	20	0.34	800	0.41	4,400	4,400	0	0
7	46	7	0.35	1,900	0.43	900	19,400	0	0
8	53	6	0.22	0	0.00	600	6,200	0	0
9	59	10	0.13	8,900	1.13	7,900	900	0	0
10	69	5	0.28	5,300	0.72	3,100	3,100	0	0
12	74	5	0.26	800	0.10	5,100	2,500	800	0
13	79	10	0.21	0	0.00	9,500	2,800	1,900	0

75次地点 試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ ク シ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属 個/g	ウシクヤ属 個/g	キビ属 個/g
3a	12	13	1.09	5,900	8.57	700	27,400	700	0
3b	25	7	1.24	14,200	12.52	5,000	20,000	1,600	0
4a	32	4	1.38	2,100	1.19	7,200	16,600	3,600	700
4b	36	5	1.25	1,500	0.93	3,900	20,700	700	0
5a	41	12	1.16	0	0.00	700	24,800	0	0
5b	53	7	0.94	0	0.00	2,300	65,100	2,300	0
6	60	9	0.73	0	0.00	700	5,300	2,300	0
2	0	4	1.15	7,700	3.63	3,800	17,800	2,300	0

77次地点 試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ ク シ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属 個/g	ウシクヤ属 個/g	キビ属 個/g
11	86	22	0.96	1,700	3.63	1,700	29,000	800	0
12	108	4	0.96	700	0.25	0	9,100	0	0
13	112	9	0.89	2,000	1.38	1,300	12,200	0	0
14a	121	2	0.86	1,100	0.19	0	15,900	0	0
15	127	3	0.88	500	0.12	1,100	21,100	0	0
16	130	6	0.83	0	0.00	0	10,200	0	0
17a	136	7	0.83	3,500	2.09	2,100	10,600	0	0
18a	150	4	0.85	3,500	1.19	1,400	19,900	0	0
19a	158	5	0.86	700	0.31	700	15,400	0	0
20	167	6	0.74	800	0.31	0	12,000	0	0

79次地点 試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イ ク シ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属 個/g	ウシクヤ属 個/g	キビ属 個/g
2	0	5	1.19	7,000	4.27	700	17,200	700	0
3	5	6	0.96	4,600	2.66	3,000	20,800	1,500	0
4a	11	11	0.73	6,400	5.21	1,600	20,100	0	0
5	22	14	0.62	7,800	6.92	700	9,300	0	0
6	36	12	0.46	4,200	2.35	5,900	18,600	800	0
7	48	12	0.31	4,300	1.61	23,300	14,600	2,100	0
8a	60	3	0.48	3,800	0.56	3,800	20,100	0	0
8b	63	16	0.61	900	0.82	1,900	66,500	0	0

富沢遺跡から検出されたプランツ・オパールの顕微鏡写真

(写真49)

No.	分類群	地点	試料名	倍率
1	イネ	74次	9	400
2	イネ	75次	3b	400
3	イネ	77次	17a	400
4	イネ	79次	5	400
5	ヨシ属	74次	9	400
6	ヨシ属	76次	10	400
7	タケ属(ネザサ節など)	71次	2	400
8	タケ属(タマササ属)	77次	18a	400
9	不明	76次	9	400
10	不明	75次	3b	400
11	不明	79次	8a	400
12	イネ科の茎部起源	79次	7	400

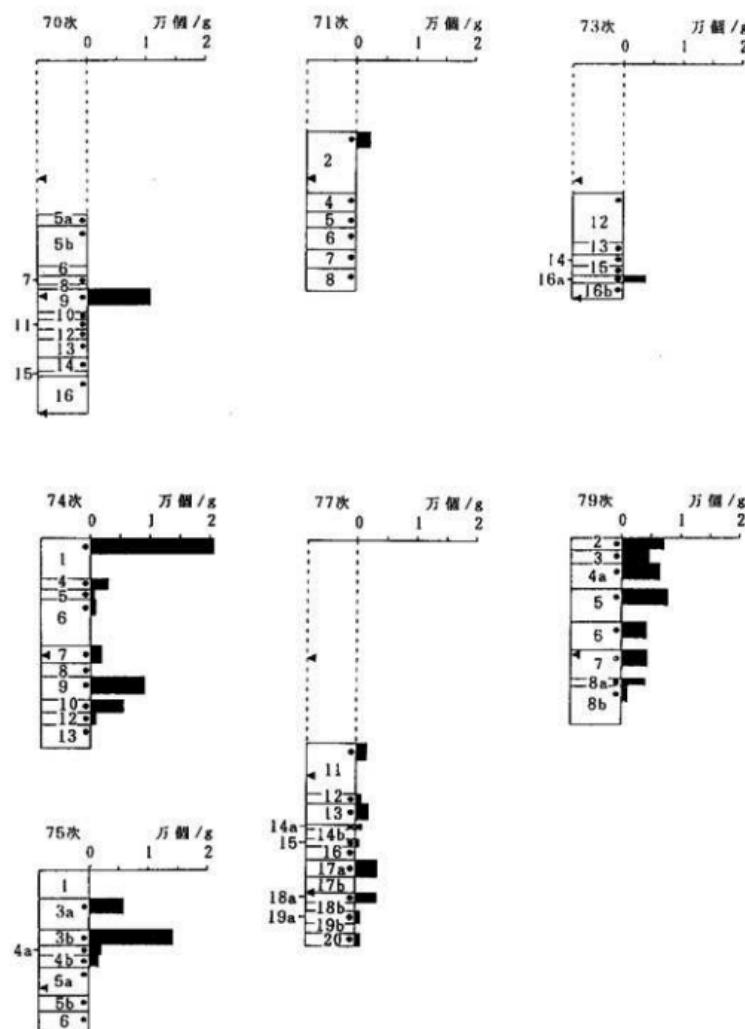


図2 イネのプラント・オバールの検出状況  
(注) ◀印は50cmごとのスケール。\*印は分析試料の採取箇所

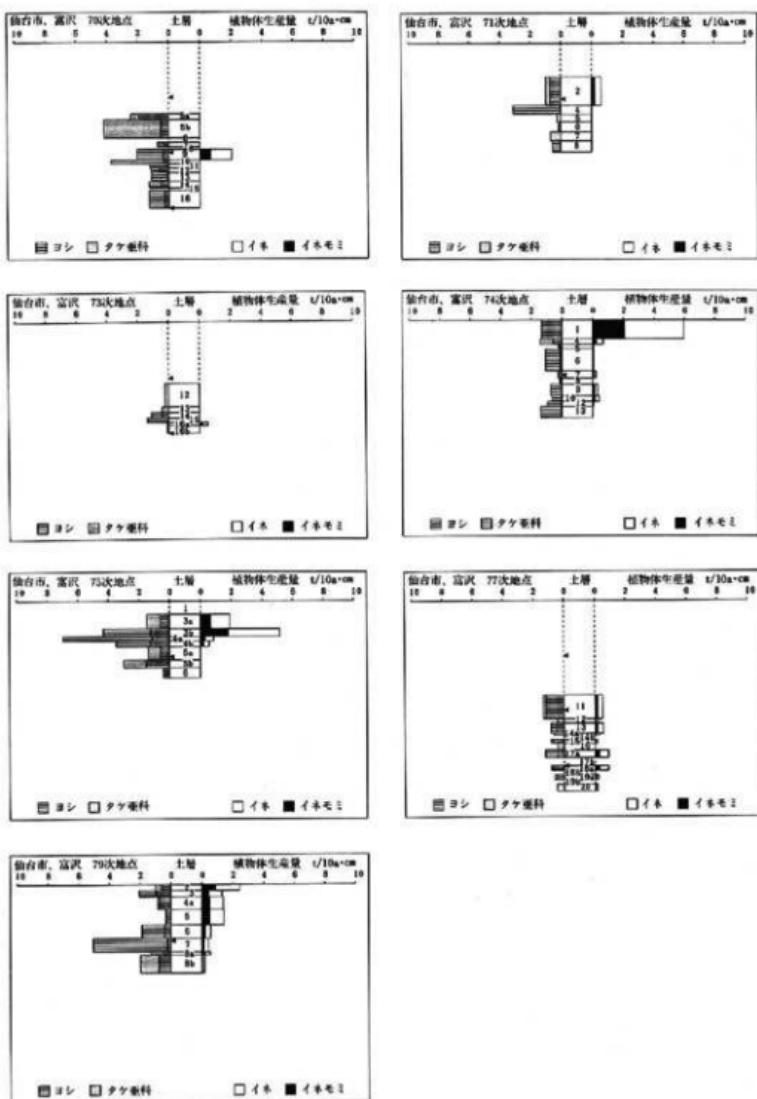


図3 おもな植物の推定生産量と変遷

(注) ◀印は50cmごとのスケール

## 第4章 まとめ

今年度は、富沢遺跡で10地点の調査が行われた。本書では、このうち8地点の調査成果の報告を行った。ここでは、各時代の検出された遺構、遺物の概要と、これまでの調査との関連性や今後の課題を述べておきたい。

### 1. 旧石器時代

・第74次調査で、後期旧石器時代の腐植層の調査が行われた。遺構や人工遺物、樹木や結果などの自然遺物は検出されなかったが、花粉分析では、その組成から基本層36～39層は第30次調査、第58次調査で検出された旧石器時代の層とはほぼ同時代の堆積物と考えられた。

### 2. 繩文時代

・第72次調査では、時期は明確でないが繩文時代の河川跡（S R 10・11）が検出されている。これらは、調査区周辺に展開している谷地形の形成と関連しているものと考えられ、調査区周辺の地形形成を把握するうえで、貴重な調査となった。

・第75次調査では、基本層7層・8層から早期末葉～前期初頭以降の遺物が出土している。この遺物包含層は、近接する第24次調査基本層XI層と対応する可能性がある。

### 3. 弥生時代

・第70次調査、第73次調査、第74次調査、第77次調査で水田跡が検出されている。各水田跡からは時期を決める遺物は出土していないが、これまでの調査成果からそれらの所属時期は以下のように考えられた。

樹形圓式期あるいはそれ以前 —— 70次 9層水田跡・77次19a層水田跡

樹形圓式期 ————— 73次16a層水田跡・74次12層水田跡・77次18a層水田跡

十三塚式期～樹形圓式期 ————— 77次17a層水田跡

十三塚式期 ————— 74次 7層水田跡

このうち、77次19a層水田跡は、15次調査12層水田跡に対応すると推定されるが、18a層水田の耕作による影響を受けており、明確な対応関係については今後の課題とされる。

・第70次調査9層水田跡から出土した石庖丁と大型板状安山岩製石器の使用痕分析が行われ、ともにシリカ含有量の高いイネ科植物などに対して機能したことが知られた。大型板状安山岩製石器については、今回が使用痕分析の2例目であり、以前の分析結果と同様、イネ科植物の

切断に使われたことが考えられ、石庖丁とは機能を異にし、「鎌」のような使われ方をした石製農具であると推定される。今後、実験による使用痕の形成過程の把握や、分析例を増やしていくことが必要とされよう。

#### 4. 古墳時代

・第76次調査、第77次調査で水田跡が検出されている。これらは、ともに15次7a層水田跡、35次15層水田跡に対応する古墳時代中期南小泉式期の水田跡であり、水田域の広がりが確認された。

#### 5. 平安時代

・第74次調査、第75次調査、第79次調査で水田跡が検出されている。なかでも79次調査地点は富沢遺跡の北端部にあたり、平安時代の水田域の広がりを示している。

#### 6. 中世・近世

・第77次調査で15世紀～17世紀初頭の居住域が確認されている。周辺での調査成果から、この時期の生産域と居住域の関係が明らかにされるとともに、今回の調査では、貯蔵施設と推定される竪穴造構が3基検出され、そのうち1基（SII1）からはコメ、種子、繩や木筒、鳥帽子の可能性のある漆製品が出土するなど、貴重な成果となった。

高沢遺跡第70次調査

層化・通路	東老表	かわ ら片	南 西	北 東	春	瓦	石	漆	油刷品	木刷品	杭	樺 子	材
3層						1							
9層・10層							2						1
10層								1	1			1	
16層													1
SD-1	1	1	16	24	1			2	1				
SD-3				2									26
SX-4				1	1								
屋根+明					6	3			2			2	
計	1	1	19	39	1	7	3	3	26	4		1	

富沢道助第71次調查

部位・通路	側面部	肉 部	土 質 土 體
I層	1	3	1
II層	1	3	1

宣次遺跡第72次調查

種姓・階級	純文 土器
SR 4	3
SR10	2
15b層	1
19層	2
混亂	7
計	15

宮沢道跡第73次調査

層化・進路	土壌物 ( $\mu\text{g/g}$ )	本 土 源	生態源 ?	鷺 鷺	斑 鳩	石 鶴	木 鶴	私
1層				1	1			
2層		1		1				
4層			1					
5層	1	1						
6層		3						
7層水辺跡						1		
16層							1	5
計	1	5	1	2	3	3	1	5

第10章 路由器与交换机

別位・性別	馬力	土壤層 (cm)	馬鹿苔	陶器	鐵器	石器
1男				1		1
2母			1	4	7	
3母		8	1	1		
3♂母		24	1			
3母		1				
7母	37					
8母	2					
馬鹿	4		1			
鐵器				1	2	
計	43	34		6	6	1

宣況遺跡第74次調查

富沢遺跡第77次調査

部位・遺構	土	耕	部	土器	陶	瓦	瓦	瓦	瓦	石	器	石製品	陶製品	木製品	骨	焼	灰	器
	(アマ)																	
1層	1									5	2	1	1					
2層			1		1					20	33	1	1	1	1			
3層	1	1			1					1	11	1	3	3	3	9		
4層	4	3	1		4	2				5	3	3	1	1				
5層	12	4			1					4		1						
6層	2	4			3	1				1		5						
7層	2				1										1			
8層					1										1			
10層		1													1			
13層																		
SD 1	1																	1
SD 2	1	1																1
SD 4	3	6			1					11	2	1	13					
SI 1			1							3			17		7	多數	多數	1
SI 2																		
SI 3	1	2			1	1				11		4	12			多數		
SK 4												1						
SK 2												1						
層位不明										1	23	15	15	2				
計	25	23	2	1	12	3	2	2	26	27	1	1	64	1	3	23	1	9
															多數	多數	1	

富沢遺跡第79次調査

部位・遺構	土	耕	部	赤	燒	器	漆	器	木	漆	木	材	木	材	木	材	子
	(アマ)																
1層																	
2層	1	1	3	1	1												
3層			3	2													
4層																	
5層 水田跡		2	4													1	
6層 水田跡	1	2							1	33	113	9	4				
計	1	2	10	7	1	1	1	1	33	113	9	5					

-引用文献-

- 入間田・豊田・遠藤 1970 「東北地方における北条氏の所領」『日本文化研究所報告』別巻第7集
- 入間田宣夫 1978 「鎌倉幕府と奥羽両国」『中世奥羽の世界』
- 太田昭夫他 1991 『富沢遺跡第30次調査報告書I 分冊(縄文~近世編)』仙台市文化財調査報告書第149集
- 恵美・大友他 1990 『名取市高船川上遺跡』名取市文化財調査報告書第25集
- 梶原・阿子島 1981 「真岩製石器の実験使用痕研究~ボリッシュを中心とした機能推定の試み~」  
〔東北大学使用痕研究チームによる研究報告その2〕『考古学報誌』第67巻第1号
- 加藤・阿部 1980 『東北新幹線関係遺跡調査報告書N』~鏡音沢遺跡~第72集 宮城県教育委員会
- 工藤哲司他 1984 『富沢水田遺跡I』仙台市文化財調査報告書第67集
- 工藤哲司他 1988 『富沢遺跡第24次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第113集
- 工藤哲司・荒井格 1990 『仙台市中在家南遺跡出土ノ木製品』考古学ジャーナル第323号
- 斎野裕志能 1987 『富沢遺跡第15次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第98集
- 佐藤甲二 1988 『富沢遺跡第28次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第114集
- 佐藤洋 1991 『富沢遺跡第57次調査報告書』『富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)』仙台市文化財調査報告書第152集
- 佐藤洋 1983 『今泉城跡』仙台市文化財調査報告書第58集
- 主浜光朝 1988 『泉崎浦遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第119集
- 須藤隆 1984 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究!』-考古学篇-
- 須藤・阿子島 1984 「4. 富沢水田遺跡泉崎地区出土石庖丁」『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査概報-III』  
仙台市文化財調査報告書第67集
- 仙台農耕文化勉強会 1990 「水田跡の基本的理解~仙台における水田跡の検出と認定」『第3回東日本の水田跡を考える会~資料集』東日本の水田跡を考える会
- 芹沢長介編 1979 『熊山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2
- 芹沢・梶原・阿子島 1981 「実験使用痕研究とその可能性(東北大学使用痕研究チームによる研究報告その4)」  
『考古学と自然科学』第14号
- 田中剛和 1984 『山口遺跡II』仙台市文化財調査報告書第61集
- 東北歴史資料館 1983 『東北の中世陶器』
- 中富洋 1991 『山口遺跡第10次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第151集
- 平間亮輔他 1985 『松並平遺跡』福島県白河建設事務所 福島県棚倉町教育委員会
- 平間亮輔 1988 「平安時代の条里型土地割について」『日本における稻作農耕の起源と展開』日本考古学協会設立  
40周年記念シンポジウム資料集
- 平間亮輔 1989 『富沢遺跡第35次調査報告書』仙台市文化財調査報告書第150集
- 藤原・杉山 1984 「プラント・オーバール分析法の基礎的研究(5)~プラント・オーバール分析による水田址の探査~」  
『考古学と自然科学』第17号
- 岡村道雄他 1984 『里浜貝塚III』 東北歴史資料館資料集9
- 山田しょう 1986 「使用痕研究の現状と針跡」『歴史』第67輯
- 吉岡・藤原 1989 『富沢遺跡・泉崎浦遺跡~仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書!』仙台市文化財報告書第126集
- Keeley, L.H. 1980 Experimental Determination of Stone Tool Uses:A Microwear Analysis. Univ. of Chicago Press.

### 発報調査参加者



# 写 真 図 版



写真1  
9層水田跡大畦断面

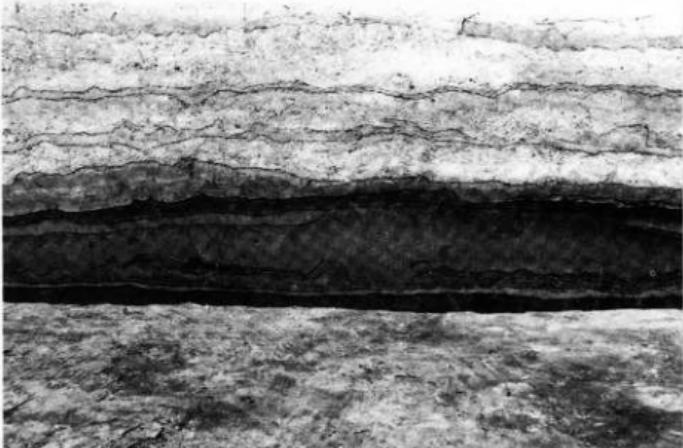


写真2  
9層水田跡検出状況

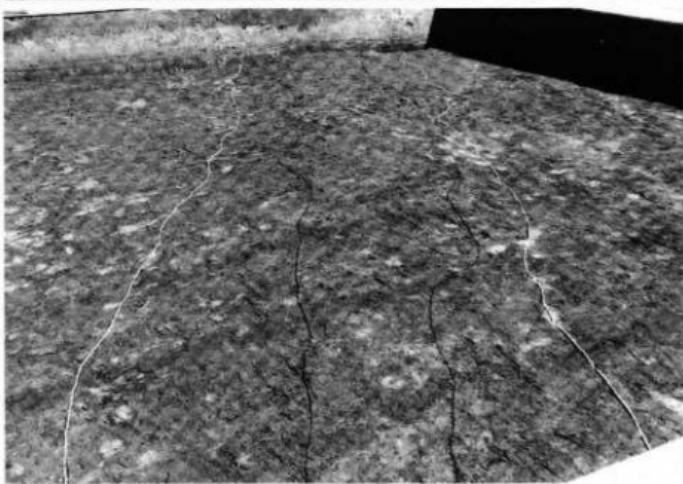


写真3  
15層溝状遺跡検出状況

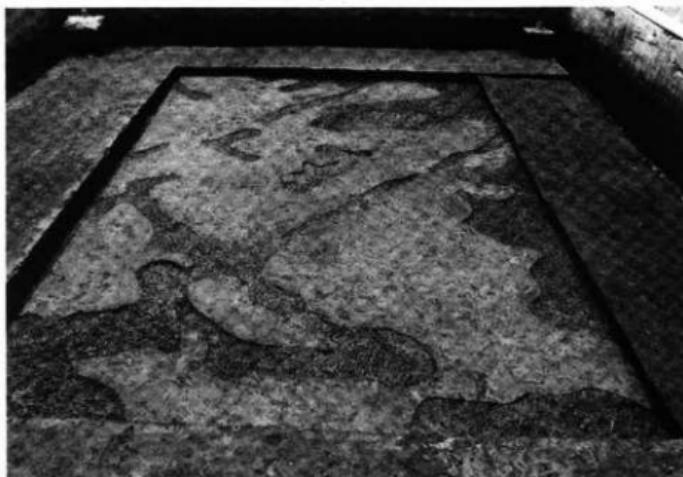
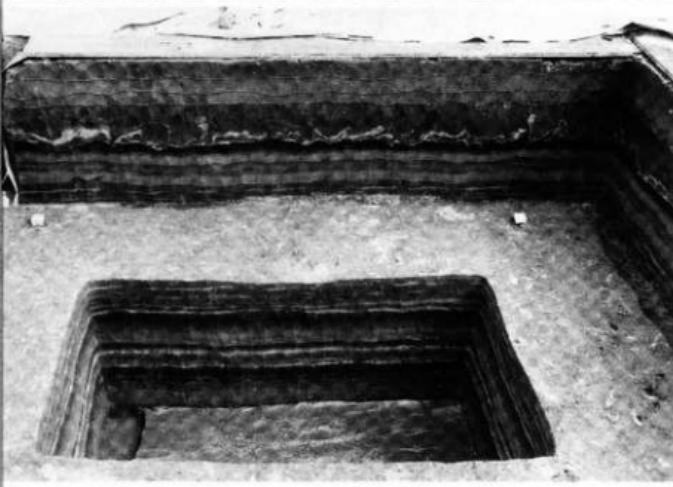




写真4  
石唐丁出土状況



富沢遺跡第71次調査



富沢遺跡第72次調査

写真6  
1号河川路（足跡）  
検出状況

写真7  
10号河川跡  
樹木検出状況



写真8  
調査区東壁断面



写真9  
調査全景



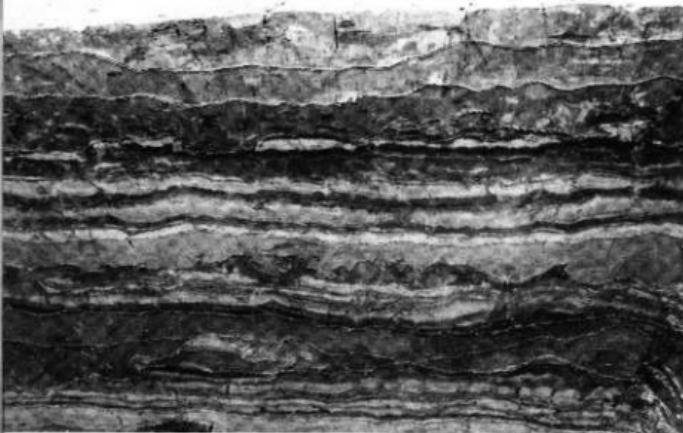


写真10  
土層断面



写真11  
7層水田跡検出状況



写真12  
杭断面

写真13  
木製農具出土状況



富沢遺跡第74次調査

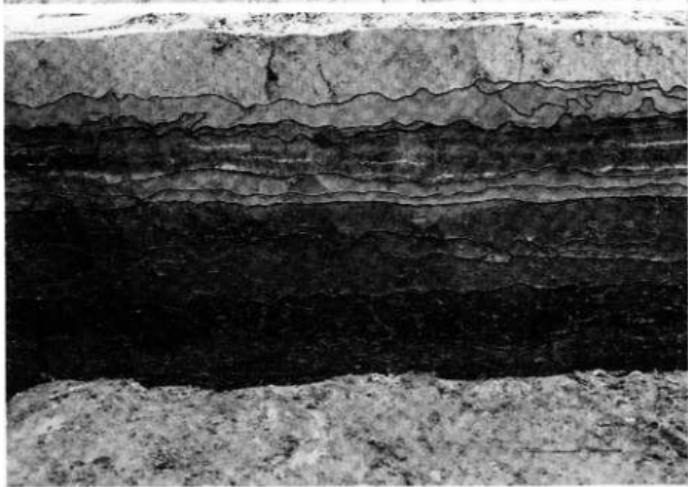


写真14  
基本層序  
(南壁東端部)

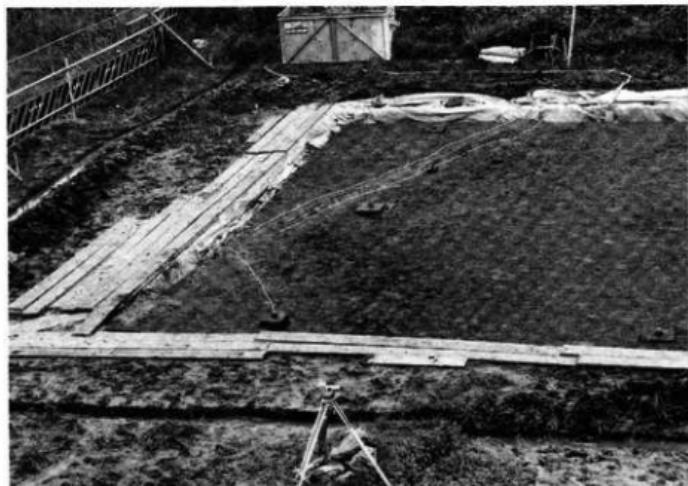


写真15  
4層水田跡検出状況  
(西部、畦畔No.2・  
3、南より)

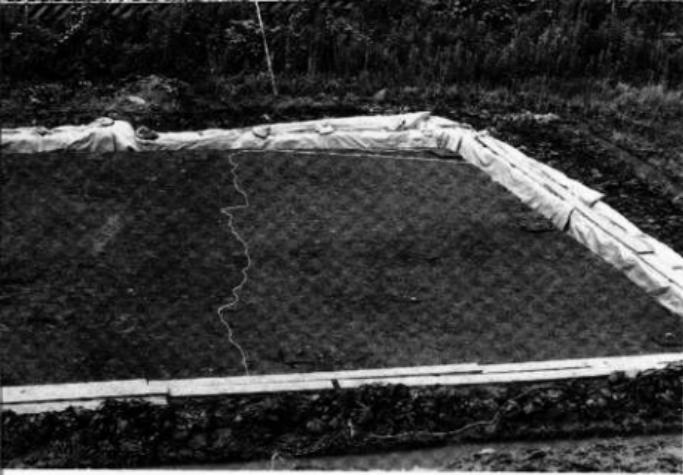


写真16  
5層水田跡確認状況  
(東部、畦畔No.3・  
4、南より)

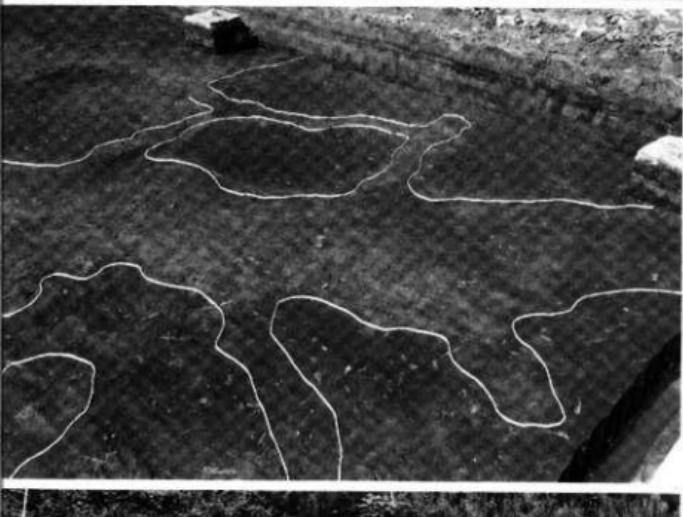


写真17  
10層上面確認状況  
(南東部、南西より)

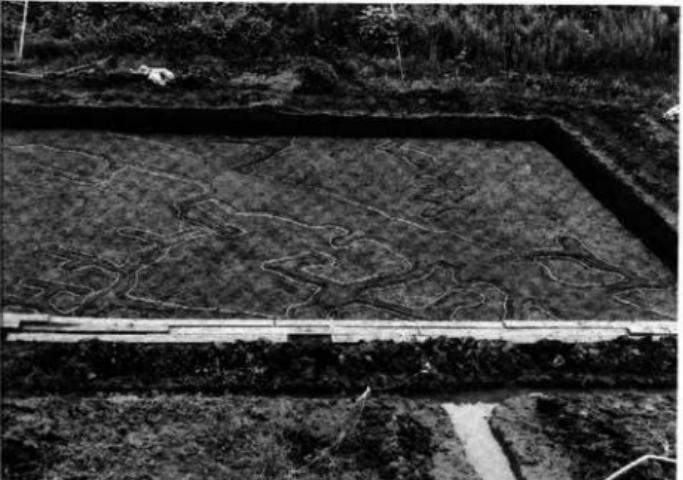
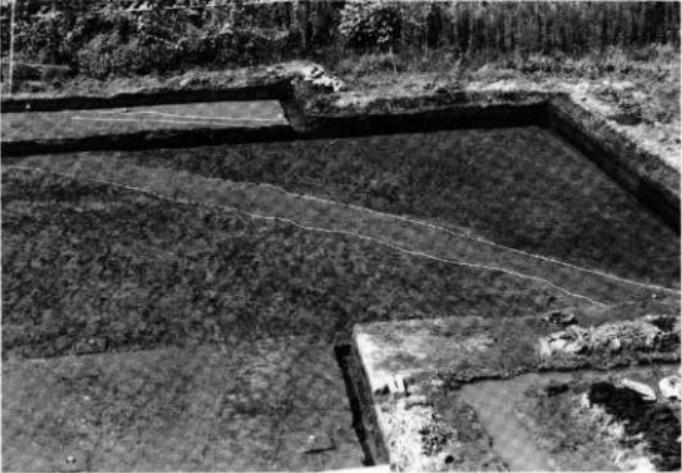


写真18  
10層上面検出状況  
(南より)

写真19  
12層水田跡確認状況  
(南から、奥は4層)  
水田跡  
(手前は5層水田跡)  
検出状況



富沢遺跡第75次調査



写真20  
基本層序

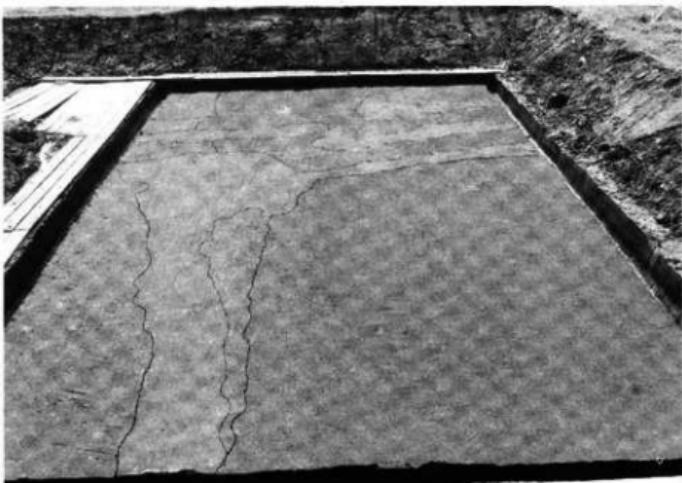


写真21  
3 b 層  
擬似鯨骨検出状況



写真22  
調査区全景

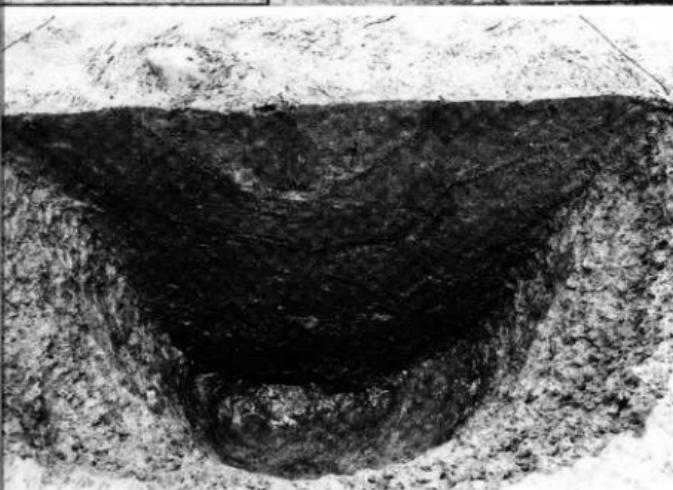


写真23  
SK 2断面  
(西より)

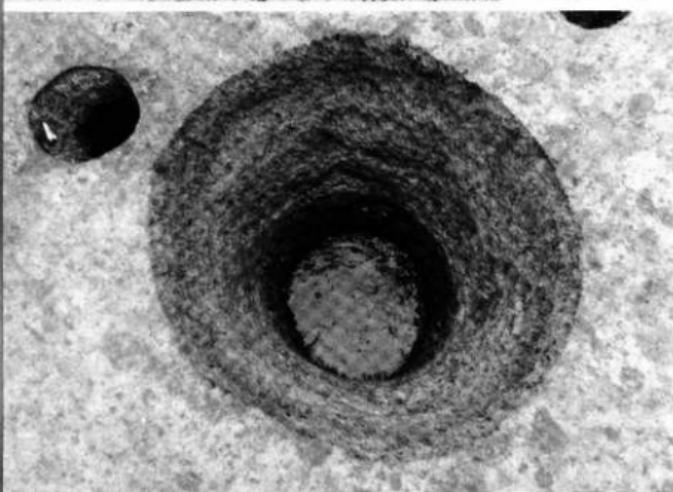


写真24  
SK 2 完掘全景

写真25  
SD 4 完掘全景  
(東より)



写真26  
SD 2 完掘全景  
(東より)





写真27  
S D 4 漢物出土状況



写真28  
南区 S I 1・S I 2  
確認状況

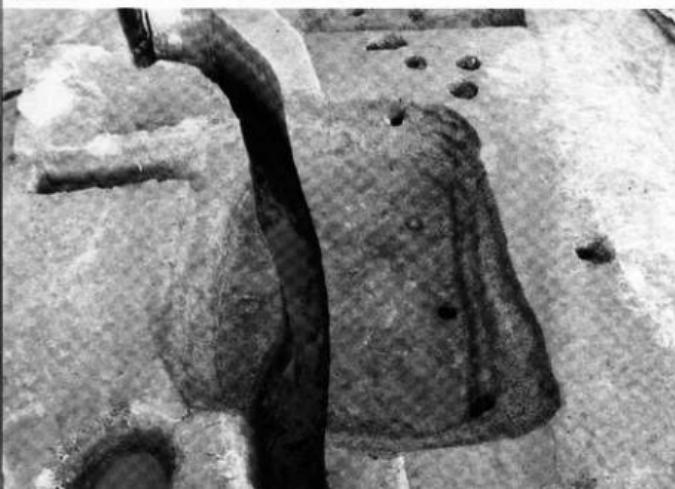


写真29  
S I 1 完掘全景  
(西より)

写真30  
S I 2 完掘全景  
(東より)

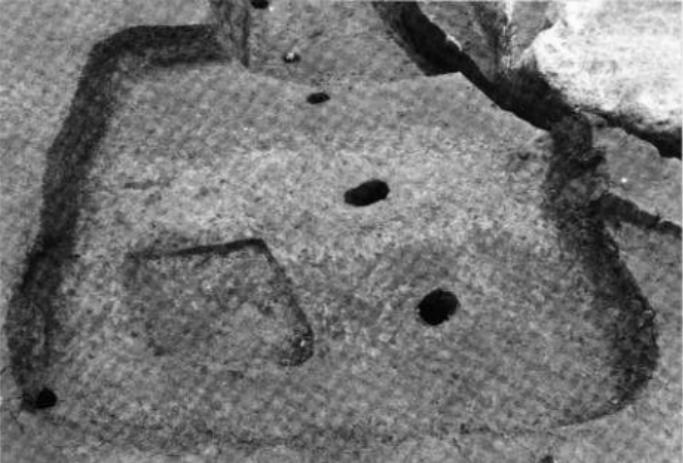


写真31  
S I 1 遺物出土状況

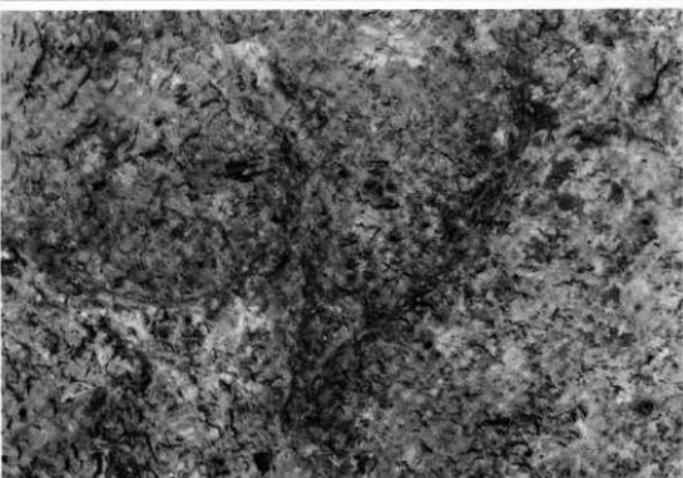


写真32  
S I 1 木簡出土状況

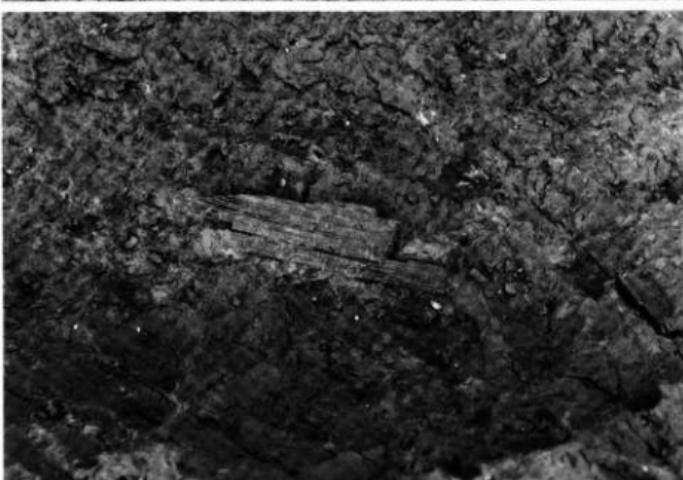




写真33  
S I 3断面  
(北より)



写真34  
S I 3遺物出土状況  
(北より)



写真35  
S K 5確認状況  
(南より)

写真36  
西区10層水田跡  
(西より)

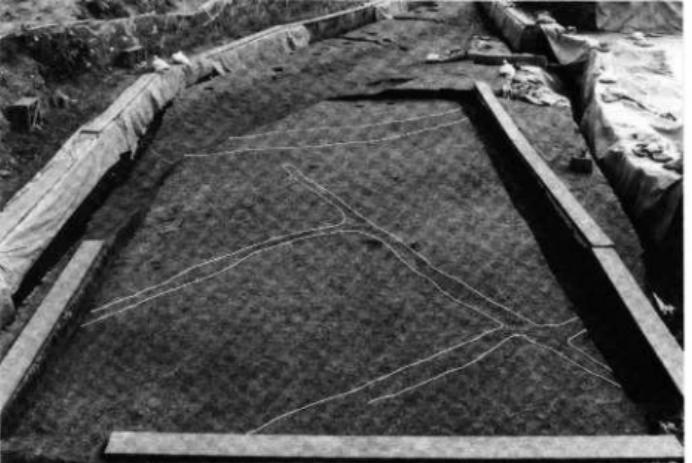


写真37  
東区10層水田跡  
(西より)

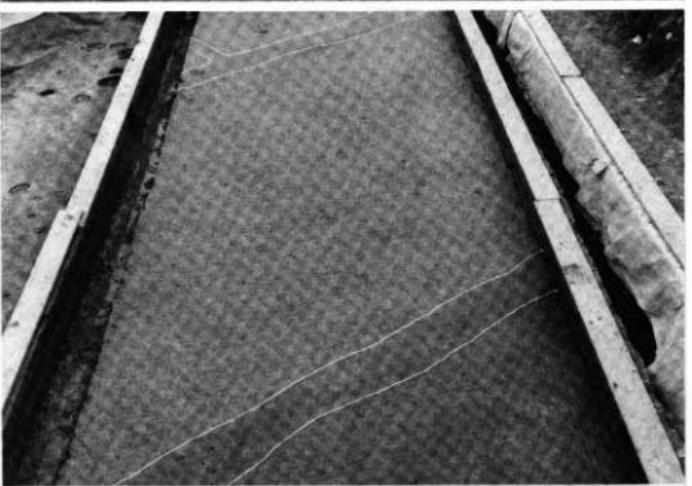


写真38  
東区17a層水田跡  
(東より)





写真39  
東区18a層畦畔・  
17a層擬似畦畔B  
(西より)



写真40  
東区19a層水田跡  
(西より)



富沢遺跡第79次調査

写真41  
調査風景 (西より)

写真42  
5層水田跡  
(北より)

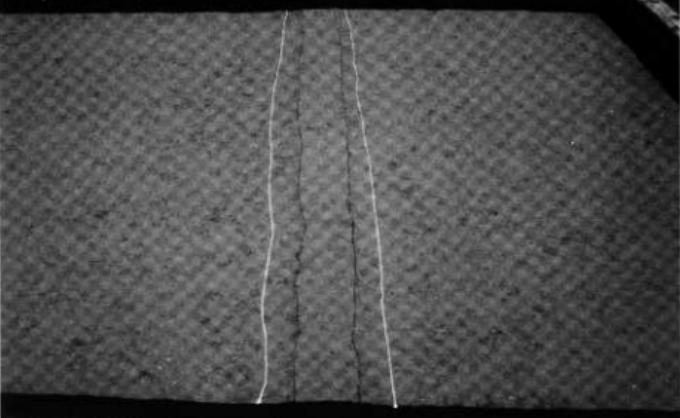


写真43  
6層水田跡  
(北より)

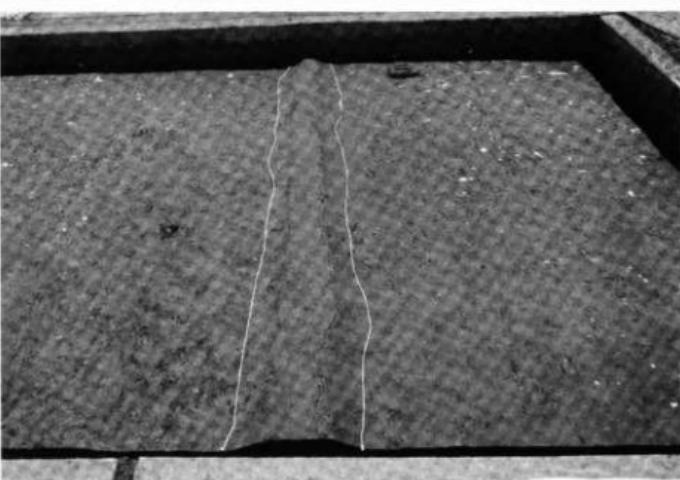


写真44  
6層水田跡木材群  
(東より)



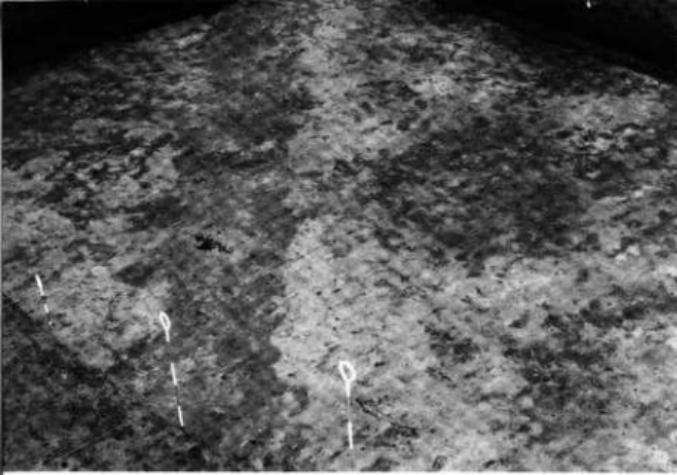


写真45  
8 a層水田跡  
確認状況(北東より)

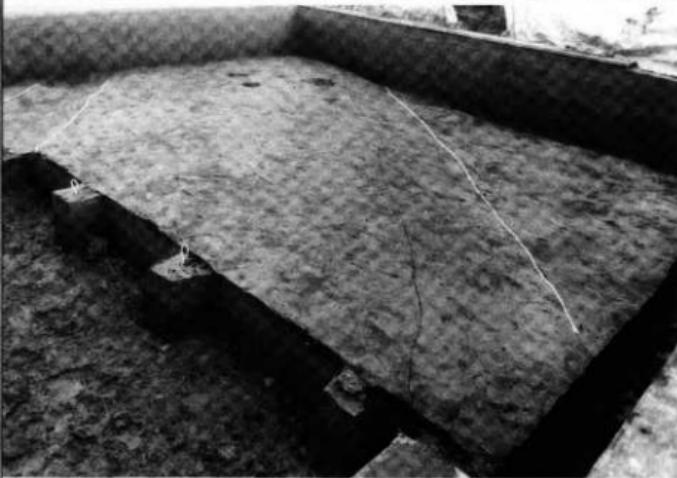
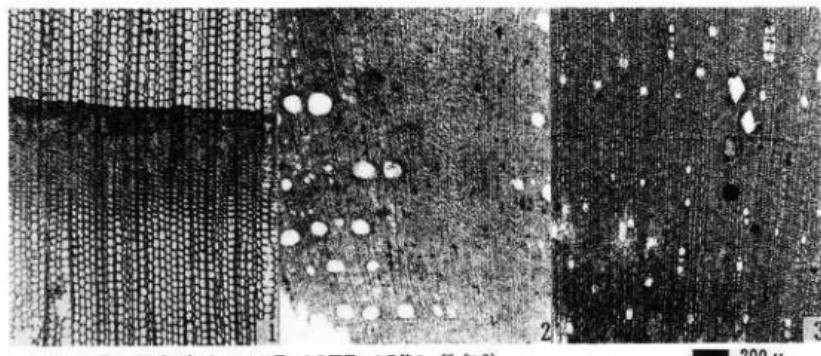


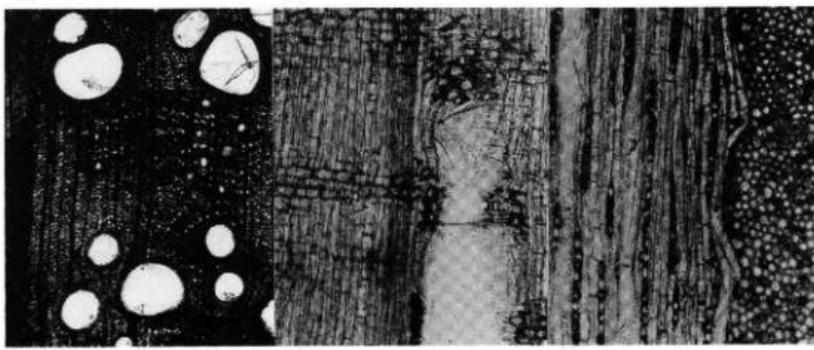
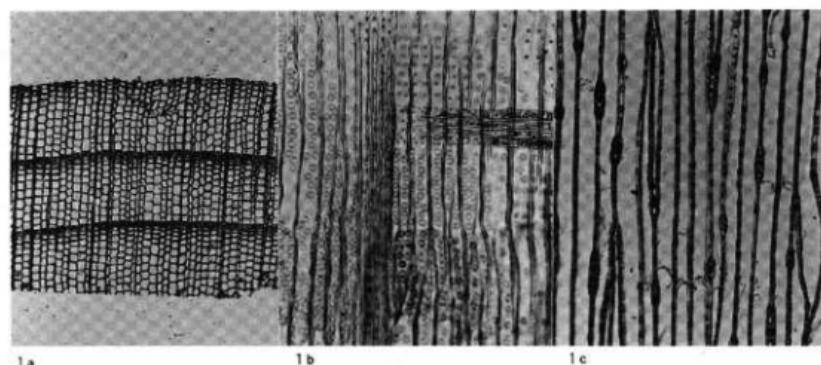
写真46  
8 a層水田跡東半部  
(南西より)



1. モミ属の一様 (No.1)、2. コナラ属コナラ亜属コナラ節の一様 (No.3)

3. シラキ (No.11) (写真はすべて木口面)

写真47 材の顕微鏡写真(1) パリノサヴェイ株式会社



1. No.5 木蘭、イヌガキ、2. No.4 錫コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一様

a:木口×40 b:板目×100 c:板目×100 樹木の肥大生長方向は木口では

画面下から上、板目では左から右

写真48 材の顕微鏡写真(2) 高橋利彦

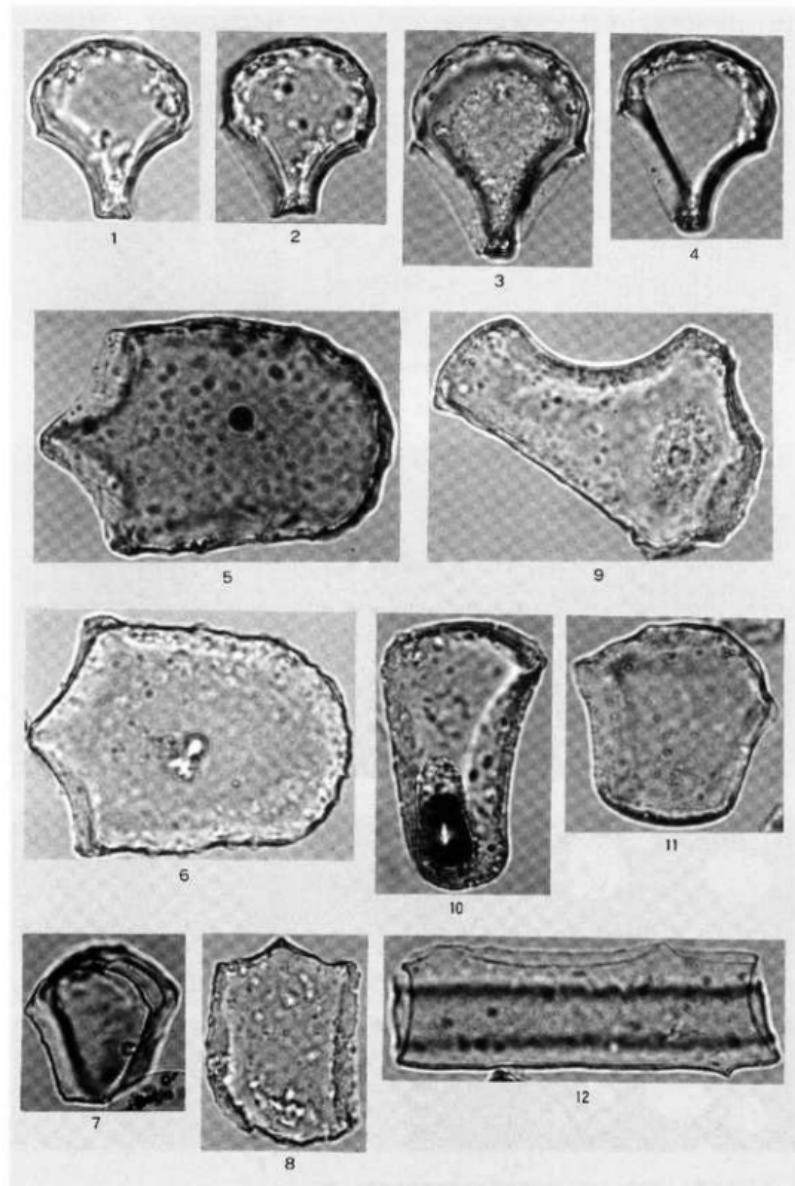


写真49 プラント・オパール顕微鏡写真

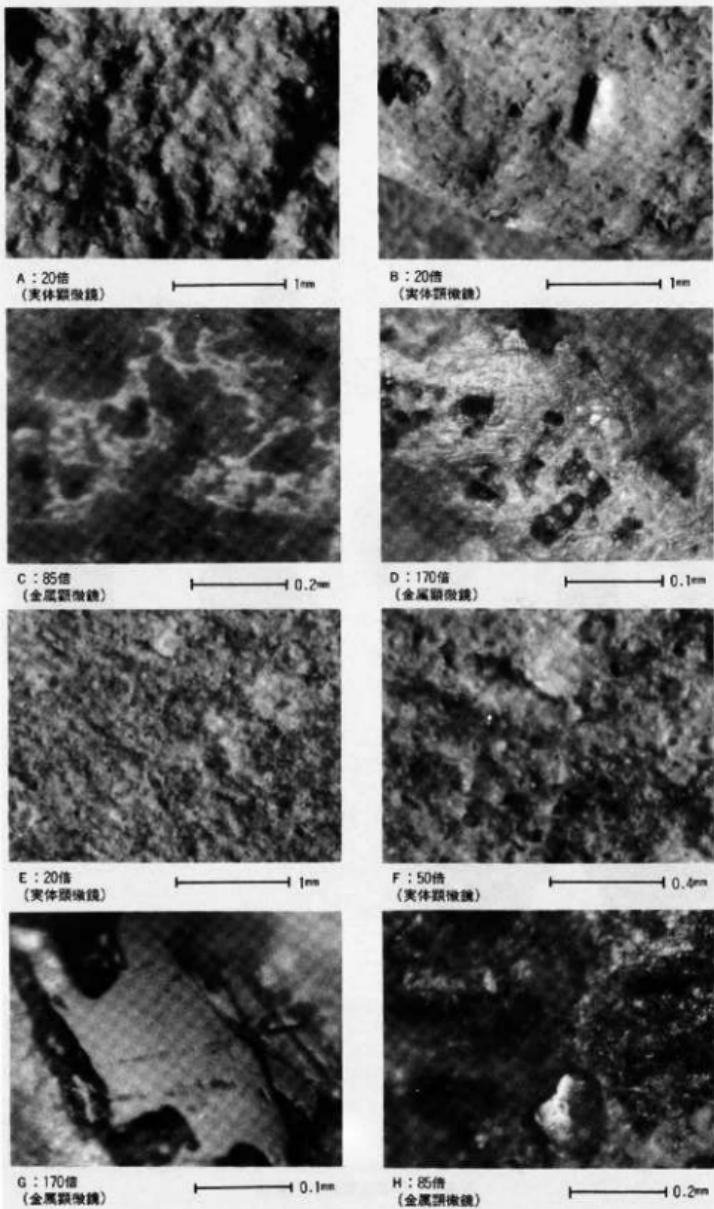


写真50 石器表面及び光沢面の顕微鏡写真

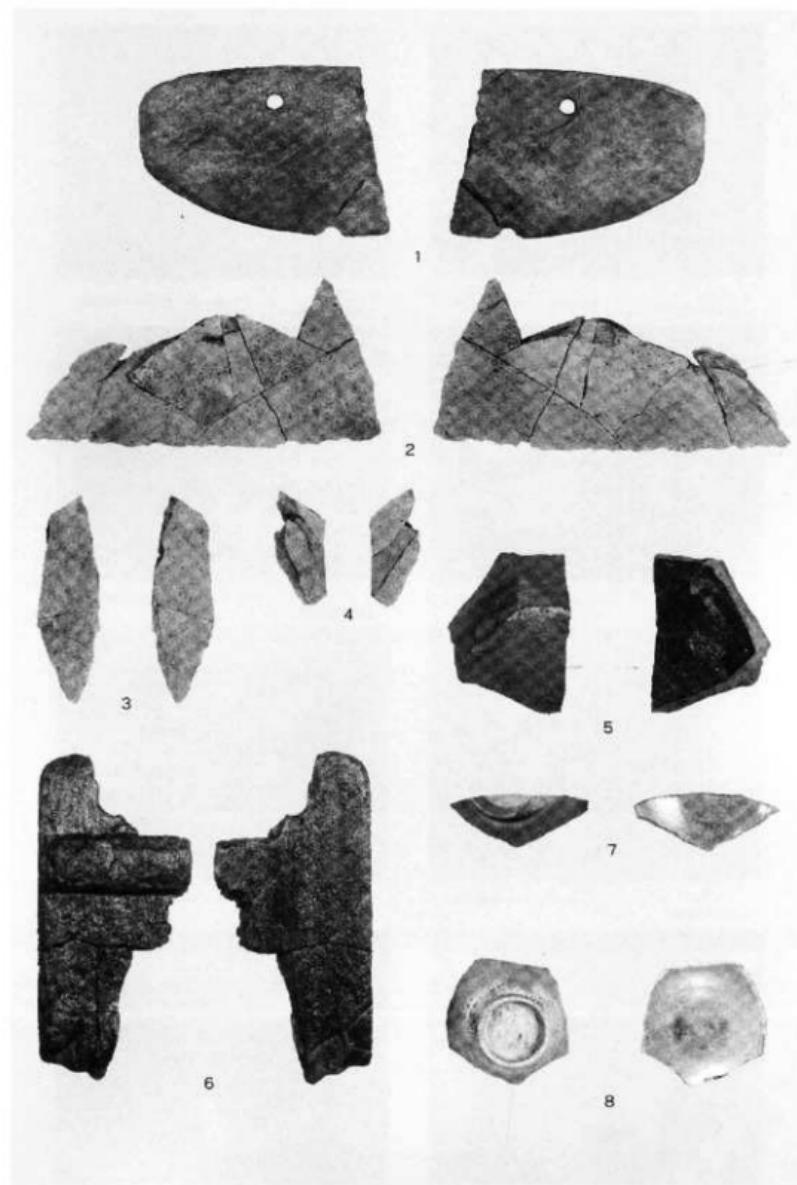
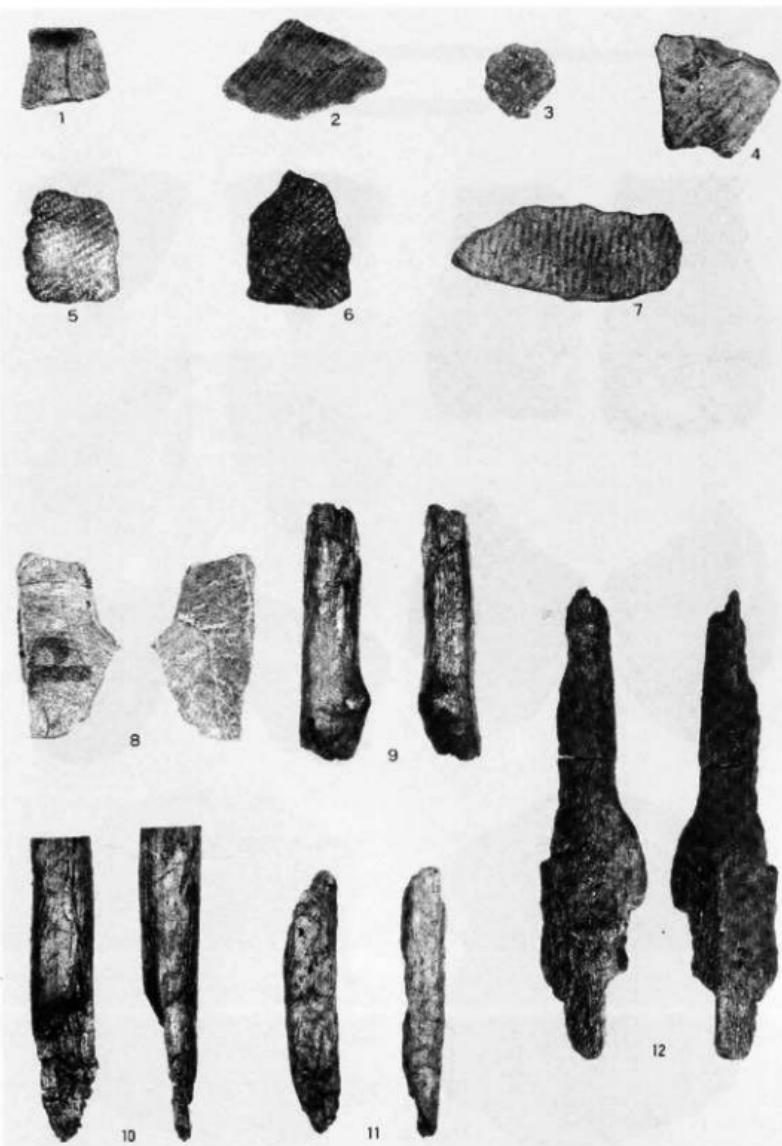


写真51 第70次調査出土遺物



1~7: 第72次調査、8~12: 第73次調査

写真52 第72次・第73次調査出土遺物

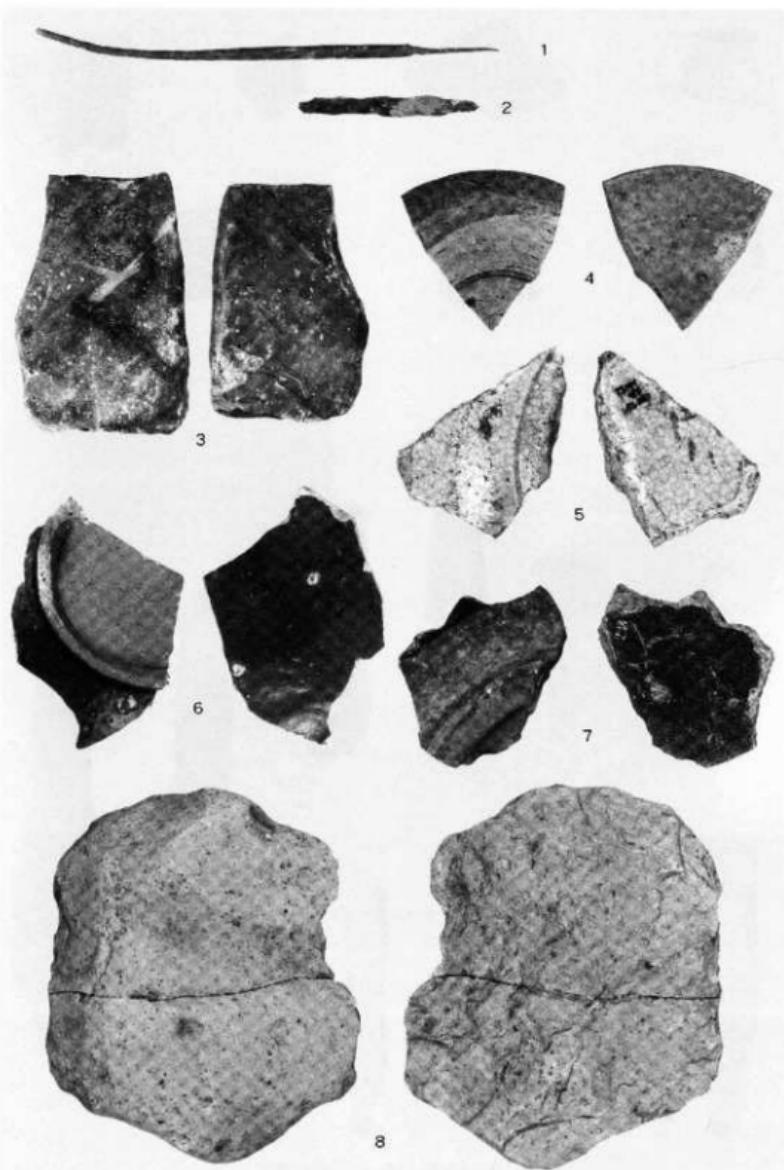


写真53 第74次調査出土遺物

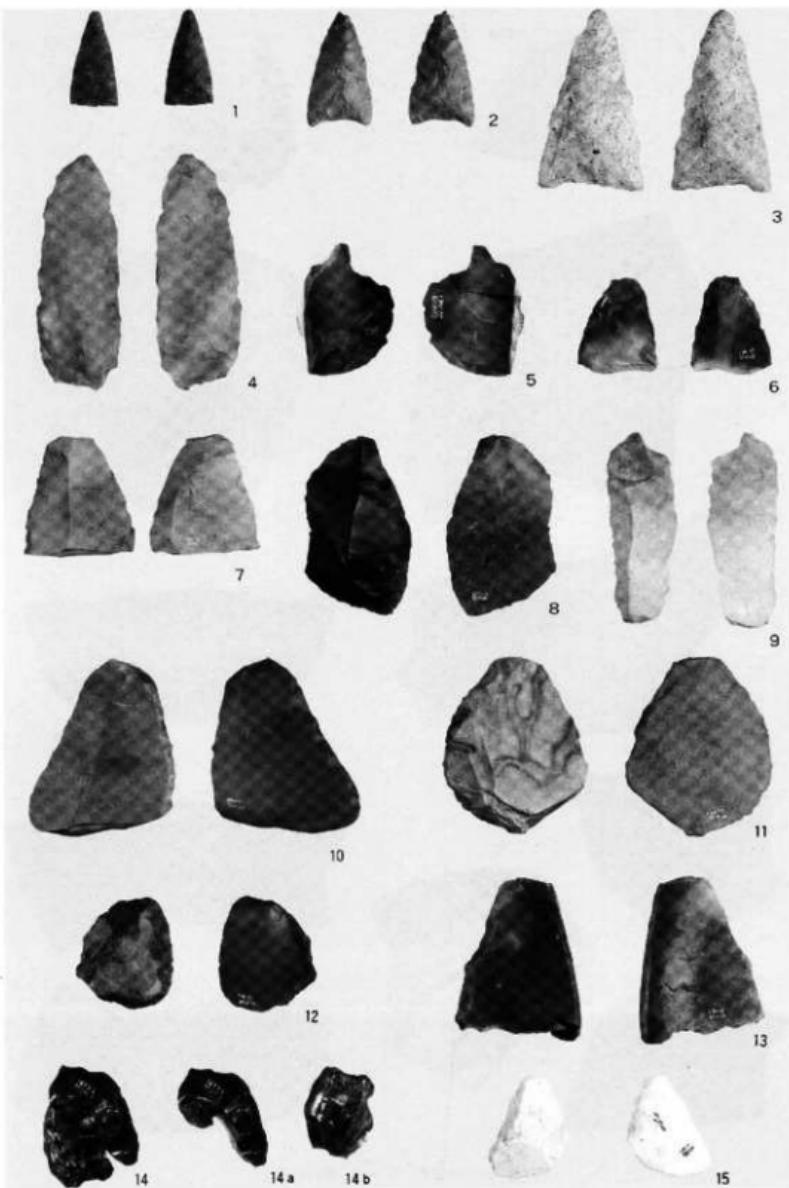
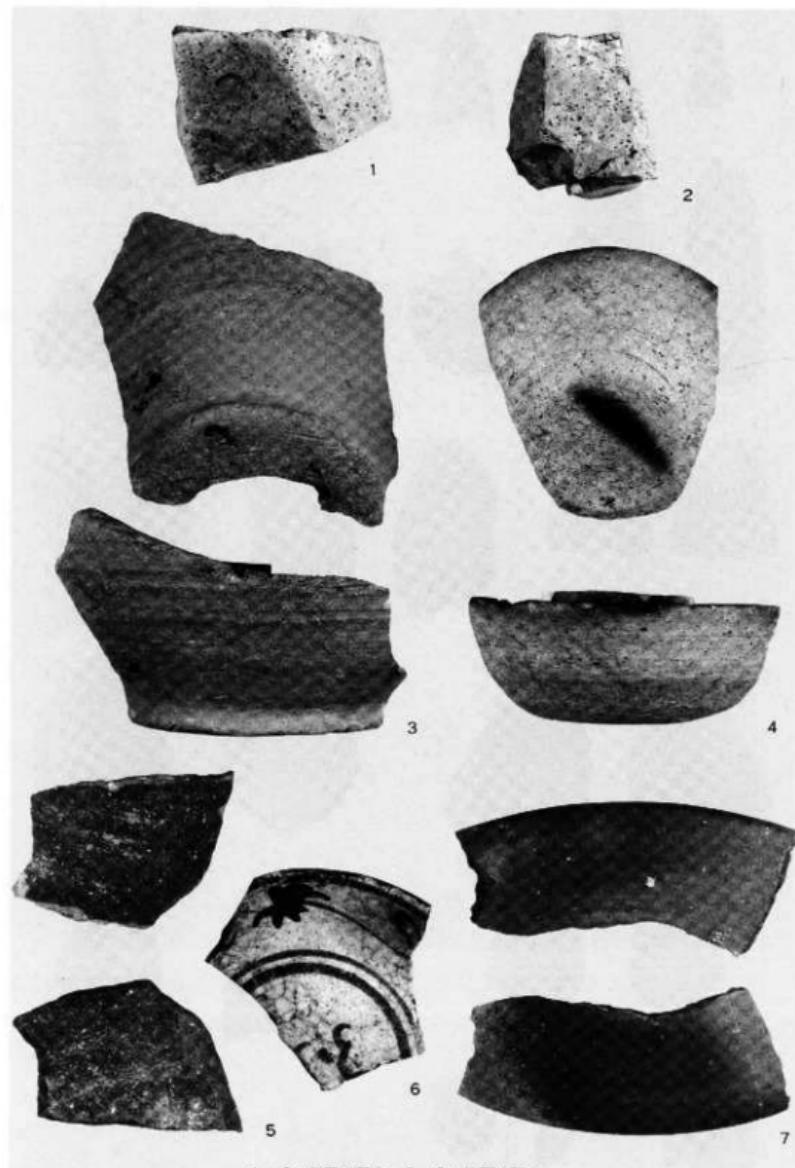


写真54 第75次調査出土遺物(1)



1・2：第75次調査 3-9：第77次調査

写真55 第75次調査出土遺物(2) 第77次調査出土遺物(1)

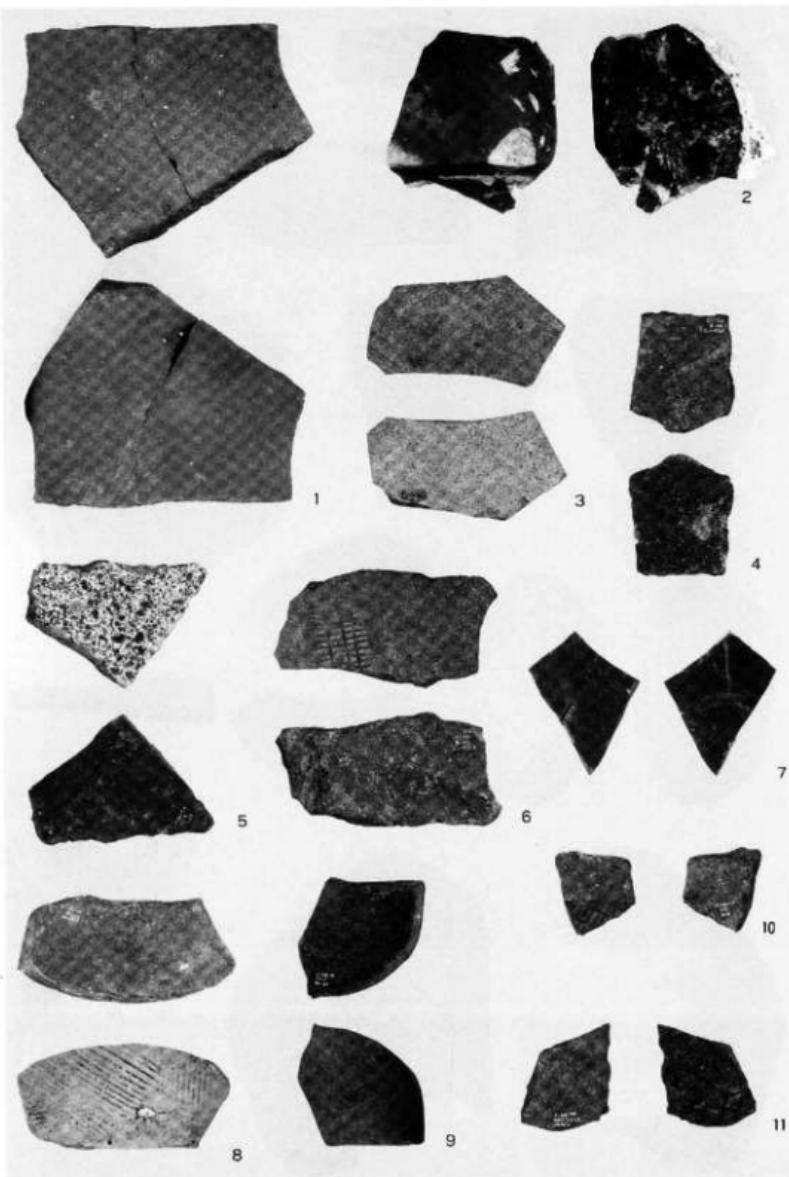


写真56 第77次調査出土遺物(2)

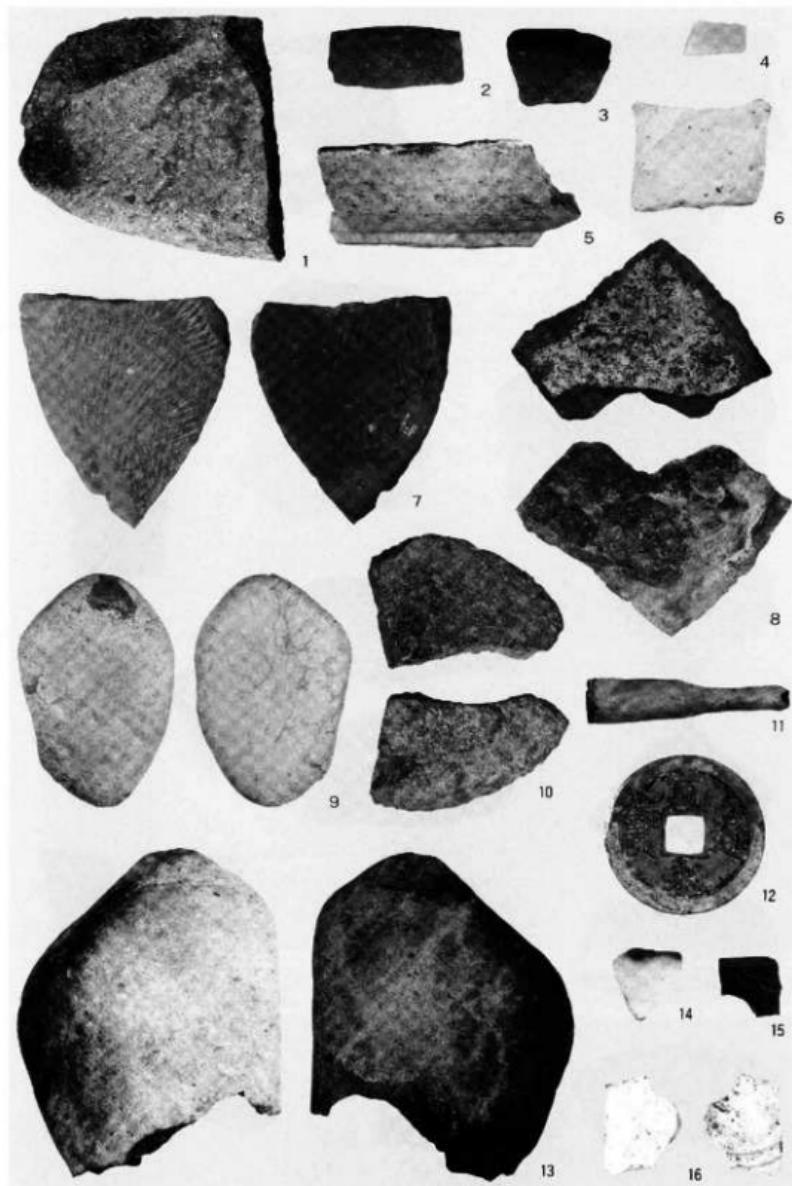


写真57 第77次調査出土遺物(3)

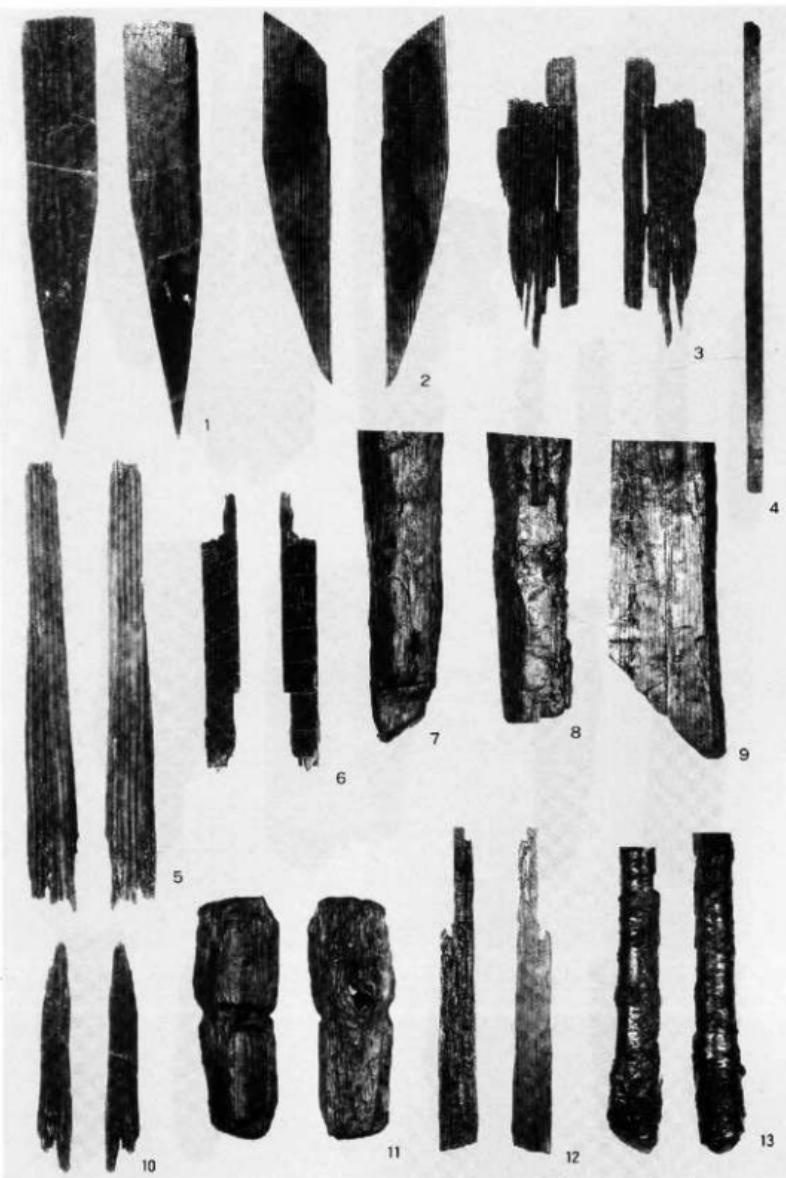


写真58 第77次調査出土遺物(4)

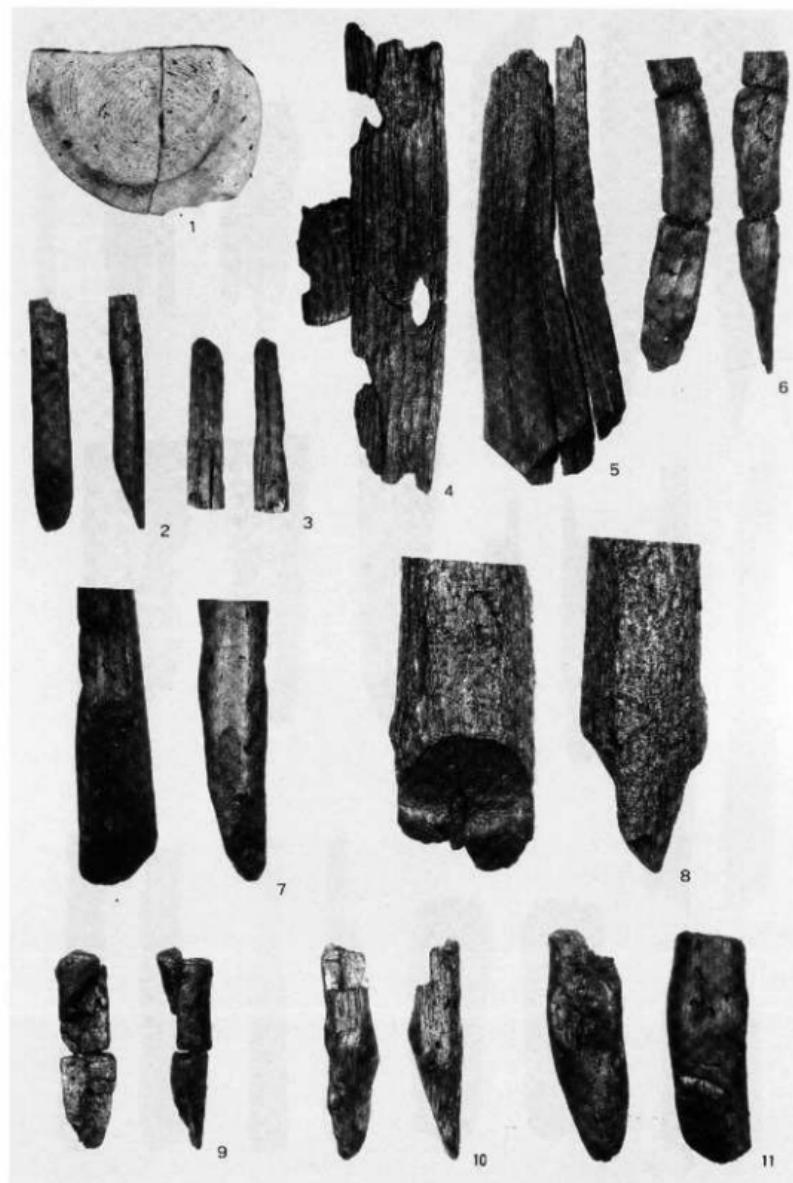


写真59 第79次調査出土遺物

# 下ノ内遺跡

—第5次発掘調査報告書—

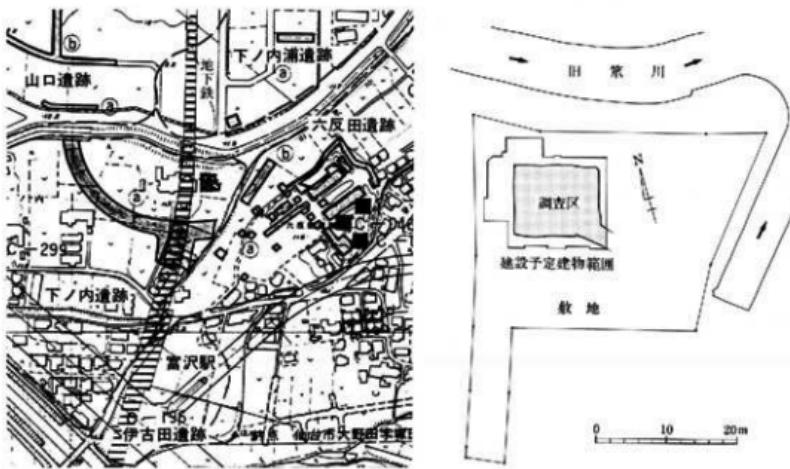
## 下ノ内遺跡第5次（5区）調査

### 1. 調査要項

遺跡名 下ノ内遺跡  
調査名 下ノ内遺跡第5次（5区）調査  
調査地点 仙台市太白区富沢字下ノ内27-7  
調査原因 高層住宅建設にかかる土木工事  
対象面積 約168m<sup>2</sup>  
調査面積 約120m<sup>2</sup>  
調査期間 平成3年4月16日～4月30日

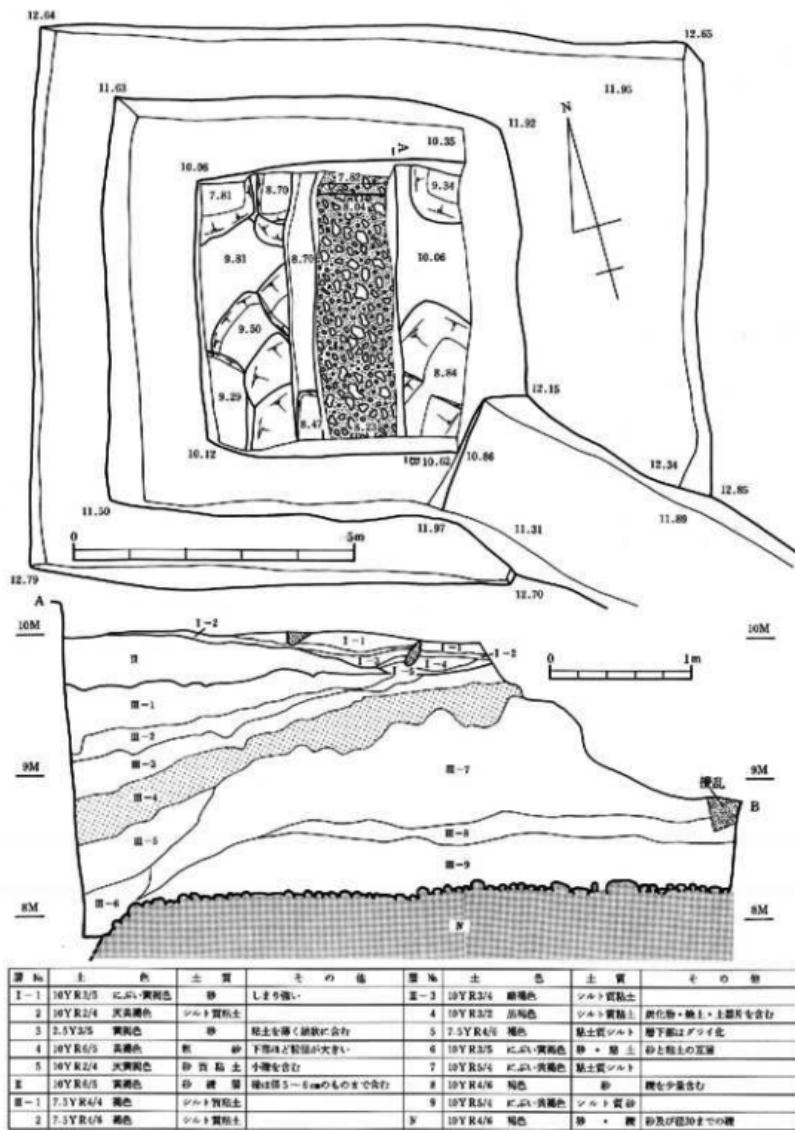
### 2. 調査方法

調査区は建築予定地内に東西約12m・南北約10mの範囲に設定し、表土はバックホーによって除去した（第1図）。過去の調査データによると当該地区の表土層は1m以内であるが、本地区においては、重機による著しい掘削が行なわれており、この攪乱が地表面より2.6mに達していた。このため、調査区の壁面は3段の階段を要し、非攪乱部上面での実調査面積は約25m<sup>2</sup>となった（第2図上）。



第1図 調査区位置図・設定図

## 下ノ内湖附近第5次(5区)調査



第2図 調査区平・断面図

非擾乱部上面でも、なお多くの擾乱坑が検出されたが、これについては完掘し、残存部各面の精査を実施した。精査により遺構は検出されなかった（写真2）。

擾乱の状況から、弥生時代以降の地層は完全に破壊されているものと判断されたが、縄文時代の遺構及び遺物包含層の存在を確認するために、残存部を東西1.5mの幅で、この地域の基盤となっている礫層まで徐々に堀下げた（第2図、写真3・4）。この調査の結果、Ⅲ-4層より縄文土器数点が出土した。Ⅲ-4層の土器の含有量は極めて稀薄であり、調査区も狭くなっていたので拡張は行なわず、この状態の実測を行なって調査を終了した。

調査区の平面実測は、任意の2点を原点として1/50の平板実測を行なった。現況地形図との合成は、平板実測の2点の原点とともに、敷地境界杭4点を1/100で平板実測して行なった。北は磁北で示した。

### 3. 基本層序



第3図 下ノ内遺跡の基本層位

本調査においては、地表面より深さ2.6mまで完全に擾乱されており、地表からの基盤礫層までの完全な土層の把握はできなかったが、下部堆積層は大別4層・細別16層に分けられた（第2図下）。

I層は砂及び粘土を主体とする水成堆積層で、5層に分けられた。

II層は直径が5~6cmまでの大小の礫を主体とし、これに若干の粗砂を含む層である。この層は、粒子の大小に規則的な変化があり、その層理面は北から南に下がって傾斜し

ているのが観察できる。この層も水成層と考えられる。

Ⅲ層はシルト質粘土及び粘土質シルトを主体とし、一部砂の層を挟む。Ⅲ-9～7層の段階では比較的水平に堆積しているが、Ⅲ-6～1層の段階は北側に向かって厚くかつ下がった状態で堆積しており、河川のような凹地の肩口の堆積状態を示している。Ⅲ-4層から縄文土器片が7点出土している。

Ⅳ層は基盤と考えられる砂礫層である。礫は直徑数cmから30cm程のものまであるが、大形のものが目立つ。Ⅳ層の上面は南側から北側に向かって緩やかに下がっている。また調査区の北端には、傾斜面が形成されているが、これはⅢ-1～6層の傾斜と一致し、河川による浸蝕の可能性が考えられる。

下ノ内遺跡は、仙台市高速鉄道（地下鉄）建設工事に關係し、昭和56～59年にI区から4区までの調査が、仙台市教育委員会によって行なわれ、14層からなる基本層序と、遺構・遺物の検出層が明らかにされている（第3図）。この調査における基本層序に、今回の調査区の十層を対応させると、Ⅳ層の砂礫層は14層に、Ⅲ-4層は黒褐色を呈し遺物を含む点で11層に対応するものと考えられる。I・II層は、堆積層レベルと5区の位置から、IV区6B層検出河川跡の堆積土と対応する可能性があるが、この地域では各時期の旧河道が複雑に存在するので、どの時期のものに相当するかは今後の課題である。

なおI～IV層を、今回の調査区より西側ないし南側で行なわれた過去の調査層位と、上記のように対応させた場合、各層とも数1cm程低くなっている。

#### 4. 検出遺構と出土遺物

今回の調査区は、堆積層の上部が攪乱を受けていた。この攪乱は、本調査のI・II層を過去の調査における基本層の6層に対応させた場合、弥生時代以降の堆積層と遺構を完全に破壊したことになる。したがって弥生時代以降の資料は何等得ることができなかった。残存する下部堆積層では、縄文時代の遺構検出の可能性があったが、調査部分では遺構は検出されず、僅かながら縄文土器を包含する土層（Ⅲ-4層）が存在を確認することができたに止どまった。包含層の層厚は30cm程で、炭や焼土も含まれる。遺物の量は少なく、縄文土器片が7点出土しただけである。出土した縄文土器片には、3条の沈線文のあるもの（写真1左上）、L R L 縄文に沈線のあるもの（写真1右上）、L 横糸文（写真1左）、R 横糸文（写真1右）がある。

#### 5. 遺構の所属年代とまとめ

1. 本調査区においては、弥生時代以降の堆積層及びそれに伴う遺構は破壊されていた。

2. 残存する堆積層のうちⅠ・Ⅱ層は河川堆積土と考えられる。この河川については、位置およびレベルから仙台市高速鉄道関係調査下ノ内遺跡N区6B層検出の河川跡と関係する可能性がある。
3. 堆積層Ⅲ-4層は、縄文土器の包含となっている。この層は仙台市高速鉄道関係調査の下ノ内遺跡基本層の11層に対応するものと考えられる。11層の包含層は、縄文時代の住居跡が検出された本調査区の西方130m付近では多量の遺物が出土しているが、住居跡から離れると遺物量は極めて少なくなっているものの、本地区まで伸びていることが明らかになった。11層出土の土器は「大部分が中期末葉（大木10式）から後期初頭のものであり、僅かに中期中葉（大木8b式）のものもある。」とされているが、今回出土したものもこの時期に相当すると考えられる。
4. Ⅲ-1～6層は河川跡のような凹地への堆積土層で、凹地の形成時期は縄文時代と考えられる。
5. 本調査区の基盤は、砂礫層となっており、その上面標高は8.2m前後で北に向かって緩やかに下がっている。註

本調査区N層の砂礫層について、東北大大学地理学研究室 松本秀明助教授に米跡のうえ観察していただいたところ、当該砂礫層については、富沢地区において約7000年前の年代が得られているものと風化の度合い等が類似するとの所見をいただいている。

#### 参考文献

- 桜原信彦：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅰ』仙台市文化財調査報告書第40集 1982  
櫻原信彦：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第56集 1983  
渡辺忠彦：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅲ』仙台市文化財調査報告書第69集 1984  
工事監督：「下ノ内遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅳ』仙台市文化財調査報告書第82集 1985



写真1  
III-4層出土縄文土器



写真2  
擾乱部完掘状況



写真3  
基盤疊層検出状況



写真4  
下ノ内遺跡第5次  
調査区土層断面

---

仙台市文化財調査報告書第163集

**富沢・泉崎浦・山口遺跡(4)**

—高武遺跡第70～75・77・79次発掘調査報告書—

**下ノ内遺跡**

—第5次発掘調査報告書

1992年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区塙町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社 共 新 精 版 印 刷

仙台市宮城野区日の出町2-4-2

TEL 236-7181

---

